
男前な友人

siko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男前な友人

【Nコード】

N4763E

【作者名】

s i k o

【あらすじ】

俺の友人はとても良い奴だ。男前で、面倒見も良くて、さっぱりした性格で、当然女にも良くモテる。いや、そいつ女なんだけどね。

主な登場人物

かみじょう たける

神承武

この話の主人公。神承が姓で武が名前。

菖蒲里高校2年の高校生。黒髪で身長175センチ体重63キロ、と、まさに普通の男子校生。

顔も、人付き合いも、知能も、運動神経も、あらゆる面でそれなりに恵まれた物を持っていて、特に剣道に関しては天才と呼べる程の跳びぬけたポテンシャルを持ちながらも、何の目的も持てずに居るために特別な事に打ち込むことも無く何をするでもなく、ただ日々を惰性で生きている。

今まで何の疑問も無く生きてきたのだが高校二年のこの時期に来て初めて、自分の生き方に僅かな焦りを抱いている。

やなせ ゆう
柳瀬祐

菖蒲里高校2年、女子剣道部部长。柳瀬が姓で祐が名前。

身長167センチで女子にしては割りと長身でもある。武の友人。武いわく「肩口で切りそろえられた黒髪にやや高めの身長。すつと伸びた背筋は彼女の存在を身長以上に大きく見せている。

顔の造詣は間違いなく美人なのだがやや釣上がった強気そうな眉と目、通った鼻筋と二ヒルに笑う口元が、彼女を必要以上に男前に感じさせる。

性格も豪快で、まさに姉御肌と言うか、いや、それを超えて男前と言うか、そう言う性格の女だ。

そのせいか男よりも女性にモテて、去年女の子から貰ったラブレットの数は我が校一のイケメン瀧川君を差し置いて見事一番を獲得

した」らしい。

笑う時に口の端を吊り上げて笑う所謂「悪役っぽい」笑い方をする癖がある。

エレン・ブレンターノ

菖蒲里高校2年 日本育ちのフランス人。綺麗なロングヘアの金髪で、容姿の印象は「異常に整った顔をした勝気なフランス人形のような」と評される。

武とは面識は無い。

女性からの人気では柳瀬に負けるが、純国産では真似の出来ないグラマーな身体と美貌で、男性からの人気は圧倒的である

日本育ちだから日本語は当然喋れるのだが、それだけでなくフランス語と英語もマスターしている。

と言うか、勉強は全てトップの成績、で勉強、運動、美貌どれも死角は無いというパーフェクトな事で通っている。

実家はフランスのブレンターノ重工で、つまりトンでもないお嬢様でもある。つまり経済面でも完璧。

その圧倒的な能力と、アイドル性と言うよりはカリスマ性で生徒会長となり学内での生徒会の勢力と権力の拡大を図る。

どうみても生徒会長としての職を楽しんでいるようにしか見えないが、当人いわく「これも社会に出た時のためのちよつとした予行演習なのよ」らしい。

全てにおいて欠点の無い圧倒的な能力を持つが、唯一の欠点を上げるとすれば、その高飛車な性格くらいか……？

主な登場人物（後書き）

暇つぶしに書いてみました。

こつ、だらだらーとした話書くの好きなんですよね。
面白いかどうかは知りませんけど。

憐神が書いていると疲れるので筆休めでこれ書いてます。
ほつとくのも勿体無いのでアップしました。

あ、あと憐神は凄く先まで書けています。
ただアップしないのは理由がありまして。

今書けている所まででアップしても多分読んで下さった方は???
?ってなる事請け合いなので、とりあえず切迫した謎が明らかにな
る所まで書ききってから数話纏めてアップする予定です。

超遅筆で申し訳ありませんが、待っていてくれる人が居たら嬉しい
です。

もう、少し(?)お待ちください。
では。

ブローグ

授業時間が終わってから3時間程が過ぎて、下校時間が迫る。

図書室で本を読んで時間を潰していたが、下駄箱まで降りてきて来て夕暮れに染まる空を見上げながら、俺、かみじょう たける神承武はふと考えた。

いや、バランスを取るって言うのは難しい事だよな。

高校二年の俺は、まさに人生の曲がり角に居るわけだ。これからどうなっていくのか、自分はどんな道を進むのか。まさに今する決断によって俺が歩む道は大きく別れていくのだから。

さて、まず文系にしようか、理系にしようか、それすらも決まっていない。

周りの奴らは、恋愛に、勉強に、趣味に、部活にと、やりたいことを見つけてそれぞれに青春を謳歌しているように見える。

だが、俺はと言うと……特に興味のあることは無い。やりたいことも、見つかってない。

何となく中学を卒業して、何となく高校へ入学して、そしてそれなりに勉強して日々を無意味に過ごしている。

いや、無意味かどうかは解からない。敢えて言えば生きるために生きている感じた。

何事も目的も無い、好きな事も、好きな人、いや、友人は居るしそう言う意味で好きな人はたくさん居るが、恋愛経験も無い。

特別に不幸ではないし毎日がつまらないという事も無い。

でも、目的が無いのだ。人生の目的といえる物が。

別に、特別な劣等感や、不満がある訳ではない。

ただ、この沈み行く夕陽。紅く染まったグラウンドに、響く運動部の掛け声。

そんな世界の中、1人していると何となく、胸の奥で何かがチリチリと燦る様な僅かな焦燥感があるのだ。

まあ、正直に言ってしまうえば、俺は青春と言うものが解からない。でもきつと懂れている。

周りには、「そんな物には興味は無い」とか言ってカッコつけているけど、本心ではそう言った青春を謳歌している人間が羨ましいのだろう。

きつと、それは今しか体験できない感情。今しか体験できない時間。二度とは帰ってこれない時代。

そんな、人生で最も美しいと言われている瞬間を経験出来ないのが、悔しくて、齒痒いのだ。

まあ、でも、しようと思っただけ出来る事でも無し、こればかりはどうしようも無いんだよね。

はあ、本当に、青春を楽しめてる奴が羨ましいよ。

男前な友人

「お、怠け者の神承じゃ無いか。神承も今から帰りなの？」

む、俺を怠け者と呼ぶこの声は……。

振り返ると体育館の入り口に1人の少女が腕を組んで立っていた。肩口で切りそろえられた黒髪にやや高めの身長。すっと伸びた背筋は彼女の存在を身長以上に大きく見せている。

顔の造詣は間違はなく美人なのだがやや釣上がった強気そうな眉と目、通った鼻筋と二ヒルに笑う口元が、彼女を必要以上に男前に感じさせる。

ああ、コイツは、物思う俺が今一番会いたくなかった「一つの目的のために努力する事で青春を謳歌している」羨ましい奴だ。

いや、凄く良い奴だし友人としては気に入ってるんだけどね。

「別に自分の事を怠け者だと思ったことは無いけど、確かに今から帰りだ。神承も……ってことは柳瀬^{やなせ}も剣道部はもう上がったのか？」
「うん、私も。何故か部員全員の調子も上がらなくてさ。いつもより少しだけ早く上がりになったのさ」

「ふーん、練習が早く終わって良かったな」

「いや、私は神承と違って別に怠け者じゃないからね。別に長い練習が嫌だ何て思っては無いさ」

そうやってクックククと人が悪そうに笑うコイツは俺の友人の柳^{やな}瀬^せ祐^{ゆう}。三年生を差し置いて女子剣道部部长を務めるツワモノだ。

いや、その腕前も中々の物なのだけど、まあ少なくともそれなりに強豪である我が校の剣道部の中でも断トツの腕前ではあるのだけ

ど、それだけではなく性格も豪快で、まさに姉御肌と言つか、いや、それを超えて男前と言つか、そう言う性格の女だ。

そのせいか下手な男よりも女性にモテて、去年女の子から貰ったバレンタインのチョコの数は我が校一のイケメン瀧川君を差し置いて見事校内一位を獲得したらしい。

本人は「私はノーマルなのに……貰っても、お返しが……お、お金が、足りない……」ってボヤいてたけどな。

全く、少しは分けてほしいぜ。

「そうかよ。まあいい、じゃあ俺は帰るから」

「おっと、そうだ。ちょっと待ってくれない神承？ 三分間で支度するから一緒に帰らない？ 方向同じじゃん」

「ん、まあ良いけど奢らないぞ？」

コイツと一緒に帰ると何故か買い食いすることが多くなって今月は結構使ってしまったのだ。

「ああ、大丈夫、今日はそんなにお腹も減って無いしね。あ、缶コーヒーくらいだったら奢るから、だから待っててくれない？」

「お、マジで？ らっきー、奢ってくれるなら待ってるよ」

「くつくく、相変わらず付き合いが良いね神承。じゃあ、すぐ来るから待っててよ」

「おっ」

そう言うつと体育館の中へと戻っていく柳瀬、そう言えば剣道部室は体育館の中だもん。もうしばらく、行って無いけど。

あ、ちなみに剣道部の練習スペースは部室から少しだけ離れてて体育館に隣接されてる闘技場だ。しつこいようだけどしばらくは行って無いけど。

でも部室は体育館内なんだよね。

ああ、それにしても喉が乾いたなあ。早く柳瀬来ないかなあ。
はあ、暇だし、1人ぼーっと夕陽を眺めるかな。だって他にすることがないんだもん。

ぼーっ。

紅い帰り道

夕陽に赤く照らされた学校帰りの坂道。俺は缶コーヒーを、柳瀬は500mlのスポーツドリンクのペットボトルを飲みながら二人でポクポクと歩く。

陽はもうかなり深く傾いていて、二人の影は長く長く伸びていて、その先は少し重なっている。

ちなみに俺が飲んでいるのはジョージアコーヒーのマックス。この下品で頭痛がするほどの異常な甘さがたまらないぜ！

「なあ……その、武？」

「ん、なんだよ祐、突然名前で呼んで」

「あ、嫌だったりした？」

「いや、別に良いんだけどさ、何か用か？」

「そのさ、どうしても剣道部に戻る気は無いか？」

「ああ」

「どれだけ言っても？」

「ああ。って言うか最近ホントお前会ったびに戻れって言うてくるのな」

「はあ、だってさ、本当に、ほんとーっに……勿体無い」

「なんでさ、別にお前女子剣道部だし関係ないだろ？」

「そうは言っけどね神承、私は実際の所、神承以上に凄い剣道家って言うのを見た事が無いのよ。正真正銘、神承の剣は天才のソレなんだよ？」

「でもさ、去年はインターハイで俺は敗退したじゃんかさ」

「そりゃ神承が勝った後ガッツポーズしたからじゃない」

「だって嬉しかったんだし」

「はあ、これだから……」

そうなのだ、去年の敗退理由は勝利のあとのガッツポーズ。これは剣道の試合では禁じられているのだ。やった時点で負けになる。だが、まあ実際の所、こいつの言う事は事実だろう。正直、自分でも俺は剣道の才能はあると思う。

中学の頃教師に進められてから今まで何百と試合に練習を重ねてきて、そのどちらでも今まで俺は一度も、一本も取られた事は無い。剣、正確には竹刀だが俺は剣を握った時に、全く相手に負ける気がした事がないのだ。

威圧感も、恐怖感も、やられるとか危ないとかそう言った感覚を持った事も無い。

どう言う訳か負けるイメージが湧かない。腕力はそれなりにあるけど運動神経もそんなオリンピック選手のように良いわけではない。ただ、どう言う訳か剣と意識した物を握った時には自然と身体が動いて気がついたら相手に一本を入れた後なのだ。

だから、インターハイの決勝戦の試合を見て、全く凄いと思わなかったし、それどころか名のある剣道家の動きなどを見ても全く「負ける」と言う感じは無く、確実に勝てる自信もある。

ただまあインターハイでガッツポーズしたのは相手がなんか見えないように挑発とかして来るイケスカナイ奴だから出来るだけ衝撃が深く伝わるように殴ってその結果防具の上から打ったのに見事相手を気絶させる事に成功したからだ。

って、話が少し脱線したな。

「その、さ。神承がもう剣道をやりたくないって言うのはやっぱあの時平山に滅茶苦茶怒られたのが原因なの……？」

あ、平山って言うのはうちの男女共通の剣道部顧問のオッサンね。嫌な奴じゃないんだけど無駄に熱血なことで嫌われてはいないけど近

づきたくないと言われる妙な教師だ。

「まあ、ね。正直、ソレもあるよ。何でこんな滅茶苦茶言われなくちゃならんのだって。別にそこまで言われてまでやりたくないやつで。でもやっぱり一番の理由はさ……」

「一番の理由は……？」

「俺ってばさ、別に剣道が好きじゃないんだよね」

ズルッ！

「おう、どうしたーんだーねー、柳瀬ちゃん。派手に転んで」

「何で棒読みになるのっ！　って言うか本当？　本当に神承は剣道好きじゃなかったの！？」

「ああ、中学時代に授業でやってるのを教師が見て薦められて始めたけど、楽しいって思ったことは無いな。そもそも人を竹刀で叩くって言う行為に俺は魅力を感じないんだよ」

「いや、それは別に良いんだけど、でも本当に？　あんなに強いのに……？」

「ああ、まあ正直俺は剣道が巧いと自分でも思ってるよ？　でもさ、それと好きかどうかは関係ないと思うんだよね。何かの漫画で読んだんだけどこういうセリフがあってね、「きつと野球選手の中にも別に好きじゃないけど巧いからってだけで仕方なく野球選手をやってる人が2、3人は居ると思うんだよね」って言うセリフ。俺の場合がそれで、これがサッカーや野球だったらそれで生活していけば良いけど剣道じゃあ、いつか大人になった時それだけやって生活するわけにも行かないだろ」

「それはそうだけど……はあ、そうだったなんて、知らなかったわ」

「まあな、だって言うて無いもん」

「それじゃあ、今までの私の努力はすべて、馬の耳に念仏だったわけかあ」

馬の耳で……。

「せめて暖簾に腕押しと言ってくれよ」

「はあ、どっちでも良いよそんな事。でも、そうかあ、神承が剣道が好きじゃないんだつたら無理に誘うのも酷な話なのかなあ」

「うーん、まあ別に不愉快ではないけど面倒かな」

「そっかあ、はあ。じゃあ少し自重するかな」

「おう、そうしてくれ」

「あ、でも戻ってきたくなったら何時でも言ってくれよ？ 私が平山に話をつけて神承は全く不満の無い環境で再開できるようにするから」

「ああ、まあ多分無いがその時はよろしく頼むわ」

「ふふ、任せなさいって。あ……」

「ん？」

そうして柳瀬の視線の先には丁字路。ここで俺とコイツは帰り道が別れる。

日ももう殆ど沈んで薄明の中の微かな灯りの世界。そろそろ街灯が着き始める。ここで俺たち二人の下校は別れ道を辿るわけだ。

ちなみに丁字路の真ん中にはゴミ箱が置いてある。と……。

「えいつ！」

柳瀬はまだ５メートル以上はあるつかと言う距離でペットボトルをゴミ箱へと向って放り投げる。

投げられたペットボトルは綺麗な放物線を描いてゴミ箱に入った。

「おおー」

「どう？　こんな物よ。神承は？」

そう言って俺のほうを向いて口の端だけをあげてフフンと悪人ぽく嗤う。

ム……。

「ふん、こんなの簡単だね」

「お、言うじゃない神承。じゃあやって見せてよ」

「いいさ。やってやるよ」

そう言ってとくに飲み干していた空き缶を持って構える。

まずはセットポジションを取って、と。むう、あまり関係ないか？

「はやくなげろー」

「ええい、^{まま}儘よ！」

そうしてスローインぎゅ。投げられた缶は……。

カラン！

「イエイツ、ストライカー！」

「むう、やるわね神承。外したら問答無用で明日の昼ごはん奢らせるつもりだったのに……」

「ゲツ、最初っからそれが目的かよ」

「まあね。やっぱり賭けは先手に限るのだよ神承」

「くだらねー！」

「ふふ、まあいいや、じゃあな、神承。また明日！」

「ああ、ばいばい、柳瀬。また明日な」

そう言って、二人はバラバラの道を歩き帰路についた。

紅い帰り道（後書き）

ふう、本当に気楽に書いて良いね。
なんか自分が一番楽しんでます。
良いんだろうか。

あ、エレンは次にでできますし、憐神も頑張ってますし、大丈夫です。
す。

何がかは知らないけど兎に角大丈夫ですよ！ 多分。

ラブレターと友人

——翌日、朝。

うららかな春の朝日に照らされた、学校へと向う坂をポクポクと登りきり校門をくぐると、体育館の前で座り込んで靴を履き直している見慣れた顔があった。

そうだな、同じクラスだし声をかけるか。

「よう、柳瀬。昨日ぶりだな」

すると、少女は靴紐を結びなおしながら、俺を見上げた。

「ん？ ああ。神承か。どうしてわざわざ体育館のほうに？ あっ、そうか。遂に昨日の説得で剣道部に復帰する決心が……」

「いや、そう言うわけじゃないさ。ただ姿が見えたから教室まで一緒に行くってだけの話で」

「あ、そう言うこと？ ちょっと待って」

そう言って手早く靴紐を結び立ち上がる柳瀬。

「よし、出来た。悪い、待たせた」

「いや、いいぜ。じゃあ行くか」

「ん」

そうして二人で教室までの僅かな距離を歩く。そして下駄箱の所へ来て、それぞれが上履きを出そうとしているその時……。

「う……」

「ん？ 如何した、柳瀬？」

「その、神承。またこれが……」

そう言つて、俺に見せるのは一通の封筒。そう、紛う事無き、ラ
ヴ・レターだ。

「ふう、またか。相変わらずステレオタイプなラブレターを出す人
間が多いんだなうちの高校は」

「それは仕方ないって。生徒心得の中にも書いてあるんだし」

「そうだよなあ、やっぱ変だよなああの心得」

そう、うちの高校の生徒心得の中には、校則や制服の規定の他に、
「生徒同士の恋愛の告白には、出来るだけ恋文を使用する事」と言
う意味不明な一文があるのだ。いや、マジで。

ちゃんと生徒手帳にも書いてあるし。何でも現校長の趣味らしい。
まあ、そんな事はどうでもよくて……。

「ま、教室に着いたらゆつくり読みなよ」

「うん、まあ、そうするけど……」

そう言つて、少しだけ沈んだ表情で歩き始める柳瀬。

コイツはいつも告白を受けるような時はこういう表情をする。ど
うも、断ることで自分自身も少し傷ついているみたいだ。

そう言う経験が圧倒的に少ない俺から見ても、気にしすぎだと思
うんだけどなあ。まあ、それがコイツの良いところでもあるんだけ
どさ。

そう、友人の俺が言つのもなんだが、柳瀬はモテるんだ。それは
もう、男女、関係なく。

女なのに告白されるのが男だけでは無い時点で、と言つか、比率

にすると女に告白される事の方が多い時点で普通にモテて居るとは言い難いのもかもしれないが、でもやはり事実コイツは男女共からモテるのだ。

まあ、確かに好きになる気持ちは俺も解からなくは無い。姉御肌と言つかそれを通り越して男前なぐらいにサツパリとした性格で、その性格が顔に出ているとはいえやはり勝気な雰囲気美人だし、面倒見も良くてその癖さりげない気遣いも出来る。

誰とでも訳隔てなく気持ちよく話せる性格だし、気負わないし、友達として付き合っても最高に良い奴だし。つまり、容姿性格共に申し分ないのだ。

だからコイツに告白したくなる男の気持ちも、また女の子の気持ちも解からないではない。

そのせいか、今日みたいな事は実はそんなに珍しくない事どころか月に数回は起こる恒例のイベントのような物なのである。

と、余計な事を考えていたら教室に着いていた。早速席について封筒を空け手紙を読み始める柳瀬。

「どう、今回も女？ それとも男？」

「ん。どうも男らしい」

「ふーん。久しぶりだな、ここんトコ女からが続いてたからさ」

「うん、まあ、そうなんだけど……」

そう言って、手紙を仕舞う柳瀬。

「はあ、昼休みに屋上に来て欲しいってさ」

「ふーん。で、どうするの？ また断るのか？」

「そうするしか無いよ。だって、私はこの手紙をくれた早坂って言う人の事知らないしね。気持ちは嬉しいけど知らない人とは付き合

えないさ」

「へー、相変わらずお堅いこつたな」

「……」

「ん、どうかしたか柳瀬？」

「そのさ、神承」

「なんだよ」

「今日って、弁当？」

「ああ、そうだけど、それが何か？」

「今日さ、昼休み、断ってくる後だから10分くらい遅れちゃうけどさ、昼ごはん食べるの付き合ってくれない？ 場所は教室で良いから」

「別に良いけど。でも珍しいな、柳瀬から昼飯誘うのって。いつものオナゴ友達と食べれば良いのに」

「まあ、そうなんだけどさ。ちよつと今日は神承に愚痴を聴いてもらいたい気分になってね」

「へー。まあ柳瀬もモテモテなのと、女子剣道部部長の仕事と、友達付き合いと、あと後輩の面倒を見るのにとかで何だかんだで色々大変そうだしな、良いよ。愚痴くらいならいくらでも聞いてやるよ」

「ん、ありがと。あ、そろそろ授業始まる。ちゃんと寝ないで授業受けるんだぞ神承？」

「ははは、大丈夫だって」

そう言ってヒラヒラと手を振って席へと戻る。

と、同時にチャイムがなり教師が入ってくる。

ふふ、それにしても相変わらず人の事にまで気を使う奴だぜ柳瀬は。面倒見が良いというか何と云うか……。

ラブレターと友人（後書き）

平穏な話です。

なんだかとっても山無しオチ無し意味無しのやおい話になりそうな予感。

まさに筆やすめ。気楽が一番です。

それから、なんと初めてのランキング登録。初体験です。

よりによって暇つぶしの作品を登録するとはどうかとも思いましたが、だってこれ位しか健全な話が無いので仕方が無いのです。

あ、うる覚えですけど確か投票できるのは月一回ぐらいだった気がします。

面白かったという奇特な人は、気が向いたら押してください。

今回も読んでくださった方、ありがとうございます。

昼休み

—— 昼休み

「ハア、ハア」

知らず、息が荒くなる。しかし、我慢だ。何事も忍耐が必要だ。

「はあはあ、ハア」

そう、必要なのは我慢、その忍耐を過ぎた先に目指すべき物が……。

「何をハアハアしてるんだ。気持ち悪いぞ神承」

見上げると、少し引いた雰囲気の不気味そうに俺を見る柳瀬が居た。

「って、何でハアハアしてたかってお前のせいでハアハアしてたんだって」

「ん？ 私のせいってどう言う意味さ」

「だってさ、俺今朝飯食いそびれてたんだよ。でもお前と一緒に飯食おうって誘ったもんだから俺はこうしてっ！」

そう言いきり鞆から包まれたままの弁当箱を取り出してドンと机に置く。

「全く箸をつけずに待ってたんだぞ！ この空腹を我慢するのに必

要な勇氣と精神力がお前にわかるか！」

「あー、そりゃあ全く解からないね。解かる訳も無い。だってわたしはそんな馬鹿なことをしたことが無いからね」

「なっ、だいたい俺が腹減ってるのに弁当食うの我慢してるのはお前の為なのにそりゃあ、あんまりにもあんまりな意見じゃないか！」
「ああ。それについて素直に謝るよ。ごめん。でもさー」

そう言つて自分の席に戻り弁当箱を鞆から引つ張り出して戻つてくる柳瀬。

「わざわざ食べるのを我慢しなくても先に食べ始めておいてくれても良かったのに。私は神承に話を聞いて貰いたいただけだったわけだし何も食事の進行速度まであわせる必要は無いんだし。それとも何かい？ 神承はそんなに私と一緒に食事を取りたかったのかい？」

「ばっ、そんな訳無いだろ！」

「くつくつく、相変わらず面白い反応をする奴だよな神承は。そんなにムキになつて否定しなくても良いのにさ」

そう言つて人が悪そうにクツクツと笑う柳瀬。くそっ、なんか面白く無いぞ。

そんなことを思つてると、俺の弁当の隣に突然缶コーヒーと購買で売つてる杏仁豆腐を置く柳瀬。

「ん？ なんだよ、この飲み物とデザートは？」

「いや、さ。その付き合わせたお詫びのほんの気持ち」

「へっ、くれるの？ 良いの？ 俺遠慮しないよ？」

「それぐらいで遠慮されても困るって。どうぞ頂いちゃってよ」

また氣を使つたのか。ふう、相変わらず良い奴だな。柳瀬はさ。

「まあ、ありがとー。でもわざわざそんなに気を使わなくても良いのに」

「んー。まあそうかもしれないけどさ。大したモンじゃないでしょ？」

「そうだけどさ。でもありがとな。じゃあ、飯食おうぜ？」

「うん。そうだね」

そう言って二人でいただきますと言って弁当の蓋を開ける。

俺のはオーソドックスな自家製の弁当。ビック・マムことマイマザー作。

それに対し、柳瀬の弁当は二段の物。一段目が白米で二段目は一面の……って、なんだこれ？

「おい、柳瀬。その二段目のおかず（？）らしき物は一体なんなんだ？」

「ん？ これは昨日の晩御飯の残り。作りすぎちゃって残っちゃったんだよね」

そう言って何故か俺から目を逸らしてあはははーと不自然に笑う柳瀬。

「って、そんな変な笑いでごまかされないぞ俺は。だから何なんだよそれは！」

「んー、まあ、野菜炒めだよ」

「野菜炒め……」

確かに、良く見れば、それは普通の野菜炒めだ。

だが、しかし、駄菓子菓子、想像して欲しい。二段の弁当だから箱が二つ有るのだ。そのうちの一つが全面が野菜炒め。

ひたすらもう親の敵のように野菜炒め分100パーセント。そり

やあもうギツシリと詰まってるんですよ。野菜炒めだけが。

これは中々に壮絶な眺めである。と言うかこんなヘンテコな弁当見たこと無い。

「って言うか、柳瀬あいかわらず料理作るときに分量が巧く出来ないのな。普通野菜炒めなんて冷めたら不味いから一回で食い切れる分しか作らんだろうにさ」

「んー、どうもこればかりはさあ。巧く行かないんだよね。と言うか流石に口の中が野菜炒めの味しかないわけだが……時に神承君」

「ナンドイ柳瀬さん」

「その、神承クンの弁当のそれ、その揚げ物」

「ん？ このから揚げ？」

「ああ、それ。その、それは、実に美味そうだな」

「ああ、美味しいよ」

「くれ」

「……」

さて、どうなのだろうか。この状況は。

飯にもモテモテの花の女子高生ともあろう者が、人の弁当箱の一点を異常までに凝視しながら、問答無用な勢いで「くれ」と言い切ってしまうのは。

良いのだろうか、いや、良く無い。全国的女子高生に夢を持つ男性たちと、今まで柳瀬に告白してきた沢山の夢見る少年少女たちの面子にかけて、決して良くは無いと思うのだが……。

「ハア、まあ、一飲一飯の恩もあるしな。やるよ」

「ナイス！ あいかわらず話がわかるねえ神承は。じゃあ……」

「っと、ストップ。その前に！」

「ん？ なんだ？」

「そのやたら豪快な野菜炒め少しくれ」

「ああ、なんだ。そんな事か。良いよ、いくらでも食ってよ」

「おう、じゃあ……」

そう言つて、とりかえつこタイム！

柳瀬の弁当箱から野菜炒めを一つまみ。そして口へと運ぶ。

普通に考えて前の日に作られた冷めた野菜炒めなんか不味くて食えたものじゃないはずなんだが……。

「やっぱり、何故かウマいんだよなあ」

そう、コイツはやたら豪快な料理しか作れなくて、分量也大抵多く作ってしまうのだが、何故か味だけはやたら美味しいのだ。

これだつて冷めててこんだけ美味しいんだから作りたては相当美味かったのだろう。

すつごく不思議だ。

「ん？ そうか？ そりゃあ良かった」

「つて、なニー！ 柳瀬、なに勝手に人の弁当のから揚げ3個も自分の弁当の方に取ってんだよ！」

どう考えても取りすぎだろ！

「くつくつく、相変わらず変な所ミミっちいよなあ神承は。そんなんじゃ女の子にモテ無いぞ？」

そう言い切りケケケと笑いながらもから揚げを食ってしまう柳瀬。むう、現在進行形で女からモテてる奴の意見だと無碍に出来ない

ぜ。

「って、そうだ。今日告白されてたんだよな。結局どうしたんだよ。また振ったのか？」

「ん？ まあね。丁寧に断らしてもらったよ」

「へー、今日は男だったんだろう？ 何でまた……カッコ悪かったのか？」

「いや、多分世間一般から見ればイケメンって言う部類に入と思う」

「ふーん。じゃあ告白受ければよかったのに。勿体無い」

「何で？ 別に私が世間一般の感覚に合わせる必要は全く無いじゃないか。私の目には魅力的に映らなかったんだって」

「良く解からないな。何が柳瀬の目に魅力的に見えなかった？」

「いやね、極端に痩せてたからな。やっぱり男はある程度がっしりしてて見た目から頼り甲斐があるやつじゃなきゃね」

「ほー。つまり柳瀬の好みは極端に痩せていない男ね。と言うことは……そうだな。英語の山村なんてどう？」

ちなみに山村とは俺たちの英語教師の山村大二（48歳、独身）の事である。

生徒からは西郷どんとか武蔵丸などと呼ばれてマスコットのように親しまれている、人気者の先生だ。

「アハハハハ、面白い冗談を言うね神承。山村先生は痩せて無いではなくて肥満体とかメタボリックって言うんだよ」

「むーん。ダメか……」

ちなみに山村の体重は、100オーバー。でも生徒からの人気、ブライスレス。

「あとの条件は……んー、そうだなあ。私より強い男……かな」

「んな奴早々居るわけねー。って言うかさ、どういう意味において柳瀬より強ければ良いんだよ」

「それは、んー、何て言うか、抽象的な意味で言ってるだけでさ、具体的には解からないんだよね。まあ、何でも良いよ別に」

なんだ、その俺の屍を越えて行けみたいな条件は。

「へー。でもまあ、なんだったとしても柳瀬より強い男なんて中々いないぞ？」

「そうでも無いさ。だって、取り合えずだったら、神承だってオツケーなんだし」

「は？」

「いや、だって神承私より剣道強いでしょ？　だったら私の守備範囲内だって事になるじゃん」

「でも、だけど俺は男だし柳瀬は女だし俺のほうが強くて当然じゃ

……」

「さつき、神承自身が、「私より強い男なんて早々居ない」って言ったよね。と、言う事は神承は私の眼鏡に適う、数少ない男って言う事になるんだけどなー」

そう言っただけでクククとかみこるように笑う柳瀬。

その笑いを見て、ああ、からかわれてるんだって気づいた。いつもの俺ならお茶らけて、ふざけて返事しただろう。

だが、どうしてだろうか。今日は不思議と言葉が出ない。

何でだろう。昨日、少し考えた事が影響しているのかもしれない。俺には目的がなくて、柳瀬にはある。

だからだろうか、俺には柳瀬がとても輝いて見えた。

「神承？」

「……」

「神承ってば！」

「あ？ ああ。ごめん柳瀬。少し考え事してただけ。俺なんか強くないって。柳瀬の方がよっぽど強いよ」

「へー、そうかな。私はこと剣道においては神承に敵うと思えた事は無いけどね。まあいいや。それより神承」

「ん？」

「今日の放課後って暇？」

「まあ。帰宅部だしやること無いし暇だけど」

「じゃあさ、今日帰り剣道部寄ってよ」

「ん？ なんでさ。また入部の勧誘？」

「はは、違うって。今日はね、少し面白い人が来るんだよ」

「面白い人？ 誰だよ一体？」

「それは来てからのお楽しみって事で。どう？ 来る気になったかい？」

「むう、気になるから行ってやるよ」

「ああ、それが良いと思うよ。多分退屈はしないと思うから」

そう言ってクックククと悪役っぽく笑う柳瀬。

それにしても相変わらず普通には笑えないんだなコイツ。

昼休み（後書き）

うーむ、我ながら健全なお話だなあ。

どうも。珍しくペースが速いs i k oえです。

でもしばらく旅に出ます。ノートパソコンは持つてくから影響無い
と言えは無いけどあるといえはある。

どうなるかは自分でも解からないです。なまぬるく見守ってもらえ
たら嬉しいです。

あ、あとランキング見て少しビックリ。結構上のほうに名前があり
ました。

実際に見てみると嬉しいものですね。

戯れで登録しただけだったので実はそれほど興味は無かったのです
が。

でも見ると嬉しくなっちゃう。単純な物です。

あ、投票くださった方、ありがとうございます。

それと、読んでいただいて、本当にありがとうございます。
それでは、また。

男前柳瀬と純情（変態）神承

——放課後。

「メイン！」

「メイン！」

じたばたじたばた。

さて、擬音とセリフでお解かりとは思うが、やってきたのは体育館の隣に隣接して立てられた闘技場の中の剣道部の使用しているスペースだ。

ちなみに今居るのは女子剣道部の練習している所。

何て言うか去年の夏の大会が終わってすぐに退部したせいかな男子剣道部には顔を出しづらい状況だから直接こっちにやって来たのだ。

はあ、でもやっぱりここに来るのは久しぶりだよなあ。

久しぶりに来ると、なんて言うか、やっぱり懐かしいよなあ。

天窓から入る光によって明るく照らされた室内。一生懸命に竹刀を振る少女達の掛け声と、闘技場特有の澄んだ空気。

……ん？ 澄んだ空気？

クンクンと良く匂いを嗅いで見る。それでもまだ解からないから今度は深呼吸。

……。

やっぱり澄んだ空気じゃネーヨ！　つつつか汗臭いヨ！

何で剣道つてこつても臭い競技なんだろうか。特に道着や小手の匂いは壮絶な物があるしなあ。

あ、でも逆に考えるんだ。この匂いはすべて目の前で運動をしている世の男性方憧れの「花の女子高生」の体臭なんだって。

そう、それはもう彼女達のありとあらゆる所の匂いの凝縮されたエッセンスなんだぜ？　それはもうなんつーか男のロマン！

おおー、そう考えるとなんか意味も無く興奮してきたぜ。よし、深呼吸して体の深いところまで女子高生成分を浸透させて補給するぜ！

すーはーすーはー。はーっ、いっつフレグランス！　堪らねーっ！

「何をスーハースーハーしてるんだい？　少し気持ち悪いよ神承」
「つて、柳瀬えっ!？」

み、見られた！

「こ、コレはだなあ……」
「コレは？」

そうしてそのやや釣り上がった、でもキラキラと光る綺麗な目で覗き込むようにこちらを見る柳瀬。ううう、そんな純真な目で俺を見ないでくれえ……。

流石に女子高生のかほりを嗅いでもしたとは言えんし、でもとりあえずこの場はごまかさねば……。

「実はコレはさ……」
「コレは？」

「その、どうも今日は朝から肺の調子が悪くて、それで少し息苦しかったら深呼吸を試してみたんだけど」

オイオイ、何だその言い訳。自分で言っても無理あり過ぎだっ
て思えるんだから相当なもんだよ！

「それは大変じゃないか神承！ 肺か？ 肺が悪いのか！」

って、信じてるよコイツー！

だが、そんな俺の心の声も何のその。柳瀬は慌てて俺の胸を両手でペタペタと触りだす。

「って、おっ、オイ！」

「どうした！ ココが苦しいのか？」

そういつて胸の一点を慎重にさすりさすりとしてくる柳瀬。

「お、おい、そんな……そこを触られたら……」

なんだか気持ち良くなっちまうじゃないか……って違うう！
なに感じて……もとい、気持ち良くなってるんだよ俺は！

「どうした！ 顔が紅いぞ？ もしかしてしんどい？」

「おい、ちょっと待て。暴走するなって。ストップっ！ すとっぷ
ゆあはんど！ 落ち着けって。な？」

「あ、ああ」

「ちよつと、離れてくれないか？」

「なんでさ？」

「それは……」

そうして、長身の柳瀬とは言え男女差の為に僅かにある身長差の為に、やや下から心配そうに俺の顔を見上げる柳瀬を見る。

いや、確かに滅茶苦茶凜々しいし、意識した事はないし、男同士の友人のようなノリで付き合ってきたとは言え、その細くて白い指で胸板を触られたのかと思うとふとドキドキしてしまう。

それに、なにより柳瀬はとてもカッコよくて男前だけど、でもやはり、とても魅力的な「女」であることは確かなんだ。

そんな柳瀬の綺麗な顔が息が触れそうな位の距離で目の前にあるのだ。

その事を考えていると、ふわりと、風が吹いた。

あ、なんか良い匂いがする。なんか、柔らかくてしっとりとした、魅力的な匂い。

石鹸なのだろうか、それともシャンプーなのだろうか。もしかすると柳瀬自身の体臭なのだろうか？

ああっ！ そんな事を思っているとなんだか余計にドキドキしてきた。なんだって言うんだよ、もう。

「どうしたのさ、顔が紅いぞ神承？」

「そ、それは……」

何故か突然柳瀬を意識しちゃってドキドキしちゃってるから……

なんて言えるかー！ 何処のスケコマシだよそれ。

それに何より、俺達はそんな事を言い合う関係じゃないんだ。それは壊しちゃいけない。ええい、早く何時も通りに振舞えよ俺！

だが、そんな俺の意志にもかかわらず、目の前で、それこそ鼻と鼻がくつつきそうな位の距離で心配そうに俺を見上げる柳瀬の整った顔を見てると嫌がおうにも胸が高鳴って、頬が熱くなってしまう。

「どうした？ さつきより顔が紅いよ神承？ 熱でもあるのかい？」

そうして、俺の額に細くて冷たい柳瀬の手が触れる。

「あ、その、柳瀬……？」

「うーん。特に熱は無いみたいだしなあ。何が原因でこんなに顔が紅く………って、ははーん」

そう言つと突然一歩後ろに引き、そして半眼の目で少しニヤニヤしながら嘗め回すように俺の全身を見る柳瀬。

「な、なんだよ……」

「くつくつく、あのさあ、神承さあ、もしかして照れてる？」

「ばっ、ばばばっ、バカ言っちゃいけないヨ！ 何で俺がお前に照れなくちゃいけないのさ！」

「ふーん。へー。ほー」

「あつ、テメツ、信じて無いな柳瀬。俺がお前なんか照れる訳無いだろ？ 自惚れるなよ！」

「へー、そんなこと言っちゃうんだあ。くつくつく、じゃあさあ……」

そう言つて、俺の方へとまた近づく柳瀬。

思わず一歩後ずさる。だが柳瀬は構わず近づいてきて、俺の肩をぐっと掴み、そして……。

コッソ。

「なっ、なっ、なっ、おまつ……」

「くくくくくく！ あれれー、熱は無いみたいなのに、「私」
なんかに照れてるはずの無い神承クンの顔は何故かまっかつかです
よー？」

目の前には笑うのを我慢するような表情で俺の眼を見る、どアツ
プの柳瀬の顔。柳瀬が話すたびに柳瀬の息が俺の顔にかかる。

そう、柳瀬は俺に、所謂「小さい子供に母親がやる熱の測り方」
である、額と額のゴツンという伝統の方法で俺の熱を測っている
わけだ。

当然、少しでも動けばキスをしてしまいそうな距離に柳瀬の顔が
あるわけで、俺はと言うと酸欠の金魚のように口をパクパクする事
しかできないで居る。

「あれれー、どうしたのさ、神承？」

そう言うって今度は一步離れて人差し指で俺の胸板の辺りをツンツ
ンと突つつく柳瀬。

クツ、コイツいつの間にこんなに破壊力の高い仕草を！

だが肝心の柳瀬の表情はと言うと笑いを噛み殺してるの是一目瞭
然で、よく見るとプルプルと小刻みに震えている。

はあ、これは完全に一本取られたな。

「クツ、俺の負けだよ。そんなに俺が可笑しいかよ！」

「くくくくくつ、あ、アハハハハ！ ああ、面白くて笑い死にしに
そうだよ！」

そうして遂にこらえ切れなくなったのか堰を切ったように腹を抱
えて大笑いする柳瀬。うん、何て言うか大爆笑。

「クソっ、いたいけな純情少年をからかいやがって。いつからそんな性悪になったんだよ柳瀬はさあ！」

「いやっ、くくくっ、だって、さあ、ねえ？ まさか、神承が私に照れているだなんて、それはもう、プフっ、クククっ、アハハハハ！」

「仕方ないじゃないかさ。俺だって男なんだから。柳瀬だって俺に胸触られたらドキドキしちゃうだろ？」

「って、ドサクサ紛れに俺は何を言ってるんだー！ 俺のアホアホアホ！」

「くくくっ？ ん？ いや、今中面白い事いわなかったかい神承？」
「い、いや、その……」

ええい、儘よ！

「柳瀬だつて俺に胸触られたらドキドキするだろって言ったの！」
「私？ 神承に胸を？ いや、大丈夫かな。神承だつたら平気だね。何なら触ってみるかい？」

そういつて満面の笑顔のまま腰に手を当てて仁王立ちする柳瀬。
「って、うおおい！ マジかよ？」

「え、それさ、柳瀬マジで言ってるの？」
「ああ勿論。私は平気だつて。神承に触られてもね。さあどうぞ？」

そうしてククククと悪人っぽく笑いながらも、こちらを見たま
ま仁王立ちしている柳瀬。

口元は相変わらず噴出すのを我慢してるようにピクピクとしてい

る。

なんだこの状況。胸を触って良いぞと言って、笑顔のまま照れるでもなく仁王立ちして、さあ揉めと言わんばかりのこの迫力。

何処からともなくゴゴゴゴゴと言つような擬音すら聞こえてくる気がする。

カッコいい。スゲエカッコよくて男前過ぎるよ柳瀬！ でも女子高生としてそれで良いのか柳瀬祐！

さて、それはさておきどうするよ、どうする俺！

目の前にはスレンダーで引き締まっていながらも中々の丁度良い大きさの、セーラー服越しの美乳が二つ。

この千歳一隅のチャンスでどうするんだ俺！ そう、こんな時は……。

- 1、ハンサムな神承武は柳瀬の胸をモミモミする。
- 2、突如新しいアイディアでパフパフさせて貰う。
- 3、さわれない。現実是非情である。

ま、当然答は……。

「クッククック、さあどうした？ 触っても良いんだぞ？」

そうやって仁王立ちのポーズのままむしろ胸を強調するように立つ柳瀬。

でも、それでも俺は……。

「はあ、俺が出来ないって、解かっててやってるんだろ？ 俺の負けだよ、柳瀬」

「ああ、解かって居たさ。私の知っている神承って言う男はこうい

う時にはめっぽう臆病だつてね」

そう言つて心底ユカイそうにクツクツと悪人ばく笑う柳瀬。ちえ、最初っから柳瀬の掌の上で踊らされてたわけだよな。

まあ、普通に考えて「じゃあお言葉に甘えて」って言つて「友達」の胸を揉むわけにはいかない。

俺にとつて柳瀬って言つ「友達」はそう言う存在なんだ。

「ふふつ、くくくつ、相変わらず良い奴だよ、神承はさ。神承をからかつてるとき、凄く楽しいんだよね」

「くつそー、いつか復讐してやるぜ。つて言うかさ、俺は冗談で済むから良いけど、あんまりむやみやたらに胸を触らせてやるとか言うんじゃねーぞ！」

「くくつ、ああ。勿論、解かつてるさ。神承以外にはこんな馬鹿な冗談、言えるわけ無いしね」

そういつて、また腹を抱えて、それでも悪役っぽく笑う柳瀬。

ああ、まあ結局俺は一方的にからかわれた訳なんだけど、柳瀬のあんな言葉と笑顔を見てるとなんか許せちゃう気になってきた訳で。我ながら単純って言つか、甘いよなあ。

まったく、困ったものだよ。

男前柳瀬と純情（変態）神承（後書き）

（9月10日注）

第7部分男前柳瀬と純情（変態）神承の畳描写について。

畳表記を変更しました。具体的に言うと、畳の描写を見えなくしました。

誤字等の小さな問題ではなく世界観の問題なので非常に悩んだのですが、やはり自分の置かれていた環境をモデルにしたところ、少数で在ったことは事実のようなので、意見を取り入れて、畳表記を消しました。

この件に置いて不快に思っていた方も居られると思います。ごめんなさい。

あと、元の状態は、消してしまうのも汚い気がしたのでこの話だけをブログの方（<http://19320925.blog104.fc2.com/>）に保存しておきました。

大きな変更になりましたので、戸惑う方も居られると思います。すみませんでした。

あと、この注釈は問題の第7部分、それと改変時最新部分である第15部分の各後書きにて置いておきます。

ご迷惑をおかけしました。

旅に出てました。非情に多忙を極めました。

そして今日からまた地獄の日々です。出来るだけ早く更新したい。でもいつになるやら。死ぬ。

あと、ランキング見てビックリしました。良いのでしょうか。これが1位で。

まあ、一時的なことだとは思いますが。それにしても光栄です。私としては、これを読んだ人が少しでも楽しんで貰えたならそれ以上嬉しい事はありません。

あと、感想、誤字脱字指摘ありがとうございます。

批判でも何でも意見を貰えるって言うのはそれだけで幸せな事です。その上面白かったなどといわれればそれはこの上なく嬉しいです。ありがとうございます。

ああ、なんだか取り留めの無い文章になっちゃいました。

最後に、こんな所まで読んで下さった人が居たら、またお礼を。ありがとうございます。

今後時間も見つけて頑張ります。

モテモテ柳瀬とトバッチリ神承

そうして、腹を抱えて馬鹿笑いしている柳瀬を見ていたのだが、ふとあることに気づく。

そう、先ほどまで聞こえていた女の子の掛け声が全くしないのだと、言うか、掛け声がしている場所って事は……。

そうして主に素振りをして練習をしていた女子剣道部員の方を見ると、ほぼ全員が手を止めてこちらに注目していた。

しかもその内の数人は視線で人が殺せたらと言うような呪詛をこめるような視線で俺のほうを見ている。

そう言えばこの間変な噂を聞いた。

女性からも人気の高い柳瀬。

女子剣道部では、その柳瀬が手取り足取り丁寧に優しく教えてくれる物だから、今年はそれを目当てに入部するという不純な動機的女子部員が結構居るらしいという噂だ。

そして、彼女のうちの何割かの痛い視線を感じる内にそれが、単なる噂ではなくて事実である事を何となく感じた。

ああ、これはヤヴァイって。ようは俺はさつきからその「憧れのお姉さま」と胸をさわらせたり額をくつつけたりというスキンシップを楽しんでいたわけで、そりゃあ彼女たちにとっては俺は「にくき邪魔者メ、つかアンタ誰よ」ってなるよなあ。

ハア、不味い事になったなよなあ、失敗した。

だが、そんな心配もよそに笑ってる柳瀬……って！

「オイ！　いつまで笑ってるんだよ！　いくらなんでも笑いすぎだ

からっ」

「あ、ああつ。ごめんごめん。くくくつ、だって、こんなに愉快だったのは久しぶりだったからさ。あのいつもスカしてる神承が私相手に顔真つ赤にしちゃってさ……くくく」

「はあ、良い性格してるよな柳瀬はさ。この視線にも気づかないなんてさ」

「ん？ 視線？ 何の事？」

「いや、何でもないつて。柳瀬は気にしないで良いから。それよりさ、こんな所で油売ってないで部長として部員たちの指導をしなくちゃならないんじゃないの？」

「ふふつ、まあそれはそうんだけどさ、でも神承が剣道部の方へ足を運んでくれるのなんて久しぶりなんだしもう少しだけ相手して……」

「柳瀬先輩！」

ふと、横から声を掛けられる。

声の方を見ると、少し背が低くて髪をポニーテールで縛った小動物的な感じの子が俺たちの近くまで来ていて柳瀬を見てる。

あ、可愛いかも……。

「ん？ なんだい荻原？」

「その、少し型の事や、動きの事で質問があるので、その……よろしかったら、ええと、その、少しだけ稽古をつけてくれませんかっ
て？」

そうして、やや俯きざまにモジモジとしながら頬を紅く染めて柳瀬に頼みに来る後輩の女の子。

しかし、この様子からすると、この子もそっち系かあ。好みのタ

イブだったし、こんな子が彼女だったらなあ、とか思わないでも無いけど、「また」自分の好みのタイプの女の子は柳瀬が好きらしい。でも、もうこんな事には慣れたし、その事で友達の柳瀬を憎く思うはずは無いんだけれどね。

まあ、正直、少しは羨ましいと思うけどさ。

「うんうん荻原。熱心なのは良いことだよ。まあ指導して欲しいと言われれば私は部長だから断るわけには行かないし、そう言うわけで少し神承の相手はできないけど……良いかい神承？ できれば神承には会わせたい人も居るし少しだけ待っていてほしいんだけど」
「あー、俺の事は気にするなよ。ゆっくり部長の仕事してきなよ」
「うん。本当、ごめん。あとで埋め合わせするからさ」
「ははっ、大丈夫だってどうせ暇だしさ。気にしないで良いよ。それからあまり気を使うなって」

だって、ほら。柳瀬が俺に気を使う言動をするたびに部室内の一定数の女子部員からの痛い視線がチクチクと刺さるのだ。

特に、柳瀬を呼びに来た荻原と言う女の子は凄く怖い顔で俺の方を睨んでるしさ。

「くつくつく、相変わらず良い奴だよな神承はさ。まあ、埋め合わせって事で今日何か帰り道で奢るからさ。それでよろしくって事で！」

その一言でまた荻原と言う女の子の眉が釣り上がる。ううう、だからこの場所で俺に気を使うと言うのに……胃が痛い。

「ああ、それより荻原？」

「はい！」

おお、急にスゲー笑顔。まさに180度ターン！女って怖いなあ。

「私は竹刀取って来るからさ、その間素振りして待っててよ」

「ハイ！お姉さ……っ、いえ、部長！解かりました」

「尾根餌……？まあ、なんでも良いか。じゃ、取ってくるから」
「ハイ」

そう、凄い可愛らしい笑顔で柳瀬を見送る荻原と言う後輩の女の子。

だが、2秒後にはこちらに振り向き……。

「フンッ！」

そうはな息も荒く言ってこちらを睨みつけ、戻っていき素振りを始める荻原と言う少女。

それ以外にも俺の方を見たり指差したりしてヒソヒソと何かを話したりしている子も結構居る。

ハア、もう。なんだって言うんだよさ、まったく。

モテモテ柳瀬とトバッチリ神承（後書き）

短いです。

でも、こういう作戦、名づけてプチプチ作戦。

山も落ちも意味も無い話だけど息抜きで書き始めたんです。

それを忘れちゃいけない。

それに山オチ意味のあるところまで書いたら更新遅れちゃいますしね。

あ、あと感想ありがとうございます。とっても励みと力になります。今後とも目を通していただけたら嬉しいです。では。

鈍感柳瀬と剣道指南

「いいかい荻原、しっかり打ち込むには踏み込みが必要なんだ。荻原はだいたい良いんだけどね、もう一息しっかり踏み込めないかい？」

「は、はいっ。やってみます先輩！」

そう言っただけで踏み込みながら竹刀を振る荻原とか言うさっきの後輩へえ、中々鋭い踏み込みじゃん。

でも、何かが……。

「うーん、悪く無いよ荻原。でも、こう、なんだろうなあ。踏み込む時の足の向きかなあ、少し触るよ？」

「あ、は、はい……」

そうしてしゃがんで荻原の足を掴んで、説明する柳瀬。

「いいかい荻原？ 足首の角度は、こう、じゃ無い。こう、もっとこうなんだ。解かるかい？」

「は、はい……」

顔を真っ赤に染めてモジモジしながら返事をする荻原。あらら、アレじゃ却って集中しずらそうだな。

「よし！ じゃあ、もう一回素振りやってみて？」

「はい。ええっと、その、えいっ！」

「うーん、惜しい。そうじゃなくてこうなんだけどね」

そう言ってもう一度しゃがんで荻原の足を掴んで説明する柳瀬。

「いいかい荻原、足の踏み込みの角度はこのくらいのほうが良いと思う。解かる？」

「は、はいい……ううう、恥ずかしい」

「ん、何か言ったかい荻原？」

「いいえっ、なんでも無いですう！」

そうして恥らってモジモジする荻原とその荻原の足を持っている柳瀬。交わる女と女。うーん、何となくエロスを感じるぜ！

俺のピンク色の脳細胞がエロス！エロス！と言う電気信号を発しているんだから間違いない。

「ふう、よし。じゃあ今言った事を意識してもう一回素振りしてみ
て荻原」

「は、はいっ！ えいっ！」

そう言っ素振りする荻原。あ、でもさっきより……。

「うん、よくなったよ荻原。荻原は飲み込みが早いんだな」

「い、いえ、その、先輩のお陰です……ありがとうございます」

「うんうん、あとの問題は、うーん、そうだな……あ、そうだ、
神承！ ちょっと良いかい？」

へ、俺？

「呼んだか柳瀬？」

「ああ、呼んだよ。ちょっと来てくれないかい？」

「良いけど」

そう言って向う俺。ちよつと良い奴。

「なんだよ柳瀬」

「この、荻原って言う私の後輩、中々見所があるんだけどね、後一步って感じがするんだよ。私は他の部員にも指導しなくちゃいけないし、何より私には解からない事も神承なら解かるかもしれないしね、少し見てやってくれないかな？」

「へ……俺は構わないけどさ、でもこの子は」

それで良いのかいと聞こうとして当然入る抗議の声。

「そんなつ、柳瀬先輩！ 私は先輩に指導を受けたいんです。先輩が忙しいならそれは仕方が無いですけど……だからと言ってこんな

……」

こんな？

「こんな、その、アレな人に指導を受けろだなんて……それくらいなら私1人でやります！」

「アハハハハッ、荻原、幾らなんでも先輩をアレな人呼ばわりしちやあいけないなあ。でも面白いから全然許すんだけどね」

「いや、そこは叱ろうぜ柳瀬？」

こう、さ。友人の面子の為にとかさ。

「くつくつく、良いじゃないか神承。了見の狭いことは言わないものさ。そう言う男は女の子に嫌われちゃうぞ？」

「きつ、嫌われるって、誰にさ」

「さあ、誰だろうねえ」

そう言つてくつくつくと人が悪そうに笑う柳瀬。

「ちえ、まあそんなのどうでも良いんだけどさ。それよりどうするのさ。この子はこう言つてるけど？ やりたくないって言つてるの無理に指導する必要は無いと思うぜ俺は」

「そうです！ 私も、この人みたいだな、その、アレな人に別に教わりたいとも思いません！」

だからアレつて一体何なんだろうな。

「まあまあ、荻原もそう言わないでさ、一遍教えて貰いなよ。多分何か得るものがあると思うよ？」

「そんな……だって部長、そもそも、この人の事を私は知らないんですよ？ そもそもこの人誰なんです？ 本当に剣道強いんですか？」

さつきから黙つて聞いていれば……失礼な小娘だぜ。

「ああ、コイツは神承つて言つてね。剣道の腕は私が保証するからさ、何事も経験だからブクサ言わないでやってみなつて。ほら、とりあえず防具をつけてくること」

そう言つて荻原の背中をバンバンと叩く柳瀬。相変わらずコイツはカッコいいけど偶に親父臭くなるんだよな。

「う、先輩がそうまで言つのなら……」

そう言つてトボトボと防具置き場の方へと歩いていく荻原。

「ふう、やつと納得したか。ごめんな神承。悪い子じゃないんだけどさ、少し人見知りが激しいのかな」

「いや、あの子が俺に反抗してた原因は多分違うと思うぞ？」

「じゃあなんで？」

「ふう、こうやって柳瀬の被害者が増えていくわけか。まあ、あの子の事は良いとしてさ、ホントに俺が教えちゃって良いの？俺は女子剣道部どころか、もう剣道部自体に籍を置いていないんだし」

「ハハハ、随分と細かい事を気にするんだね神承は。大丈夫だよ、なんかあっても私が責任取るから」

「いや、柳瀬は責任取るなよ。部にとっても柳瀬自身にとっても今の「剣道部部长」柳瀬って言うのは大事な物だと思うし」

「そうは言うけどね神承。だからと言って何かあったときに神承に責任取らせるわけにはいかないだろう？まあ、何の問題も起きないから大丈夫だって。神承は安心して存分に荻原に指導してやってよ」

「それについてなんだけどさ、ホントに俺で良いの？俺は今まで人に教えた事なんて無いし、俺じゃあ役者不足だと思っただけど？」

「そんな訳無いだろ？しつこいようだけど神承の剣道って言うのは別次元の物なんだよ。本当だったら荻原じゃなくて私が指導を受けたい所なんだし」

「馬鹿言うなよ。柳瀬の剣道は基礎がしっかり出来てるし俺みたいな適当に竹刀振ってるだけの男なんかが教えられるレベルじゃない」
「そう言うと思ったよ。全く、神承は自分を過小評価しているというか、妙に遠慮深いというか、そう言うところがあるからね」

そう言ってくっくくくと悪人っぽく笑う柳瀬。

「あ、荻原が戻ってくるよ。それじゃあ彼女の事頼んだよ神承？お礼は帰り道で結構豪華に奢るってことで」

「うん、まあ期待しとく。あ、俺の竹刀は？」

「あ、私の使つてよ」

そう言つて自分の持っている竹刀を俺に差しだす柳瀬。受け取る俺。

柳瀬が竹刀を縦に持つて俺に差し出したため受け取る時に僅かに触れ合う指。

その冷たくて柔らかい女性特有の指の感覚に少しドキツとしてしまふ。でも勿論そんな事は億尾にも出さない。

だって、なんか悔しいじゃないか。

「それじゃ、また帰りにね神承」

「おう」

そう言つと呼ばれていたほかの部員の所へと行く柳瀬。さて、俺も人生初の指導に当たるとするか。

立つモノと言えば。。。。と。。。。と。。。。

「と、言うわけで指導タイムなわけだが！」

「解かりました。その、ええと……かみ、じょう？」

「ああ、神承武ね、俺の名前は」

「はい。神承先輩。まず何すれば良いですか？」

「うーん。そうだね。とりあえず素振りやってみて」

「はい」

そう言うつと素振りを始める荻原。んー、可愛い顔が面を付けているせいで見えなくて残念だぜ！

と、まあ、最初こそふざけて見ていた訳だが……。

正直、驚いた。かなり練習もしたのだろう。中々綺麗な素振りをを見せてくれる。踏み込みもしっかりしてるし動きも速いし正確だ。

「へー、凄いね荻原さん。中々綺麗な素振りじゃん。治す所なんて見当たらないよ。てつきり柳瀬目当てで入部したミーハーな子だと思ってたんだけど、真面目に剣道やってたんだね」

「くっ、当たり前ですっ、馬鹿にしないでください！ 柳瀬先輩は目標ですし、尊敬してますけど別に私は不純な動機で剣道やってるわけじゃないですっ！

「でも好きなんですよ？」

「それは……でもっ、柳瀬先輩に会ったために剣道部に入ったんじゃないです！ 入部して、柳瀬先輩の試合見てなんて綺麗な動きをする人なんだろうと思って、それで。その懂れて……あの、その、そうっただけですっ！」

「ふーん、そうなんだ。まあ、惚れるのも無理もないか。柳瀬の動きって凄い綺麗だもんな」

そう。柳瀬の剣道の動きは凄く綺麗なのだ。しっかり型の上に成り立っているというか、試合だけでなく、練習の時もただ動いているだけで見るものを惚れ惚れとさせるようなそんな動きを柳瀬はする。

流石は昔からやってる奴は違うぜ。まあ、でも今はそんな事はどうでもよくて……。

「さて、いつまでも棒振りさせててもしょうがない。とりあえず素振りでは治す所は見つからなかった。と言うわけで試合形式で指導だぜ荻原さん」

「解かりました。それなら神承先輩も防具つけてください」

「いや、俺はこのままで良い」

「へ？ 何ですか？」

「だって、当たらなければ良いだけなんですよ。メンドクサイし兎に角そのまま打ち込んできて良いよ？」

「……っ！ 馬鹿にしてるんですか神承先輩！」

「馬鹿になんてして無いよ。荻原の剣道は真面目で立派だよ？」

「だったら危険だから防具を付けて下さい！」

「いや、当たらなければどうと言うことは無いって言うし別に危険じゃないぞ？」

「クッ！ やっぱり馬鹿にしてるっ！ いいです、後悔しても知らないですからね！」

そう言うと同時にかなりのスピードで打ち込んでくる荻原。

—— 刹那

スパーン！

と言つ乾いた音が響き渡った。

でも双方無言。

——そして数瞬後。

「へ？」

そんな声が聞こえた。

「ん？ どうしたの荻原さん」

「今つ、な、なにっ、何がっ？」

「何がってさー。俺が君の打ち込みを横に交わしてそのまま面を打っただけだよ？」

「私っ、何が起きたか、わ、わか、わかっ！」

和歌？

「解からなかった。解かる暇も、無かったし、見えなかった……気がついたら、面に衝撃が走ってて」

「ああ、そう言えば結構強く打ち込んだじゃったかも。大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫ですけど、でも、どうしてそんな事が可能なんですか？ 私の動きが、そんなに遅かったって事です、か？」

「いや、君の打ち込みは早いし鋭かったよ。悪くないと思う。ただね、なにぶん意識の持ち方があまりよくない」

「意識の、持ち方？」

「ああ、君は相手の竹刀の先に集中してるだろ？ それはあまりお勧めできないな。どうしても視野が狭くなるからね」

「だったら、何処を見れば」

「うーん、まあ、あえて言えば全体の空気かな。全体の空気とそこから生まれる動きが読めるようになれば自ずと相手の次の行動が読めて自分がどう行動すれば良いかが解かるんだよ」

「全体の空気……ですか？」

「ああ。特に荻原さんは竹刀の先に集中しすぎちゃうみたいだからね、その集中力は武器になるんだからさ、大丈夫。今度試合の時には意識して竹刀の先を見ないくらいにしてやった方がよいよ」

「ええっ、竹刀を見ないようにして、ですか？ そんな事したら……」

「うん。確かに勇気が居る行動だし慣れない内はかなり打ち込まれるかもしれない。でも成功すればきつとその先があるさ」

「その先……ですか。そんな事、考えた事も無かった」

そう言つと面を取つて近づいてくる荻原。

「神承先輩」

「ん、なんだい？」

「その、さっきは、すみませんでした」

「はてな、なにがさ？」

「いや、その、色々と酷いことを言つて。私、神承先輩がこんなに凄い人だつて、その、知らなくて……」

「ああ、そんな事か。大丈夫だつて。気にするなよ」

「でも、沢山失礼な事を……」

「はあ、俺が気にしないつて言つてるんだから気にするの禁止。ほら、沈んでないで笑顔笑顔！ 折角の可愛い顔が台無しだぞ？」

そう言つて、くしゃつと荻原の髪を触り頭を撫でる。
すると……。

「あ……」

そう言って、少し頬を紅く染めて、潤んだ瞳で俺を見上げる荻原。

——その瞬間！

頭の中で在りえない風景を幻視する。

その風景は何処だろうか。非常に爽やかな風の吹く高原のような場所。

おじいさんと車椅子に乗った少女が遠くに見える。

そして、近くには赤と黄色と言うヘンテコな配色の服を着た少女が居る。

そして、おもむろに少女は叫ぶのであった。

「立った！ 立った！ ク。ラが立ったーっ！」

ふと遠くを見ると生まれたての小鹿のように震えながらも懸命に一歩づつ立ち上がっている少女。

だが俺は逆の事を思う。止める、立つなど。そこは立てちゃいけない。立つちゃいけないんだ！ こう、ストーリーの進行上。

そして俺は叫ぶ。知っている限りの隠語を。

「ク。ラの。。。！ ク。ラの。。。！ 淫。。。！ 。。。！」

それを聞き泣き崩れて座り込むク。ラ。こうして俺は運命に勝つのだった！

「どうしたんですか？ 神承先輩」

ハッ！俺は何を……。何故かとてもインモラルな気分だぜ。
と言うか、やっぱり気のせいだよな。俺なんかこそうポンポン色んなモンが立つ訳ねえよ。

気のせい気のせい。全く、自意識過剰だぜ神承武！ あー恥ずかしい！

「いや、何でもないよ荻原さん」

「そうですか、それより、その、お願いがあるんですけど……」

「ん？ なんだい？」

「その、もしかた今度時間があるようだったら、えと、その、また指導してくれませんか？」

そう、胸の前で懇願するように両手を握り合わせて潤んだ目でこちらを見上げる荻原。

ふう、気のせい気のせい……。

気のせい……だよな？

立つモノと言えは。。。。と。。。。と。。。。（後書き）

自分で書いてて我ながら最低だと思った話。あの部分、切るかも。

あと、最近凄い忙しい生活で、人間って多忙になると肉体労働して無くても全身筋肉痛になるって始めて知りました。

新たな発見！

もしかしてライバル？　いいえ。

そうして、指導は一段落したわけだが、また部員との合同の練習に戻る萩原を見送ってしまうとやることも無くなりとたんに暇になる。

まあ、女子コーサーの躍動ある練習風景でも見つめるとするか。
うん、これは、アレだ。別にヤラシイ目で見えるわけじゃないんだぞ。当たり前じゃないか。
と言っわけで見る。

……。

……。

……いや、いい眺めだぜ、フヒヒ。

——と。

「げっ、神承っ！」

俺のスイートタイムを邪魔する野太い声が聞こえた。
そちらを振り向くと……。

「何でここにお前が居るんだよ。神承！」

「ああ、なんだ。2年生で男子剣道部の部長の笹山君じゃないか」

「……なんでそんな説明口調なんだ？」

当然深い意味は無い。察してください。

「そんな事よりなんで神承なんかがこんな所に居るんだよ！」

そう上から目線で（実際背が高いからなのだが）俺を見下ろして高圧的に言い放つコイツは笹山弘。（ささやまひろし）

さっき言ったとおり現男子剣道部部長の笹山は俺が入部していた1年の時からやたらと突っかかって来ると言うか絡んで来る奴なのだ。

見た目は線が細く背の高い、お坊ちやま風の整った容貌の優男なのだが、実は中々に締まった筋肉を持った隠れマツチヨである。

剣道のスタイルとしてはその恵まれた肉体である180を軽く超える高身長と筋力を生かした素早く力強い打ち込みで一方的に攻めるタイプで、中々に非凡な腕前だと思う。

だが、初めての立会いの時に俺に負けたのが納得がいかないらしく、それから事あるごとに突っかかってくる。

正直、かなりうっとおしい。

まあ、とりあえず、何故俺がここにいるかと言つと……。

「俺はなんかさ、柳瀬に呼ばれたんだよ。用事があるって」

「柳瀬に？ 何で神承が呼ばれるんだよっ！ クソツ！」

「って、何を怒ってるんだよ笹山。何が気に食わないんだ？」

「フンツ、剣道部やめて勝ち逃げするようなクズに説明する気は無いね。それより俺は柳瀬に用があつて来たんだ。柳瀬はどこに居るんだよ」

「ほれ、あそこだよ」

そう言つて手に持ったままになつてた柳瀬の竹刀で指示して知らせる。

そちらを見て、柳瀬の姿を確認した笹山は俺を一瞥すると。

「クソツ！」

何が気に食わないのかそう言い捨てて柳瀬の方へと行つた。

しかし、笹山が柳瀬に用か。何の用なんだろう？
少し、気になるかも。

———と言っわけで、少し意識を集中して盗み聞きをしてみ
ることにした。

そうして聞こえてくる会話。

「おいっ、柳瀬！」

「ん？ ああ、笹山じゃないか。何か用かい？」

「何か用……じゃないだろ！ あの時の話。返事をはぐらかしやが
つて。ちゃんと会長に俺の事を言っておいたのか？」

「ああ。あの話か。悪いんだけどエレンに笹山の事は話してない」
「なっ！ どうしてっ！」

「だって、私は笹山をあれに推すつもりは無いからね」

「何でだよっ。俺じゃあ相応しくないって言うのか！」

「いや、まあそうは言わないけどね。ただ、もっと相応しい人間が
居ると思ったからさ」

うっーむ。イマイチ話の要領が得ないなあ。恋愛沙汰でもなさそ
うだしなあ。まあ、俺には関係なさそうな話だし良いか。

だが、笹山の声がデカイので声は聞こえてくるのであった。

「誰だよ、それは！」

「その、ね。私は神承を紹介しようと思ってるんだよね」
「なっ！」

———なっ！

「よりによって神承をか！」

——何の話か全く解からんが俺をだと！

「どういっつもりなんだよ柳瀬！」

「どういっつもりも何も、私はベストと思われる選択をただけだからねえ」

「それでどうして神承になるんだよ！　よりによってあんな奴を……」

「ふうん、笹山は神承をあんな奴呼ばわりするけどね。それなら笹山は自分の方が神承よりも適役だと？」

「当たり前だ！　会長も俺を一番気に入るに決まってる！」

「そうは言っけどね笹山。それなら笹山は神承より自分の方が強いと言っのかい？」

「クツ、それは……あ、当たり前だろ。あんな部活もやらないでサボってるような奴、もう身体だって錆び付いているに決まって……」
「それでもないさ。神承の剣はそう言ったも類のモノじゃない。生まれてからのものなんだよ。その証拠にさっき軽く後輩の相手をして貰ったんだけど相変わらず凄い物だったよ。惚れ惚れとしたというか、惚れ直したね」

——そう言ってこちらを見て軽くウインクをする柳瀬。
って、盗み聞きしてるのバレてるー！

「まあ、そう言う訳さ。私は彼をエレンに紹介するつもりだし、他に用事が無かったお引取り願おうかな」

「グッ、畜生！」

そう言い捨てて踵を返しズンズンとこちらに来る笹山。
そうして俺の目の前で立ち止まりこちらを見下ろす。

「どうしてどいつもコイツもこんな奴を……クソッ！」

そう言って笹山は出て行った。

しかし何の話なんだったんだ。なんか明らかに俺が話の中心に居たのに全く身に覚えの無い話だったぜ。

何だったっけ。俺を紹介するとか、会長だとか、エレンだとか、そんな。

——って、待てよ。エレンで、会長って、まさか、あの…。

だが、そんな考察をする暇も無く。

「ふー。相変わらず汗臭いわね。祐、居るー？」

そんな能天気な声が聞こえてきた。

初めて近くで見た人。

思わず声を失う。

何故って、それはあまりに異質な物を見たからだ。そこだけ浮き上がるように明らかに異常な空間なのだ。

なんと言うか、日常からの別離と言うか、結界と言うか、オーラと言うか。兎に角、感じたことの無い空気をそれは放っていたのだ。

細くて長い手足。白く傷一つ無い陶磁のような肌。見たことがないほど艶やかで繊細で、触ったらさぞ気持ち良さそうなサラサラふわふわの眩しいほどの美しいブロンドの髪。そして勝ち気そうではあるもののトンでもなく整った顔に輝くブルーの瞳。

全てが未知との遭遇だった。

つまり、トンでもない、それこそ見たことも無いような美人が突然現れたわけだ。

いや、反則だよねコレ。名人が作ったフランス人形でもこうは整っていないぜとまでに整った顔。

純国産じゃまねできないであろうその身体。そして何よりもそのオーラ。

こんな凄い美人がうちの高校に居たとはね。

だが、その美人は何事でもないように俺の空気を侵食する。具体的に言くと俺のほうに近づいてくると……。

「ねえ、君。柳瀬祐って子どこに居るか解かる？」

「うおっ！ まぶしっ！」

いきなり話しかけられて反射的にそう叫ぶ俺。

当然、突然の俺の奇行に不思議そうと言うか、怪訝な顔をする目

の前の美人。

だが、本当に眩しかったのだから仕方が無い。
外から入って来た太陽光が金髪に反射した気がして（勿論錯覚だけれど）目に沁みたのと、そして何よりもその存在が、眩しかったんだから。

だが、そんな小粋な感情は相手に伝わるわけも無いので、真面目に対応する。

「んっ、オホン！ えーっと、柳瀬ならあつちに居ますよ」

「ん？ どれどれ？」

「ほら、アレです」

そう言つて持っている竹刀で柳瀬を指す。

「あー、アレね。解かったわ」

そう言つともう俺には用が無いとでも言つ感じで柳瀬の所に行く。
うん、いや、今更ながらビックリした。

今のつて、やっぱり、「会長」だよなあ。

聞いたことはあつた。

曰く、去年の九月の生徒会選挙で若干一年生でありながら大差で会長に当選した奴がいると、

曰く、その会長はフランス人の女の子であるとか。

曰く、その会長はモデルも裸足で逃げ出すほどの美人であるとか。

曰く、会長は文武両道全てに通じていてその上実家は大金持ちのお嬢様で、まさに死角の無いパーフェクトな女性だとか。

曰く、すでにファンクラブが出来ていて男女共にかんりの人間が

在籍しているとか。

兎に角、噂話は枚挙に暇が無い。

だが、俺自身は特に噂等には興味が無かった事もあり、舞台上に立つて挨拶をしているのを遠くから見ても、良く顔も解からない物だから「おー、金髪さんだー」などと能天気には驚いていただけだったから近くでハッキリと顔を見たのはさっきのが初めてだった。

いや、それにしても驚いたね。あれほどの美人だったとは……そりゃあ騒がれるのも納得だわ。

でも、そう言えばその生徒会長様が剣道部、特に柳瀬にとは何の用なんだろう？

———と言うわけで、耳をすませてみる。略して耳すまへブン状態。

と、聞こえてくる柳瀬との会話。

「ところで、今回足りなくなった物はどれ？」

「ええっと、これなんだけどねエレン。今回は竹刀4本。あと部員が増えて足りなくなった物のリストがこれなんだけど」

「ふーん、確かに竹刀はどれも酷く割れているわね。ふーん。グラスファイバーとかじゃなくて竹の使ってるんだ。えーっと、それから必要な物も……解かったわ。剣道部は結果も残しているしね。竹刀四本分とプラスアルファでの臨時予算を認めるわ」

「うん、助かった。でもさ、予算の確認の為にわざわざ会長自らお出ましとは随分とご苦労な話だね」

そう言うつと意地の悪そうな感じでクククと笑う柳瀬。

生徒会長が相手でも相変わらず素直に可愛く笑えない子なのである。

「うん、まあね。今までがドンブリ勘定過ぎたのよ。去年までの予算報告書を見てビックリしたもの。予算の選別がザルと言うか……そもそもオカルト研究部にイモリの黒焼きを買ったの予算をどうして今までの生徒会を出してたのかが不思議でならないわ」

確かにそれは不思議だな……。

「必要な所には必要なだけ。見込みのある所は吟味の上で希望の結果を出せるための予算を。明らかに無駄な予算は見切りを付けて引き締める。経営の基本よこれは？」

「いや、学校の生徒会で、経営の話をされても……」

「うふふ、良いじゃない。それに、今日来たのはあの件の事もあったしね。私としては祐がやってくれると、資質、能力、共に申し分なくて適職だと思うから嬉しいんだけど」

「アハハ、そう出来たらいいんだけどね。あいにく私は部長の仕事だけで一杯一杯だからさ。お役に立てないよ」

「それは理解してるし仕方ないと思って納得済みよ。だから代わりに用意してくれたんでしょ？ で、今日は会えるって聞いたんだけどどこに居るの？」

「うん、すぐに紹介するから、その前に……」

そう言つと柳瀬はパンパンと手を叩き言った。

「ハイみんなー！ 少し早いけど今日の部活はここまで切り上げだよ。早く着替えて帰るように」

そう言つと部員たちは素直に「はい！」と言つてすぐに練習をやめて部室の方へと散っていく。

人望あるなあ、愛されてるなあ、柳瀬。だがその愛の何割かは恐らく性的な意味なんだろうなあ。

などと良からぬことを考えていると、目の前に会長を連れ立って柳瀬が来た。

「ごめん、待たせたね神承」

「いや、別に良いんだけど、その……」

そう言っ、俺は目線で会長の方を指して「説明しろよ」と促す。

「ああ、そうだった、まだ紹介してなかったね。知ってるかもしれないけど、これが、私の友達で生徒会長のエレン・ブレンターノ」

「へー、柳瀬って会長と友達だったんだ」

「うん、まあね。それでエレン。彼が紹介するって話していた相手の神承武」

「ふーん。ルックスは悪くはないけど、他にこれといって普通の男にしか見えないわよ。本当に彼をなの？」

そう言っ、値定めするように俺を見る会長改めエレン。

「うん、本当に彼を。私は彼を……」

そう言っ、こちらを見てニヤリと笑うと。

「風紀委員に推薦するね」

そう、言い切った。

初めて近くで見た人。（後書き）

長らくお待たせしました。本当にごめんなさい。

事情を一言で説明させていただくと、日本に居ませんでした。

いや、向こうのパソコンって日本語は表示されても日本語は打てないので。

これからまた3、4ヶ月は非常に多忙で時間を作れた時のみの更新になるかもしれませんが、今後とも読んでもらえると嬉しいです。本当にありがとうございます。

ヒンデミットにて

そう言うわけで処変わって場所は「ヒンデミット」と言う名のケーキショップ。

店名のネーミングセンスは最悪に等しいが、ケーキの方なんかは中々の物を出すという事でちょっとした評判になってる店だ。

ケーキショップとしてはかなり広めの店で、道路沿いはガラス張りになっていて外からの明るい光が清潔な店内を照らしている。

当然、時間も時間だけにうちの高校帰りの生徒もかなり利用しているようではば満席の店内には制服姿があちこちにチラホラと見える。

そして、俺のテーブルの向いには……。

「ねえねえ、祐っちは紅茶飲むの？」

「そうだね、少し欲しいかも。エレンはどれにするのさ？」

「んー、そうねえ、私は……」

といった感じで仲良さ気にメニューを眺める会長ことエレンと女子剣道部部长こと柳瀬が居るわけ。

当然、タイプは違えど二人とも美人で、そして我が校の有名人だ。そこに混じるごく普通の俺。

なんか、さっきから視線が痛い気がする。

俺が見ると見ていたのを誤魔化すように目を不自然に逸らす女生徒が多数。

やれやれ、変な噂が立たなければいいんだけど……。

「ハア、何で俺はこんな所に居るんだか……」

「ん？ だって、帰る前に言っておいただろう？ 今日少し豪華

に奢ってやるってさ」

「確かに言ってたけど……」

そう、確かに言っていたし、ヒンデミットのケーキなら値段もそう安くはない。

悪くない話だったのだが、けどまさかこんな異常な面子でテーブルを囲む事になるなんて思わなかったしなあ……。

「それよりも神承。神承は何を頼むか決めたのかい？ 私の奢りだし遠慮しないでいいんだぞ？」

そう言つてメニューを差し出してくれる柳瀬。

まあ、考えても仕方がないしここは甘えておくか。

「うん、決めた」

「それじゃあ頼むわね。すみませーん」

そう言つて手を上げる会長。

「はい、ご注文はお決まりですか？」

「ええ、私は、この、レアチースタルトで。祐は？」

「私は……ザッハトルテ。神承は何を頼むんだい？」

「俺は、んー、そうだな。じゃあ俺はこのデラックスチョコパフェで」

「以上で。あつ、あと飲み物なんだけど私は紅茶、そうね。キーマンで。祐は何かこだわりとかある？」

「私は良く解からないけど、んー、ミルクティーが飲みたいかも」

「そう、それじゃあアッサムが良いと思う」

「そうなんだ。じゃあそれで」

「それと、えーっと、神承……君だったっけ？」

って、俺か。突然話しかけられてビックリした。

「はい、神承ですよ。会長」

「ハア、別に同い年だし敬語じゃなくても良いんだけどね……」

そう、金髪の頭をゆらしながらため息をつく会長。

そうは言われても今日突然目の前に現れた異常な美人に気安く話せるほど俺はスレてないんだよ。

「神承君は飲み物どうするの？」

「あ、それじゃ俺はコーヒーで」

「そう。えっと、注文は以上だから」

「はい、かしこまりました」

そう言っただがっていくウエイトレス。

さて、後は待つのみって……ん？

そうして気づくと、目の前の会長がそのブルーの瞳で俺をじーっと、それこそ睨むのに近いような感じで見ている。

な、なんだって言うんだ一体。そもそも会長の美貌は人間離れし過ぎていて見られるだけで何か緊張してしまう。

あ、なんかドキドキしてきたかも。

思わず、俺はそんな動揺を悟られぬように、少しスカした仕草で水を飲む。

ふう、少し落ち着いたかも。

ヤレヤレだぜ。ホントさあ。

と、俺を見たままの会長が、口を開く。

「ねえ、祐。私が祐に頼んだ内容覚えてる？」

「ん？ 勿論さ。えーっと、風紀委員を作ろうと思うから私に初代風紀委員になってくれって言った時のことでしょ？」

「そうそう。それで祐が無理って言うものだから代わりを見つけて欲しいって言うて。その時に私が出した条件覚えてる？ こう言う人を探して欲しいって言うて」

「ああ。「強くて」「信頼できて」そして「面白い」人を探して欲しいって」

「そう！ 確かにそう言った筈よね。面白い人をつて。これって、スツゴク、もう一番くらいに重要なことなのよ」

「ああ、解かってる」

オイオイ、良いのかよ。我が校の風紀委員の条件がそれで。

「そう。それで、私はまだこの神承君の事を良く知らないから彼がどのくらい強いのかも、信頼が置けるかと言うのも良く解からないわ。でも、祐が連れてきた人間なんだもの。その所はあまり心配していないの」

「そうなんだ、それは良かった。大丈夫、神承は信頼は置けるし、それに飛びつきり強い男だから」

あのー、自分ではあまりそうは思えないんですけど……。

などと心の中でだけ思っておく。口には出さない。だって、会話に入れないんだモン！

「そう。きつと祐が言うんだからそうなんでしょうね。でもね、正直私にとってそれは2番目3番目に重要な条件でしかないの。私が今求めているのは私の暇を潰せる面白い人材なの！」

だからそれで良いのかよ。菖蒲里高校生徒会長！

「それでね、肝心の神承君だけど……」

そう言っただけのほうへ不躰で無遠慮な視線を向けてくる会長。

「さっきも言ったように確かにルックスは悪くないけどね、でもスリムな感じで水を飲んでもだけのこの神承君はともそんな面白い人間にも見えないし、正直私は神承君に何も惹かれる所は無いわ」

うおっ、噂ではかなり高飛車でキツイ性格をしているとは聞いていたけど、本人の前でそう言い切りますか。
でも……。

「その通りだよ柳瀬。俺はそんな特別な奴でも面白い奴でもない。柳瀬や会長の期待に答えられるような奴じゃ、俺はないんだよ」

と、柳瀬は少し不機嫌そうに言う。

「何を言ってるんだ神承！ 神承は絶対面白い奴だって。私が保証する！ 安心して良いさ」

「いや、俺はお笑い芸人じゃないし別に面白い言われても嬉しくは……」

「兎に角エレン。私はエレンを楽しませる意味でも神承以上の適材は知らないし、エレンもすぐに神承の面白さが解かるさ！」

「ハア、そうだと良いんだけどね……」

そう言っただけで、会長は一つため息をついて氷の入ったグラスをカラカラと揺らした。

神承武生恥晒地獄（トウ・スイート・タイム）

「…………と、ザッハトルテ。デラックスチョコパフェでございます」

そうして次々とテーブルの上にケーキが並べられていく。

「ご注文の品は以上でよろしいですか」

「ええ。大丈夫よ」

「それでは」

と言う訳でケーキ・タイムである。

二人の前にはケーキが。俺の前にはでっかいチョコパフェが置かれた。

てかこのチョコパフェ本当にデケエなあオイ！ 高さ30センチ以上は楽にありそうだぞコレ。

しかもなんだか無駄に、超・ファンシー！

すぐえメルヘンチックな飾り付けである。きょうび小学生の女の子でもここまで夢見がちで入られないとばかりの飾りつけ！

しかしボヤいていても仕方がないので早速一口チョコパフェを食べてみる。

もぐ……。

……。

……あまうまい。つまり、甘い、美味しい。うん。美味しいなコレでも、甘い。しかし、うまい。だが甘い。そして甘い。

つまり、甘いつて事だ。うん、甘い。いや、甘いホント。いや甘すぎるだろコレ。それでも美味いんだけど。

「ねえねえ、祐？　ハイ、美味しいレアチーズタルトよ。一口あげる。あーん」

何か目の前で金髪フランス人が百合の花を咲き乱れながらこれまたアマアマな光景を展開している気がするが、まあ見なかったことにしておく。

「ありがとうエレン。でも、私はチーズが苦手なんだ。ごめん」

「えーっ！　そんなあ……」

「アハハ、気持ちだけ頂いておくよ」

「ううう、残念」

そう言っただけでパクリとタルトを自分の口に運ぶ会長。

心なしか寂しそうである。でもやはり美人なのであった。

……と。

じー……。

突然、何か視線を感じた気がする。

視線の元へと手繰っていくと、自分のザッハトルテも一口ほどしか食わずに物欲しそうに俺のチョコパフェを見る柳瀬と目が合った。

「ん？　どうかしたのか、柳瀬」

「あつ、いや、その。なんでもないんだなんでも！」

そう言っただけで明後日の方向を見ながらアハハハと不自然に笑う柳瀬。

こいつがこうやって笑う時は大抵何かを隠している時なのである。

「いや、嘘つくなよ。言いたいことがあるならハッキリ言えよ！」

「いや、その……」

そう言うと、柳瀬にしては珍しく妙にモジモジしながら恥ずかしそうにボソボソと何か言っている。

良くは聞き取れないのだが、しかし視線は俺のチョコパフェに注がれたままである。

「もしかして、このデラックスチョコパフェ、食いたいの？」

「いややつ、そう言うわけじゃ……でも美味しそうだなーって」

「まあ、甘いけど美味しいよ。でもさ、それなら柳瀬もこれ頼めばよかったじゃん」

「いや、だって、それ、その、あまりにも恥ずかしくないか？」

「ん？ このチョコパフェが恥ずかしい……？」

そうやって食いかけのチョコパフェを見る。

メルヘン。もうひたすらメルヘンのファンシーのスイート。トグロもビックリのメルヘン120%である。

「俺は別に恥ずかしくは無いけどな」

「いや、神承君は男の子なんだしもう少しは恥ずかしがりなさいよ

……」

そう呆れた声で言う会長。

しかし、気にせずもう一口食べてみる。

甘い……。

「そうだな、かなり甘いし量も多い。柳瀬も食う？」

「えっ、良いの？」

「まあ、良いも悪いもそもそも俺は柳瀬の奢りで食ってるわけで、食いたいだけ食って良いよ？」

「そう。それじゃあ遠慮なくっ……！」

と、フォークを延ばした瞬間、何故かその手を止めて引っ込める柳瀬。

良く解からずに見てると、何か悪巧みを思いついた子供のような意地の悪い顔をしてそして、フォークを置いた。

「？　どうしたのさ、食いたいんじゃないの？」

「ああ、ほしいな。だから……」

「あーん」

そう言っ、笑顔で口をあける柳瀬。

「は？」

「いや、は？　じゃ無いぞ神承。あーん」

そう言っ、餌を待つ雛鳥のように口をあける柳瀬。

「な、何をやっているんだ柳瀬は？」

「何をやっているも、見れば解かるだろ。私の持つてるフォークはパフェを食べるのには向いていない。だから神承のスプーンで食べさせて欲しいなーって、それだけの話さ。あーん」

「な、なななっ、何でそんな事を！」

「そんな事も何も、何か問題でも？」

何か問題デモ何も、問題しかないに決まってるじゃねーかつ！
こんな、真昼間からっ、会長も居るのにつ、公衆の面前でっ、んなこと出来るかーっ！

「ほうほう、それは、夜に、部屋で、二人つきりだったらやってくれるって言うことかい？」

それも良いねえとケラケラと笑う柳瀬。

「何でそうなるんだよっ！ 前提から間違ってるじゃねーか！」
「何がさ。あつ、もしかして神承……」

そう言つて近づいてくる柳瀬。

「照れてる？」
「ぐっ！」

と、一歩引いて、例の悪人っぽい笑い方で堪らないと言う様にクツクツと笑う柳瀬。

「いやー、そうかー。あのスカした神承がねえ。私に照れちゃつてしょうが無いだなんてねえ。くくくつ、いやー、私が神承にそんなに女の子として意識されていたなんて意外だったなあ。神承も思春期なんだねえ」

そうしてこりゃあ神承が私に告白する日も近いのかなーなんて言いながら心底ユカイそうにニヤニヤする柳瀬。

「バババ馬鹿言っちゃイケネーよ！ 俺が柳瀬なんかいい意識するわけネーだろ！」

「へー、じゃあ神承は照れてないし当然私にパフェを食べさせる事もできるんだよね？」

「あつ、あつたりめーよ！ やつてやるじえッつ！」

いかん噛んだ。

「ククククッ！　じゃあさ、頼むよ神承。あーん」
「おっ、おう！」

そう言っでスプーンでパフェを1掬い。
目を瞑ってあーんって口を空けてる柳瀬の口元へと……。

だが、どうしても、視線は別の所へ行ってしまう。
その、整った目鼻立ちの顔だとか、さらさらしてる髪だとか、プルプルしていて触れたらさぞ気持ち良いだろうというようなくちびるとか。

そして空けた口の奥に見えるピンク色の可愛い舌とか。
ふわりと近づくとびに強く感じる柳瀬の良い匂いとか。

普段意識していない柳瀬の女の子の部分ばかりに目が行ってしまふ。
まう。

ああもうつ、何だって言うんだ！

「おーい神承、早く早くー、あーん」
「おっ、おう！」

そうして、震える手で何とか柳瀬の口元へとパフェの乗ったスプーンを運ぶ。

柳瀬はそれを、最初はスプーンの裏側をチロチロと舌で舐めるように確かめた後、パクリと口の中に収めた。

その柳瀬の行為になんだかエロスだよなーなどと身も蓋も無い事を考えてしまい余計感情がどうしようもなくなる。

そして、俺はスプーンを柳瀬の口から引く張ると柳瀬の咥内で歯に当たる僅かな不快感や閉じたままの柳瀬の唇との抵抗を感じなが

らスプーンを抜き、手元に戻す。

「……ん、うん。はあ……。甘くて美味しいな、神承」
「あ、ああ」

珍しくうつとりとした感じで言う柳瀬の言葉に反射的に返事をする。

我ながら情けない。顔が真っ赤になっているのが解かるし、心臓の鼓動もバクバクと早く大きく鳴っている。

ふう、なんだか全力疾走した後のように疲れてしまったぜ。

だが、柳瀬の攻勢はこれで終わりでなかったのだっ！

「じゃあ、神承にもお返しをしないと」

「は？ どういうこと……」

だが、俺の質問を最後まで聞かずに俺の手からスプーンを取ると、それでパフェを1掬いし、そして俺の鼻先に出す。

「お返した。ほら、あーん」

「でっ、でええええっ!？」

なっ、何をコイツは！

「あれれー、何か問題でも？」

「ありまくりに決まってるじゃねーか！ それさっきお前の口の中にあつたスプ……」

「いやいや神承。良く缶コーヒーとか二人で別けて飲んだじゃん。アレと似たような物だって」

「全然違うわアホー！」

「じゃあやつぱり神承は私の事を意識しちゃって……」

「んなわけねえだろ！ 自惚れるなよ柳瀬。俺がお前なんて意識するわけ……っ！」

「じゃあ大丈夫だな。はい、あーん」

「当たり前だろ。余裕に決まってるだろ。マジパネエから」

混乱のあまり言葉遣いが変になる。

「クッククク、相変わらず良い反応をするねえ神承は。解かったから早く口をあけてよ」

ええいつ！ こうなりやもう自棄だ！

「ほれ、あーんんんぐっ！」

いきなりスプーンを突っ込まれる。

思わず吐き出しそうになるも何とかスプーンに乗ったパフェを食べる。

「どう、美味しいかい？」

そう聞く柳瀬の口の中に見えるピンクの舌。

そう言えばさっきまでこのスプーンはあの舌の上にあっただよな！ って事を実感させられた瞬間顔が瞬間沸騰しそうになる。

「んっ、んんんーっ！（美味しいからもうスプーン抜けよ！）」

口の中にスプーンを入れられたままなのでうまく喋れない。

「あれれー、聞こえないなあ」

そう言いながらククククつと悪人っぽく笑う柳瀬。コイツ、解かってやってやる！

そんな間にもパフェは溶けきり口の中にはスプーンの味しかなくなる。

「んぐんぐんぐぐぐーっ！（さっさと抜けつつてんだよアホー！）」

「アーアーきこえないー！」

チクシヨウ！ そうだつ。

逆転の発想で顔を動かして口からスプーンを抜く。

「んぐつ！ ふうつ、さっさと抜けって言ってたんだよアホ柳瀬！」

「クククツ、いやあ、聞こえなかったしねえ」

「クソツ、ふう、はあ」

つ、疲れた……。

顔もまだ紅いままだし、恐らく、全部こっちの考えている事なんとお見通しなんだろう。

「どうだい神承、美味しかったかい？」

「う、あ、甘かった」

「アハハハ、そうなんだ」

そうして愉快そうに笑う柳瀬。

全く、脳が蕩けるかと思っただぜ。はあ。

と……。

「ふーん、へー、ほー。なるほどねー」

何か一人納得してるフランス人が居た。

「ん、エレン。どうかした？」

「いやね、祐が言ってた事。成程なーって思つて。中々に面白い反応と表情するのね。コレは……良いわね！」

「でしょ？ 私も始めてみた時は面白くて面白くて。特に普段ス力してる奴だけにギャップがね。正直、私もエレンに紹介するのがちよつと勿体無いかなーって思つたくらいだし」

「ええ、確かに神承君、「面白い」わね。コレは、なかなか極上の……」

極上の……？

「いや、何でも無いわ。うふふふふ……」

意味深に笑う会長。スゲー美人なのに笑顔がちよつと、いやかなり不気味だ。

「いやつ、そこは言ってくださいよ会長！」

「だから同年だし敬語じゃなくて良いわよ。それと神承君は私の事エレンって呼んでいいわよ」

そう言つて光栄に思いなさいといわんばかりにフンと胸を張るエレン。

「ハア。解かったよ、エレン」

「ふふふ、そう。それで良いわ。でも、お願いがあるんだけど」

「なんだよエレン」

「私もそれ……」

「それ？」

そうやってちよんちよんとエレンが指差した先にあるのは俺のデラックスチョコパフェ。

「私も、あーん！」

そう言って元気に口をあける金髪フランス人。

ああ、俺は、どこへと向っていつてしまうのだろうか……。

「あれれー、神承君もしかして私の事意識しちゃって……」

「わあーった！ わあーったからっ！ 食わせてやりやあ良いんだろっエレンっ！」

こうなりや自棄だ。幾らでも手ずから食わせてやるよコンチクシヨー！

「んっ、はあ、れろっ、れろれろっ、はあむ、ちゅびっ、ちゅばっ、はあぁっ……。おいしいわ、神承くん」

「エレンそんな音立てながらパフェ食べちゃダメー！」

行儀悪いし！ ここお店だし！ あとそれなんか違うから！

神承武生恥晒地獄（トゥー・スイート・タイム）（後書き）

時間のあるときにちよちよいと更新。

少し頑張ってみました。

勿論続きもあるのですがまだ忙しいのでいつ更新できるかはわかりませんが読んでもらえたら嬉しいです。

あと、感想、評価等。凄く嬉しくて励みになります。

時間が取れないので返事が出来ないこともままあるかも知れませんが、本当にありがとうございます。

風紀委員とは？

巨大なパフェを何とか食べきってコーヒーを啜る。

全身が甘ったるい疲労感に包まれている。さっきの時間は俺には刺激が強すぎだぜ。

時間があまりにも甘すぎたせいだろうか。

苦いはずのブラックコーヒーは、何故か甘ったるい味がした。

「やれやれ、こんな事はもうコリゴリだぜ」

「何言ってるのよ。この私が手ずから食べてあげたのよ。滅多に無いわよこんな事。ありがたく思いなさい！」

そう言っただけでバインバインの胸をエツヘンと張るエレン。

何が凄いつておっぱ……じゃなくて、言っている事は無茶苦茶なのに言っているエレン自身は全く自分の言っている事を疑っていないという所。

そして、そのセリフが全く嫌味に聞こえない所だろうか。

コレもエレンの人徳なんだろうかね。何となくエレンの人気の秘密がわかった気がする。

「ハア、まあ、もう良いんだけどさ。それよりも、そもそも何で突然エレンは風紀委員なんて役職作ろうと思ったんだよ。そもそも風紀委員って何をするモノなのさ？」

「良く聞いてくれたわね神承君。何故風紀委員が必要か、それはズバリ……」

ずばり？

「我が校の風紀の為よ！」

そう。確かにそう言った。

「って、当たり前じゃねーか！ 風紀委員なんだから風紀の為だろ
うさ。だから俺が聞きたいのは何で今までなかった風紀委員を今、
急に必要とするのかって事だよ」

「へ？ コレで解からないの？ フウ、ダメダメね神承君」

そう言つて紅茶を飲みながら使えない神承君ねーとかム力つくこ
とを言いながらヤレヤレと言つた感じのジェスチャーをするエレン。

「何故、我が校に風紀委員が必要かつて、それは、我が項が今現在
置かれている状況を慮おもんばれば解かるはずよ？」

「うちの高校の現在の状況……？」

「そう、我が菖蒲里高校はかつて無い危機を迎えているのよ！」

「そうか？」

特に最近何かあったつけ。平和だし特に事件も起きた記憶はない
けど……？

「そう、我が校は現在、ワイドショーが喜びそうなほどに現代社会
の子供たちが抱える問題を一手に引き受けたような状況なの……学
力低下、いじめ、制服、髪型等の服装や性の風紀の低下。皆が義務
を果たさずに権利ばかりを主張して、全ては力の在る者が勝つ、そ
んな暴力が全てを支配する世界。それが我が高校の現状よ！」

「どこぞの世紀末救世主が居そうな世界だなそりゃあ」

どこの平行世界の菖蒲里高校だよ。

うちの高校は確かに一部性質の悪い不良は居るし、喧嘩や暴力も
見なくは無いが、だがあくまで常識的な範囲で警察が来る様な事態

に陥った事は無い。

いじめは、まあ在るのかも知れないけれど表立って声高に叫ばれるほどの大きな問題には成っていない。

それに、もう一つの問題、それは……。

「そもそも、生徒が自分の権利を主張するようになったのは生徒会の権力が拡大した時に生徒の自主性を尊重するようにつて教師と掛け合うことによつて得た権利で、つまりエレンが進めた生徒会の政策の結果じゃないか」

「うっ……そこに目をつけるとは、意外と弁が立つようね」

「誰でも気付く事だつて。そもそも、さっき言った問題の殆どだつて実際に風紀委員が必要になるほどの大事には思えないけどなあ」

「ソレは神承君が鈍感のとーへんぼくだから気付いて無いだけよ。実際は結構深刻な問題なのよ？」

全く、神承君はニブニブのちんちんねーなどと言つてゐるエレン。怪しい、スツゲエ怪しい。

「女の子がちんちんとか言つんじゃありません。ハア、それでエレン。風紀委員を欲しくなつた本当の理由は？」

「言つ事聞かせられる従順で有能で面白い直属の手駒が欲しかつたからでーす！」

つい言つちやいましたーえへつと言つような軽いノリでそう言つちやつたーなエレン。

俺、ドン引き。

柳瀬を見ると、柳瀬もドン引き。

「いや、エレン。正直なのは美德だけど流石にそれは……」

冷や汗を流しながら忠告する柳瀬。うん、友達って時には重労働なのな。同情するぜ柳瀬。

「ハッ！ いや、いやねえ。その、冗談よ冗談。フランス流ジヨークよオホホー！」

「100%本心じゃねえか」

「クッ、否定は出来ないわね」

そこはしてくださいよ。

あと、エレンのこと完璧人間と聞いてたのにトンダメ人間だぜこりゃ。

「クソっ、腐ってやがる……早すぎたんだ」

「何を言ってるの神承君？ ふう、まあバレちゃあしょうがないわ。確かにソレも理由の一部よ」

「うわっ、開き直ったよ」

「話は最後まで聞きなさいって。そう、私は思い通りになる有能な手駒が欲しい。ソレは確かよ。でも、そう思うのも現状の問題があるからよ」

「現状の問題……？」

「そう、実際に会長をやってみると解かるんだけど生徒の数が多いだけはあって本当にこの学校内には沢山の問題を抱えてるのよ。穏やかに見えるのは表面だけ。噂を拾っていくだけでも沢山の悩みを抱えている生徒やソレが元になって起こる問題行動の存在を聞くもの。でも私1人で出来ることには限界がある。だから、そんな生徒の問題を解決する力が必要なのよ」

「……でもソレを解決するのは教師の務めじゃないか」

「確かにね。生徒会が手を出す必要は一般的には無いわよ。でもね、私は皆がやりたいと願う事を実現する力が欲しい。そして、今の生

徒会にはソレが可能にする努力が必要なのよ。いい？ 神承君、自由を得るということは責任を負うことなの。先生方は確かに生徒会に多くの自由を譲渡してくれたわ。でも、ソレはその自由の中で起きる物事の責任を負うということなの。権利を欲しがるだけではダメ。権利が欲しければ、ソレに見合うだけの義務を果たさなくちゃダメなのよ」

「確かにそうだけど……なら、最初からそんな自由を得ない方がずっと楽じゃないのか？」

「そうね、確かにその方が「楽」ではあったと思うわよ。でも、きつとみんなの意見で自由に決める事が出来た方が私も、そしてみんなも楽しいじゃない。私は、その為には努力は惜しまないつもりよ」

そう、なんでもないことの様に簡単にさらりと話すエレン。

でも、おそらく彼女は見えないところで沢山、沢山ソレを可能にするための努力をしてきたのだろう。

きつと、ソレは簡単な事ではなかったはずだ。

でも、彼女はそれをおくびにも出さない。

正直、驚いた。実際、現生徒会長のエレンは非常に人気者だ。

勿論、その容姿、極端に革新的な生徒会運営と生徒の自主性を尊重しすぎる面からやっかみを受ける事も多いが、しかしやはり人気者なのは確かだ。

今までは、その派手な容姿からの事なのかと思っていたのだけれど……。

でも、それは勘違いなのだと思います。

彼女には、人をひきつける魅力と、それに伴う力と努力がある。

そんな彼女に皆が魅かれるのは当然のことなんだ。

あれ、でも何か忘れてる気がする。何だったけな……。

「と言うわけで、神承君、我が生徒会はアナタを風紀委員として歓迎するわ！」

「……ハッ！ 思い出した、何か適当な良い話についてい流されてオツケーしそうになってたけどその手には乗らないぜ！」

「ん？ 何の事？」

「いいかエレン！ そもそも俺は、一言も風紀委員をやるなんて言っ
て無いぞ。なのに何で俺がやることで決定してるんだよ！」

「へ？ まさか、断る気なの……この私の意見を」

「いや、そうは言わないけどさ……でも考える時間くらいあった
て」

「何言ってるのよ勿体無い！ 風紀委員になれる機会なんてそう
ないんだから。風紀委員経験は進路の推薦の時にはかなりプラスにな
るし、私直轄の役付けだから風紀関係の事にはほぼ独立した権力を
もてるのよ！」

げっ、そんなに重要なポストだったのか。

と、黙っていた柳瀬がここで口を挟む。

「あー、ちなみに男子剣道部部長の笹山はどうもその2つが目的だ
ったみたいでさ。前エレンが私を風紀委員に勧誘していたのを聞いて
たみたいで、それからしつこく推薦の時のプラスになる事と権力
の事を確認しながら自分を推薦しろって言ってきたしね」

「ふーん。笹山って人を私は知らないけど随分露骨な人ね。まあ、
兎に角そう言うこと。なりたいて言う人は幾らでもいる魅惑のポ
ストなのよ？ それをみすみす逃すなんて勿体無いと思わないの！」
「そうは言うけどねエレン。いきなり今日聞いてさあ決めろってそ
んな急な話……」

「良いじゃない。神承君みたいな人は悩んでも大抵良い方に考えは
向かないもの。さあ、早くハイって言いなさい！」

「そうは言われてもなあ……」

魅力的な話だとは思っけど、なにぶん色々大変そうだしなあ…。

「もー！ いつまでウダウダ悩んでるのよ、早くやるって言いなさいよ。会長命令よ！」

「んな無茶な。はあ、考える時間が欲しいんだよ。なあ柳瀬からも言ってくれないか？」

そう柳瀬に助け舟を頼む。だが……。

「私もエレンに賛成だね。神承はこの話を受けるべきだね！」

「うわ柳瀬デメツ！ 裏切りやがったな！」

「裏切るも何も……そもそもこの話を持ってきたのは私なんだから、私は最初っからエレンの味方さ」

そうして人が悪そうにくっくくと笑う柳瀬。

クソッ！ そう言えばそうだった。俺とした事が失念してたぜ。

「そうは言っけどさ。そんな大変な事俺に勤まるかどうか……」

「大丈夫。きっと、神承ならできるさ」

「そう簡単に言っけどさ……」

思わず、腕を組んで考えてしまう。

俺に、出来るのか。俺がやるのが果たして正しいのか。そもそも、俺は風紀委員をやりたいのか……。

エレンも柳瀬も、流石に口を閉じて見守ってくれている。

だが、幾ら考えた所で、答が出てくることも無い。

ハア、一体どうすれば……。

だが……。

「ねえ、神承」

そんな、沈黙を破る柳瀬の声。

「ん？ なんだよ」

「私はね、神承の事好きだよ」

「へ？」

思わず間抜けな声上がる。

突然の事に思考が停止して呼吸が止まる。

「そう、好き。私は、神承のことが好き」

「や、柳瀬……？」

「何しろ神承は良い奴だし強いし付き合いも良いし気が利くし。本当に良い奴だよ神承はさ。私は神承の友人で居られる事に、凄く幸せを感じているんだ」

「あ、そ、そう」

な、なんだ、友人としての「好き」か……。

一瞬告白されたのかと思って思考停止してしまった。本当にビツクリしたぜ！

ふと、友人としてと解かった時に胸の奥で微かに残念な気持ちになった気がした。

なんだろう。凄く嬉しい言葉で、俺も柳瀬の事を友人として大好きな筈なのに……。

だが、そんな疑問を確かめる暇も無く柳瀬は言葉を続ける。

「でも、神承は凄く飄々としていて、何にもこだわらない所がある

だろう？」

「そうかな？」

「そうなんだって。何にも囚われず、何にも拘らず、何にも執着をしない。あれ程の才能を持っている剣道もあつさりやめてしまったしね」

「そう……なのか？」

自分の性格なんか、殆ど気にした事も無いから良くは解からない。

「勿論、それも神承自身の性格かもしれないし、どういう生き方をするのも神承の自由だよ。でも、神承はそのまま良いのかい？」

「そのままで……」

「ああ、そのまま何もせずに、特別な想いも目的も無く、ただ日々を生きているだけで」

ふと、胸の奥でチリチリとした痛みと焦燥を感じた気がした。

それは、あの柳瀬と一緒に帰った日に見た夕焼けを見た時に感じた感情と同じ物ではなかったか。

「何も為さず、何も想わず、思い出すらなく……それは、凄く勿体無い事だと思う」

そう言つと、柳瀬はふうとため息をついて、手元の紅茶を飲む。

「神承に風紀委員が適任かなんて、実際の所私にも解からないし確証なんか持てる筈もない。でも、私は神承には務まるだけの力があると思う。ううん、在ると信じてる」

「柳瀬……」

「プラスになるかマイナスになるか、神承が風紀委員をやってどうなるのか、本当の事なんて私には解かるすべも無い。でもね神承。」

エレンはあんなんだけど、それでも実際には信頼できる人間で、そして私の友人なんだ。エレンと一緒に神承が働く事で、何かを想う事が出来たり、目的を持ったり、将来についての何かを少しでも見つけることが出来たとしたら、私は友人としてこの上なく嬉しく思うよ」

「柳瀬、お前……」

「まあ、正直ね。おせっかいかも思ったんだけど、でも思ってしまったんだから仕方が無いじゃんか。勿論、神承が嫌だって言うのなら無理強いはいないんだけどね」

そう言い切ると、もう言うべき事は全て話たとしても言うように俺から注意を外すと目を閉じて紅茶を味わう柳瀬。

つられるように俺も手元のコーヒーを飲む。

コーヒーはすっかり冷えていて、普段より余計に苦く感じた。

だけど、もう心の中での迷いは無かった。

俺は、もしかして、いやもしかしなくてもトンでもない幸せ者なのかも知れない。

だって、これほど自分の事を思ってくれる友人とめぐり合う事なんか、普通は無いのだろうから。

だから、そんな友人の言葉には、耳を傾けないと。

「解かったよ。風紀委員の話、受けてみるよ柳瀬」

「そう。私としても、それは良い考えだと思っね」

そう言うのとニヤリと笑う柳瀬。

笑い方は相変わらずニヒルで悪人っぽかったけれど、その笑顔は彼女なりに心から笑っているように見えた。

「ふう、話はやっと纏まったみたいね。それじゃあ」

そう言つと、少し大袈裟に、舞台女優のような優雅な振る舞いで右手を差し出すエレン。

「生徒会長のエレン・ブレンターノとして、神承君。菖蒲里高校生徒会はアナタを風紀委員として歓迎するわ。よろしくね！」

「ああ、こちらこそ」

そう言つてその白くて綺麗な手を握り返す。

こうしてここに、菖蒲里高校生徒会風紀委員としての神承武が誕生した。

何かは良く解からない。

でも、なにか、決定的なものが動き始めた、そんな気がした。

風紀委員とは？（後書き）

何とか時間を取って新話アップしました。

評価、感想、本当にありがとうございます。

評価、感想は、勿論それだけでも嬉しいのですが、それを入れていただくことによって更に多くの方に読んで頂けるきっかけになるので凄く力になります。

ただ、パソコンの調子が悪く固まってしまい返信を書こうとすると結果的に凄く時間がかかってしまったため一時的に返事を書いていない状態になってしまいましたすみません。

もしも返信が必要であれば作者紹介のほうにあるメールフォームからいただければメールチェックは（忙しい日は出来ない日もありますが）一応日課なのでその時に一緒に返信できと思っています。

次はまた少し時間がかかるとはと思いますが、よろしくお願いします。

（9月10日注）

第7部分男前柳瀬と純情（変態）神承の畳描写について。

畳表記を変更しました。具体的に言うと、畳の描写を無くしました。

誤字等の小さな問題ではなく世界観の問題なので非常に悩んだのですが、自分の置かれていた環境をモデルにしたところ、やはりかなり少数で在ったことは事実のようなので、意見を取り入れて、畳表記を消しました。

この件に置いて不快に思っていた方も居られると思います。ごめんなさい。

あと、元の状態は、消してしまうのも汚い気がしたのでこの話だけをブログの方（<http://19320925.blog104.fc2.com/>）に保存しておきました。

大きな変更になりましたので、戸惑う方も居られると思います。
すみませんでした。

あと、この注釈は問題の第7部分、それと改変時最新部分である
第15部分の各後書きにて置いておきます。
ご迷惑をおかけしました。

計画通りの生徒会長

そう、その瞬間、彼女と握手をしたその時に確かに何かが動き始めた気はしていた。していたのだけど……。

幾らなんでもこれは動きすぎではないだろうか。

「ねえ、あれが朝のアレでしょ……」

「あつ、ホントだー、風紀委員って書いてある腕章つけてる！」

「でもまあ、顔はそれなりよね」

「ねえねえ、どれぐらいの風紀の乱れで注意されるのかな。私大丈夫かな？」

「美紀くらいなら平気でしょ。それより注意ってどんな感じにされるのかな？」

「わかんないけど。ほら、でもうちの学校も風紀が乱れてるのってちょっとヤバイ感じの人たちじゃん。ああ言う人とかにも注意できるのかな？」

「アハハ、そりや無理でしょ！ 風紀委員くらいじゃびびって出来ないって。それにあの人たちも生徒に注意されて言う事聞くような感じに見えないしー」

昼休み、廊下を歩いているだけで皆の視線が刺さって自分に対する噂話が聞こえてくる。

今まで特に目立つ事もなく平穩に過ごしていた自分からすると居心地の悪い事この上ない。

だが、そんな泣き言も虚しく周りからの自分に対する視線と噂話が絶えない。

「あつ、由美由美！ あれが風紀委員よ。腕章してるもん。うわっ、学生服のホック締めてる。ありえないーい！」

「ホントだ。超ダサーイ！」

煩い。俺だってホツクなんて苦しいし面倒だし締めた事なんて入学式にしかなかったさ。

でも仕方ないじゃないか。

朝に会った柳瀬が「今日から風紀委員なんだから神承もしつかりしなくちゃ駄目じゃないか」って言って締めて来るんだもん！

笑顔で俺のホツクを締めてくれる柳瀬の顔を思い出すと外す事もできん。

なんだか現状に頭が痛くなってきた。

ハア、そもそも何でこんなことになったのか。

話は先週にまで遡る。

ケーキシヨップ兼カフェの「ヒンデミット」で我が校初の風紀委員の件を承諾してからはそりゃあもういろいろあったさ。

まず校長へのお目通りと紹介。

「おお、エレンじゃないかよく来たよく来た！」

ってなもんで、やけにフランクな初老の男、と言うかうちの校長にお目通しされて、もともと話は通してあったらしいけど、兎に角風紀委員の設立の最終決定と当事者（俺ね）への任命を済ませた、のがヒンデミットでの翌日の木曜日。

さらに翌日の金曜日には生徒会室へ招待され、副会長以下全生徒会所属生徒への紹介される。

影が薄い、と言うかエレンが目立ちすぎるので副会長以下の印象はなかったのだが、皆真面目で有能そうな人ばかりだった。

風紀委員はこの生徒会室を拠点に活動する事になるらしいので、皆とは仲良くするように言われる。

と言うわけで金曜日が終了。

そして、よく月曜日、つまり今日の朝に、その動きは起こる。
月曜日朝は、毎週全校生徒を体育館に集め朝礼をすることになっている。

そして朝の会長の挨拶の途中、エレンは言ったのだ。

「今週の朝礼では、皆さんに重大なお知らせがあります。我が生徒会に置いて、新たに風紀委員の役職を設立する事となりました」

突然の発表にざわつく生徒たち。だがそんな様子を気にした様子もなく続けるエレン。

「と言うわけで、2年B組。神承武君、前へ」

打ち合わせもなく突然呼ばれたのでビックリする俺。ざわつく周りのクラスメート。

だがうるたえても居られないので壇上に上がる。

初めての壇上から見る光景。皆の視線で経験の無い緊張が湧き上がる。

えーっと、確かこんな時は、みんなジャガイモみんなジャガイモ……。

だが、そんな努力を实らせるまでの時間を与えられる事も無く、エレンは続ける。

「こちらが、今回風紀委員をやって頂く事こととなった、神承武君です。ちなみにある人の推薦を受けて話したのですが、文武両道、品行方正の上、正義感に溢れる素晴らしい人間で我が校の風紀の維

持に全力を尽くしてくれるという事で適任と感じ是非と生徒会一同の方から頼み込んだ形になります」

って、幾らなんでも口から出任せに並べすぎだろうそりゃ！

こんな嘘八百でいいのか。聞いてるこっちが恥ずかしいくらい嘘だらけだぞ。一つも当たってないし。

「そう言うわけで風紀に関する権限のうち今生徒会が有している権限を全てこの神承君に委譲する事となりましたので、皆さんはもしも風紀の内の生徒会に権限がある部分の行為で注意を神承君から受けたら速やかに従う義務を負う事となります」

ざわ……ざわ……。

このどよめきは……

間違いなく……戸惑い

そして……

疑念！

その不信任は……

圧倒的………！

「み、みなさん静粛に！」

余りのどよめきに流石に焦ったのかエレンが号令をかける。

「確かに、唐突だとか独断専行だとか言う気持ちを持たれる事も当然だと思います。それに関しては経過の報告を怠ったこちらに落ち度があります。しかしっ！」

そっぴいキツと前を見据えるエレン。

「私たちには他の学校とは比べ物にならないくらい多くの権利を与えられているのです。私はそれを誇りに思っています。なぜなら、権利や自由は私たちの学校生活を楽しい物に変えるための力になるからです。でも、権利や自由を得るといのは同じくらいに多くの責任を負うという事なのです。その責任を、皆さんは全て負っていると言い切れますか！」

しかし依然ざわざわは収まらない。それどころかますます大きくなる。

良く聞くと、横暴じゃ無いのかなどと言う声まで聞こえてくる。

と、そこで少し俯きがちになり沈む声を出すエレン。

「私は、去年の9月に会長に当選してから私たちの学校生活を少しでもより良い、楽しい物へとする為に努力をしてきました。最善を尽くすために努力した……つもりです」

心なしか声が少し震えているような感じにも聞こえる。

まさか、泣いてる？

いや、まさかな。

「その結果、少しでも皆さんの学校生活が楽しくて充実した物になったらと、それだけを考えて……」

そう言っただけで顔を上げる。心なしか目が潤んでいるような……。それを受けて少し静かになる空気。

「私は、今の自由な校風を行える皆さんと一緒に送れる学校生活を誇りに思っています。でも、その過程で私たち生徒会だけでは手が回らない問題が出て来ているのも事実なのです。だから、私達は風紀委員を創設することにしましたのです。私たちの権利に対する責任を果たすために」

気がつけば誰も喋らずにしんと静かになった体育館で、エレンは話し続ける。

「皆さんのことを思い、最善を尽くそうと努力と検討を重ねた結論として、私たちの抱える問題を解決するために風紀委員の、神承君のような人の力が必要だと判断したのです。いきなり理解して欲しいと思うのは確かに横暴なのかもしれませんが。でも……」

そこで、また全校生徒たちを見ながら、ふう吐息を吐いて。

「私たち生徒会は、それを必要と判断しました。だから、支持がいただけるなら、凄く嬉しいです」

そう言生きると、エレンはふとさり気無く視線を投げかける。視線の先にあるのは……あれは、柳瀬、か？
なんだ？ 今のアイコンタクトは？

と、そのエレンの視線に答えるようにニヤリとして拍手を始める

柳瀬。

最初はそれに戸惑うように周りの生徒が手を叩くが、しかし多数の習性だろうか。その拍手は徐々に感染して、次第に大きな、そしてやがて全員の拍手となった。

「ありがとうございます！ 本当に、理解がただけて嬉しいです。本当に……」

そう言ってお拍手のなか、御辞儀をするエレン。生徒会長の提案に答える生徒たちの姿。傍から見れば美しい図である。

だが、俺も釣られて拍手をしながら、何か不自然な物を感じていた。

「それでは次は神承君からの挨拶です」

なんとおー！！ 聞いてないってそんな事！

「ほら、神承君。生徒の皆さんの承認も頂けたのだし、早く挨拶挨拶！」

そう言っただけで斜め後ろで控えていた俺の方へと振り返るエレン。

だが、その顔は、先ほどの様子は対照的に酷く悪辣な表情で笑みを浮かべていてまさに……！

計 画 通 り

と言う表情であった。

って、さっきのしおらしい言葉も全部演技なのかよ。なんて事だ、さっき俺が感じていた違和感の正体はコレかよ！

「ほらほら、早くしなさいよね神承君！」

「あ、ああ……」

とは言えなんといった物が……。

しかし、時は待ってくれず考える時間など無い。ええいつ、ままよ！

「は、ははは初めまして！　今回風紀委員をやらせていただくこととなった神承武でちゅ！」

いかん！　噛んだ上に更に赤ちゃん言葉になってまった！

全校生徒の前でなんと言う失態！　当然生徒たちは笑い声を上げる。

その声で更に頭は真っ白になる。

俺はっ、おれはどうすればいいのだ……！！！！

それからの事は忘れたい。

しどろもどろになりながら情けない挨拶をして朝礼を終え、教室に帰っても好奇の視線を受け続ける。

休み時間の間にはクラスメートから質問攻めにあい、心の休まる暇も無い空間に耐え切れずに昼休みには逃げるように教室を後にした訳だ。

だが……。

「あ、風紀委員だぜアレ！」

「お、マジだ、本物見ちゃった。アレに注意されるの俺たち？」

「そうじゃね。スゲーありえねーよな」

廊下に非難した所でこのザマである。

それより今の奴一年坊じゃねえか。先輩をアレ呼ばわりとは良い度胸だよ全く。

注意してやろうか……とも思ったのだがここでまた目立つのも御免だ。それにそんな気力も無い。

そう、今の俺には心の休まる場所がほしいんだ。心の休まる、人の目の少ない場所……。

あ、そうだ、あそこなら人も少ないかも……。

そうして俺はその場所を目指して歩き出したのであった。

告白（Yの場合）

ギギイーツと言う軋んだ金属音を立てて開けた扉の向こうには青い空が広がっている。

人の少ない場所、屋上へとやってきた訳だが。

そう、無人の屋上。立ち入りは自由なのだがこれで綺麗でベンチの一つでも置いてあれば昼食を取る生徒たちで賑わう場所にでもなるだろう。

だが、フェンスで囲まれた何も無い空間では好き好んで昼休みに来る奴もいないだろう。

そんな無人の屋上を適当に歩き、日当たりの良くて埃っぽくなさそうな所を適当に選んで手で払いそこに寝転がる。

そうして空を見上げる。青空の下、いくつもの白い雲が流れていく。

ふと吹いた、一陣の梅雨前の春風がこの上なく気持ち良い。

はあ、良く考えれば朝礼からの数時間の間で、初めての安らぎの時間ではないだろうか。

本当は風紀委員は朝、そして昼休み、放課後の時間に校内の見回りをしなくてはならないのだけどこの騒ぎではそれも難しいし今日はいいだろう。

願わくば、この静寂と休息がせめて昼休みいっぱい位は続いてくれる事を……。

だがそんな願いも脆くも崩れつつあるのであった！

5分ほど空を見上げて寝転んでいたのだが、突如響いた金属の軋むドアの開閉音を聞き思わず身体が強張る。

気がつけば思わず身を潜めて隠れていた。って、何でそんな事したんだろうな、俺。

だが、そのかいあつた様で屋上への進入者は俺の存在に気付く事はなかったようで無言で入ってきた。

なんだろうな、少し気になるので進入者の方を覗いて見る。入ってきたのは……女子生徒の二人組みだ。

あれ、片方、柳瀬じゃないか……？

気になるので気配を消しつつ話を聞けるポジションへと行く。

うん、やはり片方は柳瀬だ。でももう片方は……誰だ？ 結構可愛い娘だけど。

と、フェンス際まで歩いて行つた柳瀬がくるりと女の子の方へと振り向いた。

そして訥々と話し出す。

「その、手紙ありがとう。君、私と面識無かつたよね。名前は？」

「清水優子って言います！ その、柳瀬先輩、私の手紙は……」

「ああ、勿論読んだ。ありがとう。私なんかを好きと言って貰えた事はとても嬉しいよ」

「それじゃあ、その、私とっ！」

「うん。でも、それはダメ、なんだ。すまない。私は、その、普通に男の子が好きな女だから、その、君とて言う事は少し想像できない」

「そ、そうですか……」

「うん、その、ごめん」

「で、でもっ、その、先輩は男子の告白も結構受けていて、それも断っているって聞いたんですけど。例えば陸上部の田村先輩とかからの告白も断ったって!」

田村……聞いたことあるな。何か陸上部でのインターハイの出場者で長身のイケメンだから女子からは王子とか言われていて人気があるとか。

柳瀬、そんな奴からも告白されていたのか。知らなかった。凄いな……。

でもなんで断ったんだろ。

「高清水さんだっけ……誰からその話を聞いたのかな? 私は誰かに話した記憶は無いんだけれどね」

「えーっ、有名ですよ。なんだか田村先輩が柳瀬先輩に振られたってヤサグレてたって!」

「そうなんだ……」

「ええ、だから、あの田村先輩の告白を断るくらいだから男の人に興味が無いって言う噂も流れているんですよ?」

「そっ、そんな。私は普通に男の子が好きなんだって!」

「だったらどうして田村先輩の告白断ったんですか? 他に好きな人が居るとか?」

「別にそんな相手は……いないけどさ。だけど田村君の事を私は良く知らないしさ、そう言う相手と付き合う事は出来ないよ」

「そうですか……」

「うん、そうなんだ。その、答えられなくて、ごめん」

「いえっ! 告白を受けて貰えただけでも、うれしっ、い、です」

そう言いながらもその声は少しずつ涙声になっていく様に俺には聞こえた。

「本当にっ、ありがとうございました。柳瀬先輩と話せて、嬉しかったです」

そう言うつと俯き加減で屋上を後にする高清水と言う娘。

後には柳瀬が一人残った。

柳瀬はどこか悲しそうに、申し訳無さそうにポツねんと立っている。

そして……。

「本当に、ごめん」

誰に言うわけでもなく、そう呟いた。

そのまま今度はフェンスの方へと歩いていき、フェンスを片手で掴んで空を見上げた。

今の体勢だと後姿しか見えないのだが全身からアンニュイな雰囲気気が滲み出ている。

うん、こんな柳瀬は見た事は無いけれどこれはこれで中々絵になっ
つていて……。

「ハア、儘ならないものだよね、全く」

突然の言葉に一瞬俺が隠れているのがバレたのかとビックリする。
だが俺も気配は消しているし、柳瀬もこちらを気に留めた様子も
無い。となると、独り言……か？

「本当に、私は、どうすれば良いんだろっかな、ねえ、神承」

そう、空を見上げて俺の名前を呼んだ！ やっぱりバレているの
か！

だが次の瞬間には柳瀬はそんな動揺している俺を気に留めること

も無く何事も無かったように振り返ると扉へと向かい、屋上を後にした。

やはり、バレては居なかったのか？ となると独り言……だったのか。

しかしそうならば何故柳瀬は俺の名前を呼んだのだろうか……？

うん、全く解からん。

告白（Yの場合）（後書き）

お久しぶりです。

身近な人から歩く不健康と言う不名誉な称号を得たs i k oです。
正直悲しいです。でも今日まで4連で、明日からも4連で忘年会。
きっと私の肝臓は安酒で満たされた不味いフォアグラとなっている
事でしょう。

でも少し元気が出たのと時間が出来たので書き溜めていた部分を仕
上げてアップしました。

次話、告白（Eの場合）

更に次話、紅色の研究まではほぼ出来てますが仕上げに後少々時間
をなくください。

ちなみに紅色の研究は当たり前ですけどシャーロック・ホームズと
は欠片ほども関係の無い話ですのでご了承ください。

ではまた。

告白（Eの場合）

そうして考える事数分。

やっぱり柳瀬が何で俺の名前を呼んだのかは解からないが、もうそんな事どうだって良いやと思い始めていた矢先！

ギギイーツと言う軋むドアの開く音が次の来客が来た事を告げた。全く、この小汚い屋上にしては今日は来客が多いな。今度は誰だよ！

そう思い来客者の方を気配を消してこっそり覗き見ると……。

「ふう、薄汚れてる屋上だけど今日みたいに天気の良い日は風が強くて爽やかで気持ち良いわね」

そう、キラキラとした金髪を棚引かせながら立つフランス人が1人。

って、今度はエレンかよ！

だがどうやら1人ではないようだ。もう1人は、男だ。

それもただの男ではない。身長は190を軽く超えようかと言うようなかなりの長身でその上体躯の良い大男だった。

うん、なんて言うかすげえ強そうだな。

「それで、君？ 手紙には来いと言う内容だけで何の用かは解からないのだけど、何用で私を呼んだのかしら？」

「ああ、俺空手部3年の伊東って言うんだけどさ、エレンさ、俺と付き合っかない？」

また告白かよ！ まるで告白のバーゲンセールだな！

男女交際が風紀の引き締めの為には良くないなどと言うほど古い頭をしている訳ではないが、しかし俺を風紀委員に引き込んだ2人の女が居なければこの学校はもう少し大人しい気がする。

だが、今はそんな事はどうでも良い。果たしてエレンの返答や如何に！

「お断りするわ」

即答だった。これ以上ない即答だった。

簡単にOKが出るとは思ってはいなかったがこれは流石に酷い返答だろう。

流石の俺もビックリしたし、当然言われた伊東と言う男もビックリしている。

「なっ、何だよ！」

「なんでも何も、そもそも私あなたの事、部活動での活動内容で優秀と言う事は知っているけれどそれ以外は何も知らないのだから。それに私はアナタに対して何の感情も持っていないし、そしてそんな私がアナタと付き合うメリットが少しでもあるというのかしら？」

うん、ヒンデミットで話した時もあったが相変わらず辛辣だぜ。いや、正直と言うべきなのだろうか？

「ぐっ、で、でもな、メリットならあるぜ！」

「へえ、何よ。聞いてあげるから言ってみて」

「エレンは風紀委員に適任の人材が欲しいんだろ？俺がそれになつてやるよ。今日の朝挨拶していたんだっけ、かみじょう……とか言ったか？あんなひ弱そうな奴よりは俺のほうが役に立つ自信あるぜ」

「さて、それはどうかしらね。私は恐怖政治をするつもりも無いの

だし。それに私はよく知らないんだけど彼はかなり強いそうだしアナタじゃ敵わないんじゃないの？」

「そんな馬鹿なわけねえだろ。あんな噛んじまってまともな挨拶も出来ない奴にこの俺が負けるわけが無い。あんな情けない奴に！」

「ああ、朝のあのときの挨拶ね、ふふふっ、ホント面白いわよね神承君って。まさかあの場で噛むなんてね。それも「神承武でちゅ！」だもの。舞台上なのに思わず噴き出すところだったわ。ホントにもう、あんなに面白いのに笑えないなんて何の罰ゲームかと思ったわよ本当に。ああ、そうね。そう言う私を楽しませるって言うことに掛けても風紀委員の役職にはアナタじゃ役者不足よ」

「……っ！」

「わー、言うなあ……」。

「っていうかエレンも人をダシにひとりで笑ってはいけない朝礼やってる暇があつたのなら助けて欲しかったのが本音だぜ……」。

「それにね、何より気に入らないのがあなたのその態度よ。そもそも校則で書かれているように告白には出来るだけ手紙をつて言うのがあるでしょ？ それがもしもちゃんとした恋文だったら私も真剣に考えてお返事をしたわよ。でも、手紙には来て欲しいとだけ。我慢じゃないけど私はよく告白されるから今回もそうだったとしたらとも思ってたわよ。だからちゃんと来たのに、どんな心のこもった告白をしてくれると思ったたら偉そうに……」「エレン、俺とお、付き合うきはあ、ないかあ？」だもの、馬鹿にするのも大概にしなさいってなもんよ！」

すごい剣幕である。ちなみに「エレンさ、俺と付き合いえないかあ？」の部分は低くてアホっぽい声で言っていた。伊東君の物まねのつもりなのだろう……多分。

「確かにアナタは私の先輩に当たるし私はアナタの後輩よ。でもそれが他人に付き合っただけと頼む態度？　こう言う時は先輩後輩年上下関係ないわよ。相手が後輩でも誠意を持って「エレンさん、僕と付き合ってください！」とか頼むのが筋じゃない？　それなのにそんな告白……。それじゃあ誠意の欠片も見えてこないし心だっで伝わらない。そんな告白じゃ私どころかどんな女の子だってあなたになんか振り向かないと断言できるわよ！」

「何だっ！」

「確かにアナタは確か空手部で結構活躍してて、確か……空手部の副部長だったわよね。それは立派だと思っし誇れることだと思うわ。学校の活動をちゃんと頑張っでそれなりの結果を出しているのだから。空手部副部長……。うん、立派なものよ。でもね……」

そう言うつと急にエツヘンとでも言うように腰に手を当てて偉そうにふんぞり返るエレン。

間抜けなポーズなのだがもともとデカイバインバインのチチが余計強調されて、うん、なんつーか、ダイナマイツ。

「そんなこと言えば私だっで生徒会長よ！」

……。

いや、まったく意味解らん。

「エレンデメエ、黙っで聞いてたら訳解らないことばかり言いやがっで……。舐めてんのか、俺を」

「別に舐めては無いわよ。だっで事実じゃない」

「チツ……。それにしてもエレン、お前は今滅多に人の来ない学校の屋上に俺と二人つきりっで言う今の状況わかってんのか？」

うん、二人つきりでは無くて俺もいるのだけど、まあいいや。今

更口も出せないしな。

「別に解ってるけど、それが何か？」

「だからよお、あんま俺を怒らせないほうが良いって言ってるんだぜ。俺を怒らせると……痛い目見るかも知れねえしさあ」

「あら、痛い目ってどんな目かしら？」

「こんな目だ……っぜ！」

そう言つと伊東は突然エレンの制服の胸元を掴みそのままエレンごと突進して屋上のフェンスに叩き付けた。

「！！！！」

余りのことに思わず物陰から飛び出しそうになる。

助けなければ！ そう思つたのだから。

だが、一瞬。その一瞬エレンのほうを見たら。

「うふふふふ」

笑っていた。もう、これ異常ないほど悪人面で。美人だから余計に凶悪そうに見えるその顔で。

フェンスに押し付けられているのをモノともせず余裕の笑顔である。

「ねえ、伊東君。アナタ、女の子に暴力振るうんだ。サイテーね。こつ、男としてのプライドとか言うものは無いの？」

「てめえ、いけしゃあしゃあとはいやがって……。エレンの言うことを俺のプライドが許さなかったからこうなつてんだろーがよ！」

「ふうん、つまりあなたが傷ついたから私に仕返ししたって言うわ

けね。尤もな意見だわ。でもね……」

でも？

「一回は一回よ！」

そう言つと、エレンは、思いつき男の股間を蹴り上げた。

「おぶうつ！」

そんな奇声を上げて蹴られた股間を押さえて前のめりになる伊東君。

それを見て思わず俺も反射的に前のめりになって自分の股間を押さえていた。

男だからこそ解るその痛み！

そこを的確に蹴り上げるなんて、エレン……残酷だ、残酷すぎます！

だが、エレンの残虐性はそれだけで収まらない。

良く見ると、右手を高く上げて振りかぶって……。

「えいつ！」

腰の入った良いビンタが前のめりになってちょうど良い高さになっていた伊藤君の頬に直撃した。

パシィイーン！　と言う素晴らしい響きを残して伊東君はダウンした。

あれだけの体格差がある屈強な男を美人の女性がダウンさせる図

と言うのはシニールですらある。

エレン……ここまで強かったのか。

「ふう、私も伊達にモテては無いわよ。たまにアナタみたいな馬鹿がいるからね。告白を受けるときは基本二人っきりの時間だもの。何かあっても自分の身を守るくらいのは力はつけてるつもりよ。侮らないで欲しいわね。それから……」

そう言つと蹲つたまま倒れて震えている伊東君を蹴飛ばして仰向けに転がす。

そして、なんとそのまま仰向けになつた伊東君の股間を足でぐりぐりと踏みつける！

「私は生徒会長よ！ 偉いのよ！ だから初対面の人間に呼び捨てにされるいわれは無いわ。エレンじゃない、エレンさんでしょ。あんまりふざけた態度とると去勢するわよこの駄馬！」

「あ”あ”あ”あ”あ”ああ~~~~~！」

断末魔……と言つか昇天しそんな絶叫をあげる伊東君。

女王様や。ホンマモンの女王様がここにいる！

きつとそのクチのヒトにとって堪らない光景だろう。

絶叫を上げる大男とぐりぐりする金髪美人。うん、完璧な図だね！

「ふう、今日はこの程度にして置いてあげるわ」

そう言つと、スッキリとしような表情で伊東君から足をどけ屋上を出て行くエレン。

後には、恍惚とした表情で気絶して取り残された男が一人。

だが、その男の顔には、悔いの無い表情に俺には見えた。
あれは、やることをやり遂げた漢^{オトコ}の表情^{カオ}だね。

しかし、まあ、アレだな。俺を風紀委員に引き込んだ二人がモテ
てて告白されまくってるのは解ったのだ……。

柳瀬はまだ良いとして、だな。

エレンに風紀を守るべきだなどと言う殊勝な心掛けは、欠片ほど
も無いことだけは良く解った。

「ハア……風紀委員、か」

屋上に取り残された俺は、実は少しだけぐりぐりされてた伊東君
を羨ましいと思っていたりする自分を必死で否定しながら、ただた
だため息をつくことしか出来なかったのだ。

告白（Eの場合）（後書き）

今日、時間が無くて新幹線の中で仕事する振りしてコレの仕上げをしていたときは見られたらと思うとヒヤヒヤでした。

それぐらいに今回はインモラル&マニアック！

大丈夫なんでしょうか……。

それと感想等ありがとうございます。

時間が出来次第片っ端から返信していきます。

どうも返信しようとするとうイルス漬けのパソコンが固まってしま
って……。

感想にあったネタを散りばめる量、気をつけます。

では。

エレンの秘密兵器

そんなこんなで、エレンのあの痴態を知ってから風紀委員として巧くやれるか不安にこそなったのだがそれから数日は非常に真面目と言っか、風紀委員らしく過ごすこととなる。

まず最初の仕事はどんな行為が校則から外れるのかをエレンを教師に向かえ生徒会室でマンツーマンで勉強。目標は「生徒心得」である校則の全暗記である。

そんな必要が在るのかと問いただすも「あるのよ！」の一言で片付けられ、試験勉強のようなノリで校則を覚える日々が始る訳だが。

しかし何で我が校の校則は108個もあるのだろうか。煩惱の数ジャマイカ……。

と言っか、幾らなんでも多すぎではないだろうか？

しかし実はそれには理由がある。我が菖蒲里高校は自由な校風と言われるだけあり、普通の学校のような服装や生活の事についての校則と言っのは意外と少ない。

だが、その他、「学校で楽しく生活するために」と書かれた項目の部分が異常に多いのだ。

しかも内容は「生徒同士の恋愛の告白には、出来るだけ恋文を使用する事」だとか、「体育大会では真剣に勝ちを狙え」だとか、「学食でカレーを食べる際にソースを掛けるのは禁止。我が学食のカレーにソースはあわないと思うし」だとか「文化祭の後、夜の時間の後夜祭のダンスはやつてもやらなくても良いのだけどやった方がいいと私は思う。皆で参加して青春時代の思い出を作るべきだ」だとか校長お前いい加減にしるよって感じの校則が盛り沢山である。

このアホな校則を全て覚える日々は拷問に等しかった。

毎日毎日、休み時間は単語帖に書いたこのクソ下らない校則と睨

めっこして、放課後は生徒会室に行き「108の校則をすべてかけ」と書かれた108のマスに別れた問題用紙をエレンの監視のもと埋め、エレンがする答合わせを待つて「55点。神承君はまだダメダメね」。ホント使えない神承君だわ」とか言われたりするのである。余りの事に校長までも恨むようになった。

ストレスの余り日を追う毎に頭痛が酷くなる中、柳瀬が買って来てくれたジョージアマックスコーヒーを飲んで糖分をとり、真っ白な灰になって燃え尽きていたのから何とか復活して家に帰ったりする日々を過ごす事となったのである。

——だが、そんな苦痛の日の仲で段々と点数も上がり、そして迎えた今日。

「……………」
「……………」
「……………」

例によつて、例によつての答合わせタイムである。

ちなみにカギカッコが三つあったのは、俺と、エレンと、そしてどう言う訳か柳瀬が来てたからである。

「つて言うか柳瀬、どうして今日に限つて居るんだ？」

「いや、それがエレンに呼ばれてさ。何でも「そろそろ神承君のほうも仕上がるし、今日は祐と神承君にちょっとした話があるの」との事だそうだけどさ。神承、仕上がるつて言う事は今日の生徒心得テストは大丈夫なのかい？」

「うん、実は結構自信ある」

「へえ、凄いいじゃないか神承。勉強を初めてまだ数日しかたつて居ないのにもう全部覚えたんだ。やっぱり神承はやれば出来る子なんだから、普段の勉強もそれぐらい熱心にやったらエレンと競えるく

「らの点数にはなるんじゃないのかい？」

「ハハハハ、流石にそれは無理だつて。アレは天才なんだから。俺みたいな凡人との間には生まれ持った超えられない壁って言うのがあるのさ」

ちなみにエレンの成績は基本的に学年1位、五教科合計で495点を下回った事がないという化け物である。

「ふうん、私としては神承にもエレンと同じ天才性を感じるんだけどね」

「柳瀬が何を根拠にそんな事を言うのかは解からないけれどそれは買被りだと思うぜ」

「ハア、アレだけの剣道の腕を持っていながらこれだから神承はねえ……」

その意見に対してはノーコメントで！

俺が返事をしない事で柳瀬も黙り、ひたすらエレンが赤鉛筆を走らせる音だけが響く。

と……。

「はい！ 採点できたわよ！」

元気に立ち上がるエレン。

笑顔だ……これは合格の印か？

いや侮るな！ 侮るな神承武！ この後笑顔で「まだまだね。使えない神承君は去勢ね。宮刑に処すわ！」と言い出すやもしれん。

そう言う生き物なんだアレは！

油断しちゃいけない！

「満点よ神承君！ おめでとう！」

「へ……」

満点？

「凄いじゃないか神承！　こんな短い間に108もの校則を覚えるなんて。やっぱり神承はやれば出来るんだよ！」

「あ、ああ」

自分の事に嬉しそうな表情で俺の背中をバシバシと叩く柳瀬。少し痛みが不思議と嫌な気分はしない。

そうか、満点か……数日とは言えしんどかったけど少し報われた気分だ。

「そうね。正直神承君を見くびっていたかも。もう少しかかると思ってたんだけどね。思ったよりやるじゃない」

「お、おう」

誉められるのは嬉しいのだが、すこしくすぐったく感じてしまう。

「そんな偉い神承君に今日はプレゼントがあります！」

「へ？」

「これよ！」

そう言っただけの満面の笑みで俺に何かを渡すエレン。

「なんだこれは、携帯でもないし、モバイルでもないな。ゲーム機か？」

それは忍地堂の出した大人気携帯ゲーム機、ニンテンドーDX^{デラックス}という携帯ゲーム機を更に3分の1ほどの小さにした謎のコンピューター

ターらしき物体だった。

かなり小さい。だが目玉のペンはついていないようだ。

「ふふふふ、そんな1万円ちよつとのチャチなおもちやと一緒にされたら困るわね。これはプリンターノ重工本社で何故が開発された試作品よ」

「それで一体なんなんだよこれは？」

「そうね、位置情報共有GPSレシーバーとでも言った所かしら」
「位置情報共有GPSレシーバー？」

なんぞいそりゃ？

「解かりやすく言うて持つてる人間のグループ全員の正確な位置が高精度で表示される、そうね、カーナビのような物だわ。ナビのついた地図としても使えるし、持つてる人間同士でお互いの正確な位置を知る事もできるのよ」

「おお。そりゃ凄い！ でもなんでそんなものエレンが持つてるんだ？」

「だってさ、私って、ほら、お嬢様じゃない」

「まあな」

「その上、ほら、私って美人だし、カヨワイ女の子でしょ？」

「は？」

美人は認めよう。でもか弱い女の子？ 誰が？

そうして脳内にリフレインされるトラウマとなりかかってるあのセリフ。

「あんまりふざけた態度とると去勢するわよこの駄馬！」
ガクガクブルブル！

「なによ。何か文句あるの？」

「滅相も御座いせん！」

「ふうん……少し引つかかるけどまあいいわ。つまりね、私にはいつても誘拐の危険とかが在りえる訳よ」

「まあ、確率はゼロではない、よな？」

誘拐しようとした相手の身が心配になる話だが。

「それでね、フランスのおじいさまが心配して特注で作らせた品なのよ。私の居場所がいつでも解かるようにって」

なんだかなあ。さすがお金持ちといった所か。普通のGPS携帯じゃダメなのだろうか？

「なんか凄い話だな」

「ええ。ちなみに今用意されている数は4つ。うち使われているのは2つ。一つは私が持っている。もう一つが執事のポルナレフが持っているから、使い方なんだけど、例えばポルナレフは今東京に居るから、ここのPって書いてある所を押すとね……ほら」

そう言っただけに見えるようにレシーバーの画面のを向けて左端の人物欄の2番目に載っているPと言うところを指さすエレン。

と、画面が別の場所の地図になり、そこに赤い点で人物の位置が表示される。場所は当たり前のように田園調布だった。

「その人物が居る場所の地図に移り変わるわ。風紀委員として仕事サボられたら困るしこれなら学校の中のどこにいるかまでの精度で表示されるから常に正確な居場所も解かるの。それに無いとは思う

けど万が一学校の内外で危険な事や事件を発見したときも携帯で連絡さえくれればすぐに私が正確な場所に行く事ができる。どう、スグレものでしょ？」

「いや、確かになんだか凄く高性能なんですけど……これの料金とかは、ほら本体のお金とかパケット代とか……」

「うん、それなんだけど私のポケットマネーから出てるから大丈夫！」

そうやって例によってエッヘンとバインバインの胸を張るエレン。すげえ！ さすが金持ち！ さすがお嬢！ そして巨。！

「と言うわけで、神承君にはこれを常に持ち歩いて欲しいの」

「いや、別に構わんのだが。これを持つことになる俺のプライバシーは無くなる代わりにエレンの居場所も俺に筒抜けになっちゃうと思うんだけど」

「うん、そうよ。うふふふ、どう、私のプライベート、知りたいでしょ？」

そう言って怪しげに笑いながら「しな」を作るエレン。

「いや別に」

「なによもう！ 面白くない神承君ね！」

「いや、そんなことよりも4個あるって言ったけど、後一個はどうするのさ？」

「そうね、それなんだけど……」

そう言っただけでDXもどきの余ったレシーバーを弄りながら何となく視線を投げかけるエレン。

視線の先は……柳瀬か？

「ねえ、祐？」

「ん、なんだい？」

「私としてはこれを祐に持っておいて貰えると嬉しいのだけど」

「へ、何で私なんだい？」

「いや、そのね。余り深い意味は無いんだけどね。風紀委員を手伝って欲しいとかそういう無茶は言いつもりはないし。ただ……ね。神承君のことで何か問題が起きた時には時に祐にも手伝って欲しいな」

「ああ、そう言うことね。神承の責任は紹介した私の責任でもあるからそれはいいんだけど、でも、良いのかい？ それって凄く高価なものみたいなのに……」

「そんな事良いの！ 祐が持っていてくれると「私が」凄く心強いから！」

「ふう、解かったよ。エレンがそこまで言うなら持っておくさ」

「ありがとう！」

そう言うて本当に嬉しそうに柳瀬にレシーバーを渡すエレン。

ハア、エレンは本当に柳瀬の事を買ってるんだな。確かに、柳瀬は非常に信頼できる人間だし良い奴だしな。その判断はきつと間違っていない。

「さて、今日の目的が達成できた所で、神承君、祐、言うておく事があるの」

「ん、何さ？」

「私たちは今、他の生徒たちよりもお互いを少しでも深く知っていて、そしてこれからは常にお互いの居場所まで確認できる、そんな関係になったの」

「あ、ああ……」

「だからね、これからは一緒に生徒会役員として我が菖蒲里高校を楽しい学校生活が送れる場所にするために恥ずかしくない行動を取

るようにしましょって事。一緒に頑張って行きましょね、神承君！」

「お、おう」

そう、何とか返事はしたのだが、一つだけ引つかかるように思った事がある。

なんか、これじゃあまるで、お互いが運命共同体みたいじゃないかと、そんな事を。

エレンの秘密兵器（後書き）

久しぶりです、遅れてすみません。
紅色の研究は次話からです。

神承、校門前に立つ！

うららか日和の今朝、遂に風紀委員としての本格的な仕事始めの日である！

校則を全て覚えたので、どんな状況にも対応してそれなりの指導をすると言うことは、今の俺にとって恐らくそう難しいことじゃない。

しかし、全部覚えておいてなんだが実は俺はそれほどみんなに完璧に校則を遵守させようと意気込んでいるわけではない。

少し考えれば解ることだが俺は風紀委員とはいえ一生徒だ。そんな俺に注意される事というのはきつと嫌な気分がするに違いないしブライドの高い奴は傷つきだつてするだろう。

だから、俺は大らかな目で見守る事を主な仕事として、生徒の素行や風紀を注意することはよっぽどの事が無い限りしないようにしよう。

そう心に決めていた。そう、そんな風に決めていたはずだったのだが……。

「アハハハーマジウケル！ あゝ！！超お腹減つたしっ
っ」

目の前のこの生物は何であろうか。

数人の女集団、やけに姦しい集団は一人として校則を欠片ほども守っていないことは明白なその女子の集団であった。

その中でも特に目を引くのがその中心にいる、先ほどの台詞を發した女。

まず最初に目を引くロングヘアはまっキンキンに染められて、それも天然のブロンドのエレンの物とは違い明らかな染髪なのでドギツイ金色の頭。

両耳にはかなり巨大な髑髏のピアス、ドコで売ってんだあんの？ ツケまつ毛やラメ入りのマスカラをふんだんに使用したケバいい化粧に蛍光色の赤紫のルーージュ。

ブレスレット、ネックレス、指輪ととりあえずつけられる物は全て付けて見ましたと言わんばかりのゴテゴテのファッション。

セーラー服も校則指定の物と微妙に色の違う物を着ており更にリボンは形色全く違う物を使用している。

更に今更まだ履いている人間がいたのかと言うような見事なルーズソックスにロンドンブーツかと見紛う程のかかとの高い変な靴。スカートは国民的アニメである「夜はマグロなアワビさん」に出てくるアワビさんの妹のコンブちゃんかと思うほどのパンモロに近い超々ミニ。

良く見れば顔立ちとしてはかなり綺麗な顔で普通にしていればそれこそ美少女と呼んでも良いかも知れないほどの顔なのだが、やや色黒な肌とそのメリハリのつき過ぎた化粧ではまるでドコゾの原住民のようであり元は魅力的だったのかも知れない顔も台無しである。眉毛細すぎるし。

さて、これはもう、パーフェクトに、欠片ほども校則を守る気が無いのは確実である。

大抵のことは大目に見ようと思っていたのだが、流石にコレを見逃したら風紀委員である俺の存在価値など無いも同然だろう。

ハア、朝から厄介なのに出会っちゃったなあ。でも仕方ない、やるしかないか。

「あの一、君？」

何年生かは解らないが注意するのに舐められるわけにもいかないし取りあえずタメ口で話しかける俺。

「んー、なにー？」

「いや、その、俺風紀委員なんだけど」

「風紀委員？ 何それ？ そんなんうちの学校にあつたっけ？」

「うん、少し前に会長が朝礼で発表したしその時に俺の紹介もあったはずなんだけど……」

「アハハハー！ それじゃあ知らない訳だわ。私朝礼とか出たことないしー！」

「あ、ああ、そうなんだ……」

予想通りのパーフェクトな返答だぜ……しかし今はそんな事でヘコたれてる場合ではないな。

「まあ、君は知らないかもしれないけれど、風紀委員が設立されてそれに俺が任命されたわけ。おっけー？」

「うん、まー何となく。それで私に何か用？」

「いや、その、我は風紀委員だけに君の風紀の乱れを注意しなくちゃならんわけだ。まず生徒心得第9条「特別な事情が無い限り染髪の禁止」第11条「過美な化粧の禁止」第12条の「過度の装飾品の使用の禁止」第82条「ピアスはだめだよ」第24条の禁止されている靴一覧、ほかに制服規定の中のリボンの指定やスカート丈、その他もろもろに君は違反しているわけだ」

ちなみに数字が若い校則は元からあったものなのでマトモなのが数字の大きい校則は現校長が決めたので言葉が無茶苦茶である。

正直、口にするのも恥ずかしい。

「ふーん、それで」

「つまり君は我が菖蒲里高校の生徒として在籍する以上それらの事を修正する義務があり俺はそう修正させるのが仕事なの」

「何それ！ ワケわかんない！」

「何でだよ！」

思わずツツこむ。

「だってえー、何でアンタみたいな一生徒にそれを注意されなくちゃいけない訳？」

「そう言う君みたいな生徒がいるから俺みたいな立場の人間が必要になったの。そう会長が生徒会の方針として決めたんだから」

俺だってやりたくてやってるわけじゃないと言っ言葉は飲み込んでおく。

「何それエー、意味不明だし、そもそも会長、エレン……だったけえ？ アイツも自分が金髪の癖に他人の髪は黒くしろって、それって超オウボウな感じー！」

「マジそうだよねー」

「ホントホント！」

今まで黙っていた周りの取り巻きっぱい連中も合いの手を入れる。

「って、エレンは自毛の本物のブロンドだっつーの。君みたいに染めてないから良いんだよ」

「何それーっ！ 超不公平！」

「不公平も何も……そもそも生徒心得第9条は「特別な事情が無い限り染髪の禁止」だ。理由の無い染髪が禁止されているだけで金髪が禁止されているわけじゃない！」

「っつ……それじゃあー、私のコレも自毛でーす！」

「嘘つくなよ。根元が黒い金髪なんて聞いた事も無いわ。そもそも天然はそんな色にならない。ああもう、埒が明かない。ちよつと生徒帳出して!」

「何でよ、何でアンタなんか私の個人情報教えなくちゃなんない訳? お断りしまーす。私もう行くしいー!」

そう言つてンベーつと舌を出して立ち去ろうとするギャルな生徒。見た目の割りに個人情報とは変な言い回しをする。

しかし、あくまで俺に生徒手帳を見せるつもりは無い様だな。ならいい。

「それなら、俺は君についていつて周りの人に片っ端から君のことを知らないか聞いて回ることにするよ」

「何それ! 何でそんなことするの! 信じらんないサイテー!」

「そうじゃないと君が誰かも解らないし手立ての打ちようが無いからね。じゃあ行こうか?」

「解ったわよ! 見せれば良いんでしょ見せれば!」

そう言つてポケットから生徒手帳を出し地面に叩きつける。

俺はそれを拾い、砂をぱっぱと払つて名前を見る。

「1年D組佐藤美嘉……1年生なんだ。別にいいんだけどさ、俺は二年で君は1年生なんだけど、それにしても随分態度でかいんだね」
「フンッ、大きなお世話よ!」

「ふう。あ、それから周りの君たちも今回は取りあえず見逃すけど少しはマトモな格好してね?」

「うるさいわ! 早く返してよ!」

「はいはい」

そう言つて生徒手帳を手渡す。

佐藤美嘉は取り巻きを連れて去っていった。

なにやら去っていった集団から「サイテー」やら「何なのアイツ」だとか「マジキモい」だとか言う声がした気がするが聞こえなかったことにする。

フウ、なんだか大変な上に損な役回りだな。

それにしても、今の佐藤美嘉……気になるな。妙だ。

如何に我が校がそれほど表面的には荒れては居ないとは言えあそこまで一年生で目立ったことや目立った格好をすれば上の学年の同じような連中から目をつけられそうな物だ。

それでもエレンほどの実力や柳瀬ほどの人徳があれば内心なんと思われていようと乗り切れるだろうが今の佐藤はそれほどの物を持った特別な人間にも見えなかった。

ならなんで一年生であれ程やりたい放題なことが出来るんだ？

すこし、本当に少しだけど気になる存在だ。注意しておくべきかもしれないな。

大井鞆華

――昼休み。

今日は弁当を持っていないので昼飯を求めて購買へと歩く。

朝は、あれから佐藤美嘉ほどの大物は居なかったものの何人か見逃せないほどの大きな校則違反をしている者が居て注意することになるのだが素直に言う事を聞くような奴は一人として居なかった。

俺は学校の中で特別名前が売れているほうでもないし、見た目も普通の男子校生といった風情で特別強そうでもない。

言い方は化石のように古いが所謂「ツツパっている」生徒がそんな俺の注意を素直に受けるわけも無いのだ。

勿論そう言うことも想定はしていたのだがエレン曰く「野放しではなくて見るたびに注意する人間がいるということが重要」らしいんだけど……本当にそうなのかなあ。

つまりこれから毎日俺はコレを続けるわけだよ、ハア、想像しただけで気が重いなあ……。

そんなことを柳瀬と相談したかったのだがアイツは何か用事が入ったのか昼休みになると同時にさっさと教室を出て行ってしまったからそんな暇も無かった。

はあ、いったいどうした物か。

「あつ、神承先輩！」

ん、俺を先輩と呼ぶこの声は……。

そうして振り返ると頭をポニーテールで縛った小動物的な感じがしつつも元氣いっぱいなのとショートカットで大人しそうな感じの小柄な二人の女子生徒が……。

って、確か片方、ポニーの方は見覚えがあるぞ。うん。

「あ、えー……つと、君は確か、荻原さん、だったよね？」

「はい！覚えて貰えて嬉しいです。先輩は今も風紀委員のお仕事ですか？」

「いや、ちよつと昼飯をね」

「あ、そうなんですか。でも今日は朝から風紀委員として働いてましたよね。いろんな人に注意して、立派だったと思います！」

「見てたんだ。恥ずかしいなあ。なんだかうまく行かなくてさあ」

「そんな、神承先輩なら余裕ですって！すつごく強いんですしイチヤモンつける相手はちゃっちゃとやっつけちゃえば良いじゃないですか。こう、剣道の感じでエイヤツと！」

「あのねえ、君は俺に校内で言う事聞かない奴を木刀や竹刀でシバキ倒せって言うの？逆に俺が注意されるというか捕まっちゃうよ」

それも警察に。

「あはは、それもそうですね。でも、それじゃあどうやって態度とか矯正させるんですか？」

「出来る事といえば口頭で注意する事だけさ。エレ……会長はさ、見るたびに注意する人間がいるという事が大事だつて言うんだけどさ、正直どうなのよつて思うよ」

「あ、でもそれつて絶対無駄じゃないと思いますよ。見ている人が居るつて事は絶対気にもなりますし少しは心掛けが変わるかも知れないじゃないですか？」

「ふうん、そんなものかなあ。あ、それより、その、荻原さん？」

「はい。なんです？」

「君と一緒に居るそつちの娘は？」

「あ、すみません。紹介してなかったですね。同じクラスの友達で
おおいさやか
大井鞆華つて言う子です」

なるほど、まだ一年生だし荻原と大井で出席番号が一つ違いだつ

たから仲良くなったと見た！
取りあえず挨拶しとこう。

「そうなんだ、2年で風紀委員の神承って言うんだけど、よろしくね、大井さん」

「あ……は、はい。先輩……」

そう言う顔と顔を紅くしてもじもじと俯いてしまふ。む、なにか変な事したか俺？

「あつ、ごめんなさい神承先輩。この子いい子なんだけど凄く人見知りが激しい上に内気だから、多分照れちゃって……」

「ああ。なるほどね。それは確かに俺のほうが無神経だったかも」

「い、いえ、先輩は何も……その、ごめんなさい……」

「いや、いいつて。気にしないでよ」

「はい……」

うーん、確かに悪い子じゃなさそうなんだけどこのままじゃ会話が續かん。

「そう言えば神承先輩？」

「ん？」

「今日の朝、風紀委員のお仕事の具合はどうでした？」

朝かあ……。

「いやいや、結構大変だったよ。ほら、俺って見た感じ凄く普通じゃない」

「普通……ですか？」

そう言つと不思議そうに首を傾げる荻原さん。
あれ、普通じゃないのか俺？

「いや、その、俺って見た目威厳も無いし余り強そうでも無いしさ……」

なんか普通よりかなり不細工とか言われたら傷つきそうなので慌てて趣旨を言う。

「そう言う意味ですね。はい、その通りだと思います！」

「いや、そこでそんな即答せんでも……」

「ああつ、ごめんなさい！」

「いや、まあ良いんだけど……で、本題に戻るとき、その威厳の無い俺が口頭のみ注意をする訳よ。それでそのちよい Yankee 入ってる生徒が言う事聞くとと思う？」

「それは、多分聞かないですよね……」

「そうなんだよ。その上うつとおしがられるしさ、何だか損な役回りだよ全くさ」

「そうなんですか……」

「それにホンの一部なんだけど凄いのも居てさ。もう欠片ほども校則とか守る気が無いのが居るんだよ。特に佐藤美嘉っていう女子生徒は頭一つ飛び出て酷い物でさ……」

「ええっ!!」

そこで急に別の方から驚きの声が聞こえる。
って、今のは……？

「大井さん……だよね今の？ どうしたの突然大きな声上げて？」

「あ、ああつ、あの、その……」

もじもじもじもじ。

下を向いて言い辛そうにする大井さん。何に驚きの声を上げたんだ？

会話を遡って考えるに……。

「大井さん、佐藤美嘉のこの知ってるの？」

「はううつ、いや、その、あの……」

そう言ってまた顔を紅くして下を向いてしまう。

この反応からするにビンゴか。でもなんで素直に知ってるって言わないんだろう。いくらシャイだとは言え知っている人間の事を知っているという事ぐらいはできるところののだが。

そう思い大井さんのほうを見てみると……。

「……………」

相変わらず下を向いてしまいモジモジしている。

ハア、まあ大した理由は無いのかもしれないし大井さんの性格からして無理に聞くのも可愛そうだ。

ここはいったん退散しよう。

「まあ、どうでもいいや。おつ、こんな時間だ。じゃあ俺は飯買わなくちゃならないしもう行くよ。荻原さん、大井さん、一応役職柄言っとくけど何かあったらいつでも相談には乗るから。それじゃまたね」

「はい。風紀委員頑張ってくださいね先輩！」

「あ……………」

元氣な萩原さんと何か言いたげな大井さんを残し購買へ向う。あ、でも結構話し込んだじゃったしこの時間じゃ……。

そうして既に殆どの商品が売れてしまい閑散としている購買に付いたときに目に入るのは唯一売れ残っている一種類のパン。

我が校名物のまずい物。「クワトロパン」

名前の通り、4種類の具（餡、マーガリン、クリーム、カレー）が一度に楽しめると言う売りのパンなのだがパンの中に仕切りが無いため4種類の具が混ざり合い絶妙に最悪な不協和音を口の中で奏でるという食物兵器だ。

と言うか、パンの中身として甘い物、特にあんことカレーを一緒に入れるのは法律で規制すべきだと思うんだ。

去年入学したてに怖い物見たさで買った時の事を思い出し、そんなことを考える。

ハア、今日は昼食抜きかあ……。

テクニシャン柳瀬

——数日後。

放課後に見回りのため学校中を一回りして生徒会室に行きエレンに特に異常がない事を報告。

そして帰るために荷物を取りに教室に戻って来たところだったのだが……。

「ハア、疲れたああ……」

そう言つと自分の席に座り込んでしまう。

少し考えてみれば解かる事なのだが帰宅部の生活を満喫していた俺にとって風紀委員を全うするという事は予想以上の激務であったのだ。

朝は早く来て校門の前で服装検査、3年の先輩や佐藤美嘉に注意するのは中々に骨の折れる作業で気疲れもする。

放課後にも学校中の見回りをして今の所遭遇はしていないのだが異常や非行があれば注意、その後生徒会室への報告。

それだけではなく風紀委員の腕章は学校に居る間はしていなくてはならないので当然問題行動を見つければ注意する義務を追う。

今までのように素通りして見て見ぬフリは出来ない立場に居るのだ。

これだけの事を今まで何の責任や仕事のなかった人間が1人で請け負うのだ。当然精神身体共かなりの負担になるのは当然の事だった。

「疲れた……」

口に出しても何にもならない事は解かっているのだがため息と共にまた言葉が漏れる。

そう、俺は部活をやめてからは真っ直ぐ家に帰ってゴロゴロするかテレビを見るかほんの僅かな勉強をするのを日課にしていた。

以前の今の時間なら既に家についてのんびりしている所だ。

それが今じゃまだ学校を出ることも出来ず自分の席に座りひとり草臥れている。

窓の外を見ると既に夕暮れとは行かないもののかかなり傾いた西日が見えた。

まだ炎天下、と言うほど暑い季節ではないのだがこの西日の下、家まで歩いて帰る事を考えると更に力を失いそうな気がして憂鬱になる。

ハア、嫌だなあ……。

「あれ、神承じゃないか？」

教室の外からそんな声が聞こえる。

声のした教室の入り口を見ると缶コーヒーを飲みながら意外そうな顔をしてこちらを見る美人が……。

「ああ、柳瀬か」

「どうしたんだい神承。随分くたびれちゃってるじゃない？」

「うん、まあ、実際その通りなんだよ」

「あれ、どうしてまた？」

「いや、だつてさあ……」

そう言うわけで神承君、風紀委員の激務の内容の説明フェイズ！

「……って訳なんだよ。のんびりした習慣が染み付いているこの身体には結構ハードなわけだよ」

「そうなんだ。それは、その、大変だったんだな」

「全くだよ。引き受けたからにはやらなくちゃならないけどさ、正直かなりの負担ではあるよな」

「……」

あれ、返事がない。

柳瀬の方を見てみると少し俯いて辛そうな顔をしている。

「大丈夫か柳瀬？」

「ん、なんでさ？」

「いや、なんか辛そうだし」

「えっ、いや、別になんでもない。平気だ」

「そうか？」

そうは見えないが……どこか辛そうだし。しかしまあ本人が言うのなら恐らく大丈夫なのだろう。

「それよりさ神承、まだ帰らないの？」

「それが、なんだか疲れちゃって立ち上がる気にもなれないんだよね」

「そうなんだ……あ、それじゃ」

そう言っただけで俺の目の前に手に持っていた缶コーヒー、それも俺の好きなクソ甘いジョージアマックスコーヒーを置く柳瀬。

「甘い物取ると元気ですって言うし、私の飲みかけで悪いんだけど飲むかい？」

「へっ、そんな、良いのか？」

「勿論、そんな100円のコーヒーぐらい遠慮しないで良いって」
「いやさ、そう言うことじゃなくて……」

その、間接キス……。

ってそんな事を気にしてしまう俺はガキなのだろうか。

そうだよな、もう高校生なんだしそんなこと気にする年でもないよな。よし！

「じゃあ貰う。ありがとう。あつ、でも……」

そう言えば……。

「なんで柳瀬はこんなクソ甘いコーヒーなんで買ったんだ？ コーヒー余り好きじゃなくて普段は紅茶派だって言ってたじゃないか」
「なっ、そっ、それは……」

急に顔を紅くして目を逸らす柳瀬。ってなんだなんだ！ 不自然すぎるぞ。

「どうかしたのか？」

「いつ、いやっ、なんでもない！」

「いやいやいや、普段冷静な柳瀬がそんなに突然うるたえてなんでも無いってことないだろ？」

「違うつ、なんでもないんだって。本当に何となく買っただけで私の気持ちや想いとは全く関係ないから！ 神承がそれ好きで普段から飲んでる事とか全然関係ないってホント！」

「ん？ まあ、そりゃあ関係ないだろうけどさ。大丈夫か柳瀬、今日の柳瀬なんか少し変だぞ？」

「全然っ、変じゃない！ そんなことより神承、飲むの飲まないの

「!？」

「いや、貰っけどさ」

そう言って缶コーヒーを飲む。

うむ、相変わらずも甘すぎてコーヒー飲んでるのかキャラメル飲んでるのか解からないぐらいの脳死寸前な頭悪い甘さが美味いぜ。

「うん、美味しい、っつーか甘いだけなんだけどな。ありがと、柳瀬」

「あれ、もう良いの？」

「ああ。十分だ」

「ふうん」

そう言っつと柳瀬はその缶を取って残りを飲んでしまう。

う……別に何も特別な事じゃないのに目の前でさっきまで俺が口をつけていたものを平然と飲まれると何だか意識してしまう。

こんな事を考えてしまう俺はエロいのだろうか。

「ふーっ、甘かった。それでさ神承、甘い物とって少しは元気でた？」

「うん、まあ。でももう少し休みたい気分だし先帰ってくれよ」

「……そんなに疲れてるの？」

「まあね。肉体的な疲れも勿論あるけど、それよりも精神的に疲れちゃってさ。なんだか人に注意するには気を使っしね」

「確かに……」

そこまで言っつて何か考えるような仕草をする柳瀬。

と、なにかを思いついたような表情に変化した。

「うん、そうだな、こうすればいいんだ」

「どうかしたか柳瀬？」

（巧い／初めて／二人つきり／シャワー／両親不在／柳瀬は経験済み／シヨック／別にそれでも／柳瀬の／元氣出る／特に身体の一部が元氣に／見たい／ヤバイ／童貞／バレ／死／恥かし）

様々な単語が頭の中でループする。

ヤバイ、非常にヤバイ、頭がフットーしそうだよ！

「おま、うま、巧いって……」

「いやさ、偶に食べる弁当でも神承は美味しいって言ってくれてるし少しは自信もっていいのかなあって思ってるんだけど」

「へ？」

弁当？

「俺が喜ぶ事で柳瀬の巧い事って……もしかして料理？」

「あたりまえじゃないか。神承は他の一体なんだと思ったのさ？」

「なについて、そりゃあお前……」

とても放送できません！

「ハア、全くなんだと思ったのかは全く想像つかないけどねえ……」

「お、おう」

まあ、想像ついたら困るわけだが。

「それで、来るの、それとも来ないのかい？」

そうやって俺の肩をつかんでずいっと近づいてくる柳瀬。
ちよ、近い近い！

「さあどっちなのださ！」

「い、行くよ！」

うわっ、つい反応で返事しちゃった。

「うん、解った。じゃあ今夜は腕によりをかけてご馳走するから、楽しみにしててよ」

「ああ……」

そう返事しながらも、流されやすい自分に少しうんざりする。

でもまあ……。

実際のところ柳瀬の料理は美味いから楽しみだし。

それに目の前で腕を組みながらいつものように少し意地悪そうな感じで、でも嬉しそうに微笑む柳瀬を見ると、流されてみるのも悪くないのかもしれないと思えてくる。

「くくくく、本当に神承は付き合いが良いよね。でもそう言えば私の家に来てくれるのは初めてじゃないか」

「ああ。そうだな。そう言えば柳瀬の家に行ったことは……ん？」

あ、やべえ。

さて。

よく考えたら目的が変わっただけで、当初の両親不在の女の家には2人きりという問題点には何の違いもないと言っ事に気づいたわけだが……。

俺がいた。名前は神承。

家があつた。表札は柳瀬。

まあそんな時計仕掛けな独白で入ったわけだが、つまりは柳瀬に着いてきて奴の家の前に到着したと言うわけだ。

とは言え歩いたわけだから当然到着するにも紆余曲折があつて、途中の商店街では肉屋に寄った柳瀬が大量に何か買い込んでいて、当然のようにそれを持たされたりと色々な事があつたのだが、長くなるので割愛することとする。

つまりそうして柳瀬の家には到着したのだが、これがなかなか立派な白い壁の上品な一戸建てで、まさに中流という俺の家（でもうちも小さいながら一軒家なのだけど）とは少しランクが違う気がする。

とは言えすごいゴージャスな豪邸という趣でもなく中の上、階級で言えばプレッピ^{クラス}ーと言うのが一番近い階級だと思つた。

「ねえ神承。入らないのかい？」

「あ、すまん。せつかくだからお邪魔するぜ」

そうして玄関をくぐる。

うっう、何だか女の家に上がるは初めてだから無駄に緊張するぜ。

「あ、そう言えば……」

ん？

「家に男友達を呼ぶのは初めてだからかな、何だか無駄に緊張するねこれ」

そう言いながら照れたように微笑む柳瀬。

柳瀬、お前もか……！

家に着いたとたん柳瀬は

「部活の後でかなり汗かいてるから本当はシャワーを浴びたいんだけどさ。あまり神承待たせるのも悪いからやめるけど少し着替えさせてよ」

とだけ言い俺を残して部屋へ入って行ってしまった。

初めてで言うのも何だが女性の部屋へ入ってリビングに通されて一人で残されるのは男友達の家へ行ってそうされるのとは少し感じが違うように思う。何となくだが。

やることもないので部屋を見てぼーっとして過ごすこととする。

ぼー……。

はぁ、腹が減ったぜ。

「悪いね神承。お待たせ！」

「ああ、待ったんだ……ぜ？」

なんと！ ホットパンツだとう！

柳瀬、お前その格好は俺がホットパンツフェチだと言うことを解ってやってるのか！

そう言えば柳瀬の私服姿を見るのは初めてな訳だが、これほどの破壊力を秘めた奴だったとは……柳瀬、恐ろしい娘！

「その、なんだ柳瀬。ずいぶんと、その、アレだ、ラフな格好なんだな」

「ん？ ああ。シャワーも浴びれないし料理するときは暑くて汗かくしね。これくらい薄着の方が楽なんだよ」

「そ、そうか……」

「ん、どうしたんだい神承。なんか少し挙動不審で気持ち悪いよ？」
「い、いや、何でもない。何でもないぞ？」

「何で疑問系なのさ？ 全く何でもないようには見えないんだけどね。……まあいいや。神承もおなか減ってるだろうしさつさとご飯にしちゃおうか」

「お、おう。そうしよう」

「うん、ところで神承。好き嫌いはあるかい？」

「特にないな。もちろんゲテモノ系は勘弁願いたいけど、野生的な親父につれられて幼少期にはよくキャンプとか行ってたし多分大抵のものは大丈夫だと思う」

「それは頼もしいね。じゃあレバーとか平気？」

「レバーか……特に好きなものではないが苦手ってほどでもないぜ？」

「そうか。じゃあ使ってかまわないんだね。じゃあ始めようか」

そう言うつと柳瀬は「適当にくつろいでよ」とだけ言い狐の死体の絵と「こん、おまえだったのか。いつも、クリをくれたのは。」と言う文字の入ったエプロンをつけてキッチンへと行った。

つつかそのエプロンどこで買ったんだよ柳瀬……。

さて、こうして始まるお料理タイム、な訳だが。

くつろぐとは行っても料理してる柳瀬の隣でテレビを見るわけにも行かないし、そうなると特にやることもなしで少し暇になってしまったな。

「なあ柳瀬、なんか手伝うこととかあるか」

「ハハハ、気持ちは有り難いけどね神承。男子厨房に入るべからずとまでは言わないけど今日はお客さんなんだから気にしないで良いって。のんびり待っててよ」

「そうか……」

むう、そうなると本格的にやる事が無い訳だが……。

仕方がないので料理してる柳瀬の後ろ姿でも観察することにする。

……。

……………。

料理をしている柳瀬の後ろ姿。

Tシャツ姿の上半身も素晴らしいが、さらにいいのがホットパンツ姿の下半身だ。

少しタイトな作りらしくボディラインのクッキリと出た、つまり具体的に言うとそのよく締まった形の良いお尻のラインが解るのが
ディ・モールド良い！

さらにエプロン姿というのもまた非常に良い。

太股の隙間からエプロンの生地が見えるのも何となくエロスを感じる。

こう下着エプロンに近い感覚を味わえるのだ。なんと言うことでしょう！

また柳瀬の料理をしているという行動もプラスに働いているように思える。

男にとって自分の為に女の子に料理をしてもらえるという事はそれだけでグッと来る行為であるしその上動く度にフリフリと揺れる柳瀬のお尻を見ているとまたこみ上げる物があるというか何というか……。

「ねえ神承？」

「ふおおっ！」

急に柳瀬が振り返ったものだから思わず変な声が出た。

「……？ どうしたのさ突然変な声を上げて」

「いや、何でもない……」

まさか視姦してましたとも言っわけにも行くまい……。

「ふうん……あのさ、今日は中華料理な訳なんだけど味噌汁と中華スープどっちが良い？」

「ん？ まあどっちでも良いよ。その所に特に拘りはないし。っ
て言うかそんなことわざわざ聞かないでも自由に作っちゃえばいい
のに」

「うん、まあそれもそうなんだけどね。折角神承が来てくれたんだ
しできるだけご希望に添った物を作りたいじゃないか」

でも、神承が構わないのなら統一感持たせるためにもスープかな、
などと言いながら料理を再開する柳瀬。

そこまで考えてくれていたとは、良い奴なんだなやっぱり……。

ああ、なんつーか。

とりあえずもう視姦するのはやめる事にしよう。うん。

久しぶりの変態神承

少し離れたところからバシャバシャと水の流れる音が聞こえる。
今俺が居るのは柳瀬の部屋である。勿論入るときに本人に了承は得ている。

ちなみにご本人の柳瀬は洗い物の最中な訳で。
俺一人の食後のくつろぎタイムである。

柳瀬の料理はというと、メニューはニラレバ炒めと餃子とスープとご飯と言う中華料理屋で食う定食のような雑多なメニューだった訳だが、これがもう無茶苦茶に美味かった。

本来炒め物というのは出来立ての熱が最も重要なもので冷めるとんでもなく不味いものだ。

だが、俺は今まで柳瀬の料理は弁当のお裾分けでしか食ったことがなかったのだが、その弁当に入っている当然冷めきっている青椒肉絲ちんじゃなども、味付けが良い為かなり美味かった。

その冷めててすら美味しい炒め物を熱々で食ったのだ。これは今まで食った料理の中でも5本の指に入りそうな旨さであった。

特にニラレバ炒めなどは凄かった。

俺は特に好き嫌いはないと言ったが、それでもレバーはあまり好きな方ではない料理だった。

あの粉っぽさや臭さがキツいのがどうしても気になるからだ。

もちろん雑多な物を幼少期に食べていたから食べれないほど嫌いと言うことはないのだが、自ら好んで食べようと思ったこともないのも事実だ。

だが柳瀬の作ったニラレバ炒めは違った。

初めてレバーを食べて「これはうまい！」と感じた気がする。

具体的に言うとも表面に均一に薄く油の膜が張っているからか粉っ

ばさをそれほど感じなく、臭みもなくレバーの持つうま味の部分だけがニラと合わさりダイレクトに届いてくるのだ。

その感想をそのまま柳瀬に言ってみたら

「そう言ってくれると作った甲斐があつたよ」

と笑顔で答えてくれた。

まあ唯一の欠点と言えばどう見ても量が多く作り過ぎなのがツツコミ所だったが、両親が帰ってきたら食べるから大丈夫なのだという。

本当に大丈夫なら、なぜお前は毎日次の日の弁当に前の日の残りのおかずを詰めてくる羽目になっているんだよと言ったら

「ハハハ、それは、きつとその時大丈夫ではない量になってしまったからだよ」

と笑いながら言っていた。

全く、解っているのかどうなのやら……。

そして二人で食事を終えて現在柳瀬が洗い物中な訳だ。

俺としては手伝うと言ったのだが「今日の神承はお客さんだから」と押し切られて身の置き所も無くなったので柳瀬の部屋を見物しつつ食後の食休みな訳である。

こうして最初の所へ戻ったわけだ。

さて、やってきたのは同級生女子の部屋。

それだけでも特別な場所になり得るのに、その相手がとびつきりに魅力的で人気も高い「柳瀬の部屋」なのだ。

この部屋まで入れると言うのはなかなかのレアチャンスである。そりゃあもう某「徹〇の部屋」なんか目じゃないくらいぜってなモンである。

これはもう、物色しないで男と言えるだろうかいや言えない！

部屋に入る許可を得る時には「洗い物の人手が必要ないなら明日の宿題をしたいから柳瀬の部屋でやっておいて良いか？」と聞いて

了承を得たわけだが、そのままアホの子のように言ったことを実現する必要もあるまい。

と言うわけで、多少の罪悪感を抑えつつも柳瀬の部屋の物色開始である。

部屋全体の感じとしては非常に整然と片づいており清潔感で溢れている綺麗な部屋なのだが年頃の現役ジョシコーサーの部屋としてはシンプルに纏められており、少し地味な印象を受ける。

だが地味一辺倒というわけでも無く、ベッドのシーツがオレンジな所などに微妙な乙女心を感じることもできる。

また、少々変態的な意見だが何となく僅かだが良い匂いがする気がする。

それも香水や芳香剤の匂いではなく、もっと自然な、何とも言えないフレグランスな感じなのだ。

総括的な感想としては非常にシンプルで飾りつきの無い部屋なのだが、誰もが女性的に心地よく感じるように思えるところなんか非常に柳瀬らしい、居心地の良い、気持ちのいい感じのする部屋だと思う。

……うん。なんか想像したとおりで詰まらん。

なんか、こう、もっと以外性のあるファンシーさや陰媚な物体（例えば紐のぱんていえとか）なんか落ちてたら面白いのだが。

などと思っていると、少し意外なものが目に入った。柳瀬のベッドの枕元に置いてある色褪せた熊のぬいぐるみ。

随分と年季が入っているように見えるそれを手に取ってみる。

これは……デイベア、か？

それも、本物だな。これは。

随分と古い感じがするうえに微妙にホツレなどがあるのだが丁寧に修繕されており不思議とボロい印象は受けない。

柳瀬が大切にしている物らしいが枕元にあると言うことは……もしかして柳瀬はこれを毎晩抱いて寝てる……とか？

想像してみる。

外では気丈に振る舞っている姉御肌で男前である柳瀬が夜寝るときにはベッドで熊のぬいぐるみを抱きながら眠りにつくところを。

……。

……。

いかん、鼻血でそう……。

このギャップは、破壊力高いぜ。

これが、萌えという感情なのか！

取りあえずこれは戦利品その1として確保しておき探索を続行することとする。

他にある物は、勉強机。机を開けたり棚のノート類を勝手に読むのは流石にアウト、と言うか流石に越えてはいけない一線だろう。よって机はパス。

他にある物……クローゼットに洋服筆筒。

この中には下着とか入っているのだろうが、落ちている物を拾ったのなら言い訳もつくが、流石にこれらを漁ったら人としてダメすぎるだろう。つーか犯罪だわな犯罪。

と言うわけでこれらもパス。

となると、残るのは……ベッドの下とか。……

男の子のエロ本隠しスポットとして有名なベッドの下だが女子ではどうなのだろうか？

まさかビッシリとエロ本が隠してあるとも思えないが何か秘密の

品でも潜んでいるかもしれない。

と言っわけでチェックタイムだぜ！

屈んで！

そんでもって膝についてベットの下をのぞき込む！

薄暗くて良くは見えんがどうなんだろうか。

だんだんと目が慣れてきたが、うーむ。特に何かがあるようには見えな……。

「へえ、随分と楽しそうな宿題が出てるようだね神承」

ゲエツ、その声は柳瀬！

ベッドの下に頭を入れていることも忘れて猛烈な勢いで頭を上げたものだから当然……。

ゴツッ！

「ぐおおおっ！」

後頭部を強打する訳で、涙目になりながらベッドの下から這い出る。

見上げると、柳瀬が笑顔で仁王立ちしていた。

笑顔は笑顔なのだが、目が笑っていないのがめっちゃ怖い。

「くくくく……楽しい宿題の途中でお邪魔して悪かったね神承。で、宿題の捗り具合について一言聞きたいのだけれど」

ううむ、これほど冷たい視線を向けられるのは初めてだぜ。

でもその見下した視線にちょっとだけ……ソクソク！

「さて神承、何か申し開きとかある？」

何だか冗談で返しても笑ってくれなそうな空気！ 大ピンチだぜ。
もうなんかこういう状態になったら……。

「ごめんなさい」

涙目なのは格好悪いが素直に謝るしかないよな。
だが、俺の謝罪を聞いた柳瀬はふわりと表情を緩め……。

「うん、素直に謝れるところは神承の美点だと思うよ」

勿論、行動は感心しないけどさ。と言いながらも。
だけど、そう、笑顔で言ってくれた。

つまりは、許してくれるのだろう。
良かった、誠意をこめて謝って。

「ムラムラしてやった。今は反省している」とか言った日にはどんな事態になっっていた事やら……。

しかし謝ったからといってすぐに許してくれるとは……やっぱり、
こいつは良い奴だったのだ。

ううう、それに比べて俺は……罪悪感。
やっぱり後悔は後に立つのであった。

これでいいのか。

「ねえ神承、冗談は置いておいて確か私たち、宿題は本当に出ていた気がするのだけどさ？」

「あ、そう言えばそうだな。今日は結構沢山宿題出てるわ」

「うん、それならせつかくだし一緒に済ませちゃおうよ」

「お、そうだな。俺も学校帰りだから宿題持ってるし丁度良いな。確か今日の宿題は……数学と現代文か。結構あるし、数学は面倒だな。苦手科目だし……」

「あれ、神承って数学とか苦手だったけ？」

「数学が苦手って言うか……基本的に理系ダメなんだよ。現代文は少しは出来るんだけど……って言っても柳瀬より成績悪いと思うけどな」

「ふーん。でも国語系の、古語とか漢文はどうなのさ？」

「古語も少し良くないし、漢文に至ってはからっきしだな」

「じゃあ英語はどうだい？」

「日本語で苦労するのに外国語なんてとてもとても……」

「じゃあ日本史とか世界史とかの歴史は？」

「あー暗記するのが面倒でどうも宜しくない成績なんだよな。つかヤバイ」

「……それじゃあ地理はどうだい？」

「俺土地勘無いんだよ」

「それじゃあ美術は？」

「絵心無いんだよなー俺」

「音楽の成績は！？」

「さっぱりだ！」

「全然ダメじゃないか。どうするのさ神承！」

「あー、確かに……」

言われてみると俺って勉強できないんだなあ。良くこの高校入れたよなあ……。

と、暢気な俺をよそに少し焦った表情の柳瀬。

そう言えばコイツは人事でも親身になる性格だったな。

「ねえ神承。私たちも2年生だしそろそろ進路とか考える時期なんだけど、その成績で神承はどうするつもりなのかい？」

「んー、どうなるんだろ」

そう言えば先のことなぞ考えたこともなかったな俺。

「暢気に言ってるけどね神承。私たちもいつまでも子供じゃられないんだよ！解ってるのかい？」

「まあ、そりゃそうだけどさあ」

こーどもーでいーたいー♪

そんなフリーズがふと脳裏によぎった気がするが気のせいだ。

しかしいきなり言われてもなあ。そう言えば進路とか考えてなかったしなあ。

と、暢気な俺を差し置いて慌てていたのから一転、自らを落ち着けるように胸に手を当てて息を吐く柳瀬。

「フウ、オーケーオーケー神承。それじゃあ神承の得意なことはなんだい？」

「んー、剣道は得意だけど……」

「それだ！今からでも剣道部に入りなおしてインターハイで優勝してスポーツ推薦で大学に行けば……」

「うーん、現実的ではあるけどさ、俺はずっと剣道を続けるつもり

は無いのに進学のためだけに剣道を使うつて言うのは、その、なんて言うかさ、誠実さに欠ける行動だと思うぜ俺は？」

「それは、そうだけどさ……」

「あつ、そうだ！ 得意な教科あつたぞ俺！」

「なんだい神承！」

身を乗り出す柳瀬。ここで俺とつておきのネタをつ！

「俺は保健体育が好きな上に得意だからそれを極めてエロ本の編集者になるつて言うのが良いと思うんだ」

「……アハハハハハハ！」

おつ、ウケたか？

「ハハハハハハ……全く面白くないよ神承！」

ウケなかった。柳瀬には少し高度なネタであつたか。

「まじめに考えなよ神承！ これは神承自身の問題なんだよ！」

「そうは言われてもな……」

「神承がそうやって何気なく過ごしている間にも私たちは大人になつていくんだよ。神承はそうやって何気なく日々を消費していくつもりかい？」

「どうなんだろ？」

「ハア、これだから神承は。ねえ神承、例えばだよ。1日在ると人はいろんな事が出来ると言うけれどさ、神承は昨日一日でなにをしたつていうんだい？」

「昨日……」

昨日、昨日つて言えば……。

「昨日、そんな昔のことは覚えてないなあ」
「神承はレイモンド・チャンドラーかい！」

スパコーン！

痛い。スリッパで頭をはたかれた。

「痛いじゃないか」

「神承がくだらないボケをするからだよ！」

「うん、悪かった」

本当に昨日のことをあまり思い出せなかったという事は黙っておこう。

あと、ツツコムならそこはフィリップ・マローウと言ってほしかった。残念！

「ハア、肝心の神承がこれだからねえ……私の考えている事だってきつと……」

「ん？ 何か言ったか柳瀬？」

「別に……何でもないよ神承」

「そうか」

まあ、これ以上柳瀬の言う難しい話を聞くのも疲れたしな。別に良いか。

「それより柳瀬。そんな先のことは解らないけれど一つだけ確かなことがあるんだけどさ」

「なんなの？」

「そろそろ宿題やらないと終わらない訳なんだが……」

「……………そうだね。取りあえず目先の問題から片づける事にしよう」

うか」

「おう、そうしよつぜ」

ふう、まあ取りあえずひと段落かな。

でも言われてみたら本当に昨日俺はなにをしてただっけ……。

真綿の海へ（柳瀬の。。マッサージ偏）

「んんんううう……」

ちやぶ台に乗った八割程は片の付いた宿題を見ながら伸びをする。ちやぶ台の向かいでは文句一つ言わず柳瀬が黙々とペンを走らせ続けているわけだが、実が奴がやっているの宿題ではない。

柳瀬はすでに予習に取りかかっているのだ。

柳瀬自身宿題は終わつたのだが俺がまだ終わっていないから付き合ってくれているらしい。律儀な奴だぜ。

だが俺としてはそれならいっそのこと答えを教えてほしい所なのだがそれは俺のためにならないからダメらしい。

真面目と言うか何というか……。

だが、解らないところがあつた時にも聞けば解き方を教えてくれるしそこら辺はやっぱり良い奴なのであつた。

と、言うわけで、普段からは考えられないほどの速いペースで宿題を片付けつつあるのだが、なにぶん普段やりなれない勉強をやつたせい、疲れて体中が痛い。

つか、鉛筆持ち慣れて無いせいで、鉛筆を持っていると指にめり込んで痛くてやつとれん。全く……どれだけ勉強し慣れていないんだ俺は。

と、言うわけで冒頭へ戻るのであつた。

「んんんうううつつ……くうううう……ふはあああああ
ああ………」

「ずいぶんお疲れのようだね神承？」

「ああ、なんか勉強し慣れていないせいで鉛筆を持った指先が痛い。」

「ーが凹んできたんだけど……」

「くくくくく、そんな風になってしまうなんて、普段どれだけ勉強していないのさ神承は」

「ああ、全く言葉もないぜ。ただそれだけじゃなくて……」

そう言いつつ伸びをする。

背中あたりからバキバキバキキと言う景気の良い音が聞こえる。

「すごい音がしているね神承」

「ああ。全身が結構痛いかも。最近忙しかったし長時間の勉強は疲れた現代人の身体には結構答えるんすよ」

「……そうなんだ」

そう言つと、少し考えるようなそぶりをして黙ってしまう柳瀬。
どうしたんだろ。

……はあ、それにしてもなんか一度休むと戻りたくなくなるものだよね。はああああー……。

「ねえ神承？」

「ふはあああーっ、なに柳瀬？」

「そのさ、随分お疲れみたいだしもし良かったら私がマッサージしてあげようか？」

「へ、マッサージ？ 柳瀬が？」

「他に誰がいるって言うのさ？」

「だって、その、出来るのか柳瀬」

「うん。部活の後に筋肉痛にならないためにマッサージとか自分でしてたし、他人にはやったこと無いけれど多分出来ないって事は無いと思うんだよね」

「ふーん。まあ、そうだな。やらないよりはやった方がなんだって良いだろ。お願いするわ」

「くくく、そうかい。それじゃあそこにうつ伏せになって寝てくれないかい？」

「そこ……？」

そうして柳瀬が指さした先にあるのは……ベッド。柳瀬の。

「つて、え？ 良いのか、そこに俺が寝て？」

「ん？ だって床に直にうつ伏せに神承を寝かすわけにもいかないじゃない。むしろベッドで何かダメな理由とかあるのかい？」

「いや、だって……」

男友達の家に行ったときだってベッドに乗られたりするのを嫌がる奴は結構いる。

俺は布団で寝てるから良く解らないけれど自分の寝ているところに清潔でない状態の私服で他人が寝るといふのは多分男でも嫌なものなのだろう。

まして柳瀬は女なのに、そう言うの気にしないのだろうか……？

「何を迷っているのかは知らないけれど、嫌じゃないんならさつさと寝てもらえるかい？」

「お、おう……」

そう言うのと恐る恐る柳瀬のベッドに上がりうつ伏せになる。

瞬間、シーツに染み着いた、匂いと言う程に強すぎない僅かな香りが鼻を擽る。

これ、なんだろう……。

香水や石鹸の匂いとは違うのだけど、決して不快な香りではなくて、むしろどこか惹かれる魅力的な、でも何処かでかいだことがあるような気もする、僅に甘い香り。

多分、これは柳瀬の体臭とかそう言った生々しいものじゃなくて、もっと、こう、女性特有の、なにか特別なものの気がした。

思わず本能の赴くままにすうと息を吸い込むと、じんわりと脳の奥が痺れるような感じがした。

ふう、なんだか、落ち着くような、安らぐような、そんな香りだ。

「準備は良いみたいだね神承」

「あ、ああ」

ふと、その柳瀬の声で意識が現実に戻される。

なんだか、頭の奥がまだぼーっとしてる気がするけどまあいい。落ち着こう。

……さて、落ち着いたんだけど、そう言えば俺をベットにうつ伏せに寝かして柳瀬はどうやって俺にマッサージするつもりなのだろうか？

ふによん。

「ふおおおおっ！」

突如背中を感じた絶妙な柔らかさの感触に思わず奇声を発してしまふ。

「ど、どうしたのさ神承？」

「お、おま、おま、何やって」

「ああ、マッサージするから神承の上に乗らせてもらっただけど、

大丈夫？ 重くはないかい？」

なんとおー！

「重くはないけど、そ、それじゃ、おま、おまえ、この、」

背中に感じる堅すぎず柔らかすぎずな絶妙すぎる好感触の物体は、
柳瀬の、し、し、し……り？

「重くない……か。くくくく、それは良かったよ」

いやいやいやいや、良くないだろ、いや、感触はでいもーると良
いんだけどそう言う問題じゃなくて純粹異性交遊的な意味でその俺
と柳瀬の関係から言ってこの行為はどうかというかそもそもそれが
どうかと言う問題じゃなくてあれれそもそもなにをおれはああい
うつもりだったのかとかせなかのかんしょくがきもちよくてあ
のやなせのしりがあばばば……。

「それじゃあ行くよ神承！」

バキキキキキ！

「ふぐおうつつ！」

なんじゃこの突然の激痛は！

「あー、こりゃ随分凝ってるね。少し強く行くよっ！」

ビキキキキキ！

「うげえっ！ いただきますだいよ柳瀬！」

「なに、嫌よ嫌よも……ってね！」

ベキベキベキ！

「ひでぶっ！」

「ああ、痛むみたいだね結構。でも最初はそう言っものなんだよ。ジキに気持ちよくなるはずだから……っ！」

ボキボキボキキッ！

「たわらばっ！ ちょ、ちょ、おまつ！」

「ククククク、なに、すぐよくなるさ」

そ、そんなあ……。

柳瀬に頼んだのは失敗だったのか……？

それと、お前、そのセリフは女子高生の物じゃない……。

—— 十分後。

「どうだい。だからすぐ気持ち良くなるって言っただろ？」

「あ、ああ、あふうん……」

そう。奇跡的なことに痛いのは最初だけで本当にすぐに気持ちよくなったのである。

そうなるまでは地獄だったのだがそうってからには正反対だった。

凝ったところをほぐして腕、肩、背中と満遍なくやってくれるのだ。

背中に感じる柳瀬の重さの感触と相まって、俺は今、まさに天国的な心地良さを感じているのであった。

「あつ、ああつ……そこつ、いい、あつ、くうつ……柳瀬え……」

「……ちよつと、変な声を上げないでくれないか神承。私まで変な気分になりそうだよ」

なにか柳瀬が言っているが正直良く理解できるほどの余裕はない。

「そうはあ、言つてえつ……もつ、はああー、気持ちいいんだからさあ……」

「ハア、まあ喜んで貰えるのはうれしいけれどね」

そう言いつつマッサージを続けてくれる柳瀬。

はああああー、マジで癖になりそうな気持ちよさだぜ。

「……………ねえ、神承？」

「ん、んんつ、んあ？」

「今日会ったときにさ、随分と疲れていたみたいだけど、少しは直った？」

「ん、んんんつ。ああ。少なくとも……今は……極楽かも……」

「そうか、それは、よかった……」

「あ、ああ……」

何を言っているのかは良く聞き取れないし、もちろん柳瀬の様子を見ることなど叶わないのだけど、何となく、背中の後ろから感じる空気がふわりと柔らかくなった気がした。

ああ、でも、いかん。天国的な気持ちよさと、疲労の解れていく沈むような感覚にだんだん頭がぼーっとして意識が遠のいて行っている感じがする。

「あ、あああああ……やば……気持ちよすぎて少し眠くなったかも……」

「ふふふ……そう。それなら、少しだけなら、寝ても良いよ神承？」

「そ、そうなのかあ……？ いや、でもいくら何でもそれはああああああー……」

「ねえ、神承の疲れがとれて気持ちいいって言うんならそれは私にとっても嬉しいことなんだし、ちゃんと起こすからさ」

「い、いいのかああー……？」

「ふふふ、いいんだよ。おやすみ神承」

「あ、あふうー……う……う……う……っ、ん……」

そうして、俺の意識は、綿の海に落ちていくような心地良さを感じながら沈んでいった。

最後に……。

「……本当に、良かった」

そんな、聞き取れる筈の無い声がしたのを聞いたような気がしながら。

真綿の海へ（柳瀬の。。。マッサージ偏）（後書き）

いきなりのお詫びになります。長い間が空いてしまった事、待っていてくださった方には、本当にご迷惑をかけました。

理由は非常に個人的な問題なうえ、言い訳になってしまっているのでここには書きませんが、私自身の仕事の問題から来るライフスタイルの変化。心理的健康的問題等諸所の事情が重なって、更新をする事が出来ませんでした。

あまりお詫びと言いつつ訳を重ねても見てくださる方に不快な思いをさせる事と思いますので、細かい事は連絡帳として昔作ったブログの方へと書いておきます。

あまりいないとは思いますが、私の言い訳を聞いてくださると言う方はそちらの方をご覧ください。と頂けると助かります。

一応リンクはついていてと思います。htmlタグの使い方に自信が無いのでURLを貼っておきます。

<http://19320925.blogspot.fc2.com/blog-entry-39.html>

です。

更新が出来なかった事、すみませんでした。

劣情と愛情

「すう……すう……」

完全な無の状態から幾分かは何か確かなものがあるような、ぼんやりとした感覚へと、起きあがってくる。

この意識がサルベージされるような感覚は、眠りから覚めていく状態だと頭の何処かで理解しながらも、自発的に何かをすることも無くぼんやりとしている。

でも、今感じているこの時間は、今朝まで毎日過ごしていった「その時間」に比べてとても心地良い。

「すう……すう……」

何がどう違うのかは解らないけれど、いつもと違う、優しい空気に身体が包まれているような、そんな感じ。

肌に触れる布団の感触もいつもよりも柔らかく、そして清潔な感触がする気がするのだけれど……。

「すう……すう……」

そして何よりも今朝まで感じていた気だるさや、僅かな筋肉痛や疲れの蓄積などの不快感が綺麗に消えているのだ。

それによって今、俺は久しぶりにこの微睡み時間をやすらぎとして感じる事ができている。

「すう……すう……」

だんだんと覚醒し始めた意識で、ああ、俺は今いつもと違うところ

ろで目が覚めたのだなと悟る。

何より自分以外の気配と、あと寝息が聞こえるのだし。

と言うわけで、現実を見るべく胡乱な脳で顔だけを音のする方に振り向ける。

と……。

「すう……すう……すう……」

……。

……。

……。

心地良い意識の中の微睡みのやすらぎだとか、寝惚けナマコに映るボヤケた世界だとか、そんなものは一瞬で吹き飛んだ。

何故だ。何故だ何故だ何故だ！

何故柳瀬が俺と同じベットで寝ている。それも目と鼻の先の距離に！

格好はと言うとうつ伏せで寝ていた俺の顔を向けた目と鼻の先に柳瀬の顔があるという事だから、つまり柳瀬は横向きになって俺の方を向いて寝ているというわけだ。

ドアップの柳瀬の顔を見ると、ああ、閉じた眼がさらに整った顔を強調してるなとかそれにしてもマツゲ長いなーとかその厚すぎない濡れた唇もすごく……セクシーですとかやっぱりこうして近くで見るとコイツすごい美人だし人気があるのも当然だよなとかその無防備な寝顔が正直たまりませんとか一瞬で（約0.3秒）そりゃあもう色々なことを考えた訳なのだが取りあえず今はそんな事は決して問題ではなくて……。

何故柳瀬がここで寝ている！

何故柳瀬が俺と同じベットで寝ている！

二度言ったよ！ 大事なことから！

一瞬でクリアになった意識で考えてみる。 頑張れ俺のピンク色の脳細胞！

まず記憶を辿ると、俺は柳瀬の家にきていた。 オーケー。

そして晩飯を御馳走になりその後、柳瀬の部屋で勉強していた。

オーケー。

そしてその後疲れた俺を柳瀬が上に乗ってマッサージしてくれた。 オーケーブラザー！

そしてその後……。

あれ、ここから意識がないな。

そうだ、そうそうそう、確かすごく気持ちよくなっちゃって俺は眠くなったんだ。

そしてそれを柳瀬に告げたら確か柳瀬はこう言ったんだ。

「少しだけなら、寝ても良いよ」と。

そこからの記憶がないと言うことは俺はそこで意識を手放したと考えていいだろう。

ならばだ、その時確かに起きていた筈の柳瀬が何故俺の隣で寝ている。

なあ、何故なんだよ柳瀬……。

「……………すう……………すう……………」

もう一度至近距離、それこそ少しでも顔を動かせばキスでもしてしまいそうな距離の顔を見ている。

その整った顔を見ていると、何だか良く解らない感情が込み上げてくる。

ふと、普段感じない蠱惑的な匂いがした気がする。

決して不快ではないのだが、僅かに汗の匂いと柔らかな石鹸のよくな匂い、そして自分とは確かに違う女性そのものの匂い。

さっきシャツに顔を埋めたときに感じた匂いと何処か似ていて、だが確かに違う。

これは……柳瀬の匂いだ。

あ、そう言えばコイツ部活で汗かいててシャワー浴びたいけど無理だから着替えだけするとか言ってたな。

ふと、その匂い誘われるように横向きに寝ている柳瀬の肩に手を掛ける。

「ん、んんう……すう……すう……」

柳瀬は僅かに身じろぎしたが目を覚ましそうな様子もなく眠り続けている。

ふと、自身のズボンに違和感を感じてそちらをみてる。

う、うおおおう……。

詳しくは説明できないのだがそこにはタケルJrである俺命名の「ヤマト」がStand upしてその存在をHelloしている。

あ、そう言えば柳瀬が作った料理はレバーたっぷりのニラレバ炒めだとかニンニクたっぷりの餃子だとかおよそ女子高生が作りそうにない精の付きそうな元気の出るメニューばかりだったな。

そのお陰で現在身体の一部が不必要に元気になっている訳だが

……。

そんなことを思いつつ、目の前の柳瀬に視線を戻す。

柳瀬は目の前で男がそんな状態になっていることも知らず Sleeping Beautyといった雰囲気は無邪気な寝顔で眠り続けている。

なあ、なんでだよ。なんでお前はそうも俺の隣で、男の隣で無防備に寝ていられるんだよ。

俺だって……。

だが、そこまで思った時に、柳瀬の考えを示すある一つの仮説が頭に浮かんだ。

放課後の教室であつた俺を思わせぶりな口調で両親不在の家へと誘ったこと。

疲れたと言った俺に元気の出る、それも下手すると身体の一部が元気になる精の付く料理を御馳走してくれたこと。

マッサージをしてみると俺をベットの上に寝かせて、無防備に俺の上へ乗ったりしたこと。

これらの行動から考えられることは。

もしかして、柳瀬は俺を誘っている……？

据え膳食わぬは云々と言う言葉からもわかるようにもしも柳瀬が俺を誘っているのだとしたら俺が手を出さないのは失礼に当たる訳だが……。

いや、だがそれだけの理由から判断して軽率に行動することは危険だ。

もしも俺の勘違いだったとしたら、きっと柳瀬は今までのように

俺に笑いかけてくれることは無くなるだろうし、友達としてもいられないだろう。

と言うか、俺は犯罪者になってしまふ。

だが、もしもそうだったとしたら……いや、それ以前の問題があるな。

俺の気持ちはどうなんだ。

俺は、どう思っているんだ？

この、柳瀬のことを。

好きかと言われれば好きだと即答できるだろう。

だが、その好きの種類はと問われれば少しばかり考え込んでしまふ。

高校で出会ったからもっともよく話すようになった友人として？
それとも単に席の近いクラスメートとして？
それとも尊敬する友人として？

……それとも、一人の女の子として？

解らない。答えられない。

今朝までなら、男前でかつこよくて、尊敬できる最高の友人として好きなんだと即答できたような気がする。

でも、今は……。

この綺麗に片づいた部屋の雰囲気も。

本棚に並ぶ本の種類も。

清潔感のあるオレンジのシートも。

枕元に置いてある、微かにどこかで見た事があるような気がする
デイベアのぬいぐるみも。

その無防備な寝顔も。

綺麗な髪も。

確かに主張している膨らみも。

細く引き締まった腕と腰も。

すべすべとしている柔らかそうな足も。

そのホットパンツ越しの尻の曲線も。

触ったところから伝わってくる確かな体温も。

彼女自身から香る汗と石鹸と、そして僅かに混じった男のものと
は確かに違う匂いも。

すべてが俺に向けて、目の前の存在は確かに「少女」なのだと言
張ってくる。

その少女が、女が、持っている空気を、存在感を、匂いを、色気
を知って、まだ、ただの少し男前な友人なんだよと言いきれるのか？

解らない。解らない。

だが、解らないまま目の前の存在に、誘蛾灯に惹き寄せられる昆
虫のように手を伸ばしてしまう。

そして、柳瀬の肩を押して彼女を仰向けに倒す。

髪と胸を僅かに揺らしながら更に無防備に、仰向けにその肢体を
見せる柳瀬。

その仰向けに寝ている柳瀬を跨ぐように両肩の外側に手を突いて
上から柳瀬の顔を見る。

あと数センチ。数センチ顔を下ろせばキスが出来るという距離で

その無防備な寝顔を見て。

いつもと同じ、その整った顔を見て俺は……。

欲情しているのか？

欲しいと思っているのか？

ああ。俺は今、確かに柳瀬に……。

「んんうん……ふああ……つつん。かみ……じょう？」

仰向けに倒した衝撃で目が覚めたのだろうか。僅かに柳瀬の目が細く開く。

「ああ」

恐ろしく低い声が出たことに僅かに驚きながらも、もう止められない欲情を声に乗せて返事をする。

「んんうん……ふふふ……神承だあ……。ねえ、神承、元気……でたあ？」

まだハッキリとは目が覚めていないのだろう。俺が覆い被さった状態で、目と鼻の先に顔があるにも関わらず寝ぼけたような感じで、普段より僅かに甘い声でポツポツとそんな事を言う柳瀬。

「ああ、元気になったぜ。お前のお陰でな」

「んふふふう……それは……よかったよ……」

「そうかい」

そう言いそのまま欲情のままにその濡れた唇にキスを落とそうとして。

「神承には……苦勞を掛けて……神承が疲れてるのも……全部、私の、せいだから……」

柳瀬のそんな言葉に身体が固まった。

今、柳瀬はなんて言った？

全部私のせいだから？

確かにそう言った。

だが……どういう意味だ？

何が柳瀬のせいだと言うんだ。

「なあ柳瀬、なにがお前のせいなんだって言うんだよ？」

「……うつうん……ふにゆう……すう……すう……」

いかん。また寝始めたコイツ。

今は柳瀬の考えを聞くべき時だって言うのにコイツは……！

「なあ柳瀬、だからなにが全部お前のせいだって言うんだよ！」

「ふにゆう……？」

「だから何でお前のせいで俺が疲れているって言うんだよ！」

「んうう……だってえ……神承に……やりたいと思ってなかったあ……風紀委員を、やらせたのはあ……私だからあ……」

「でも柳瀬は推薦しただけだし、別に強制したわけでもない。決めたのは俺だろ？」

「でもあ……私が……言わなかったら神承はあ……余分な苦勞を負うこともなかったんだし……そのせいで神承が……あんなに疲れ

ちゃって……」

「そりゃあ仕事をやれば当然疲れるさ。何も柳瀬は悪くないだろ？」
「んんうん……でも、神承は確かに……私のせいで疲れてる……だから、私がそれを治すのも……私の当然の……それに……あんなに疲れて……神承が……ふにゆう……」

あ、落ちた。

そこまで言って柳瀬はまたすうすうと寝息を立てて眠り始めた。

ハア……。

もう、お人好しというか何と言うか……。

風紀委員に推薦したのは確かに柳瀬だが引き受ると決定したのは俺だ。

だから、そこで俺が苦勞しようと思われようと思うとすべては俺の責任の筈なのだ。

なのにそれで疲れている俺を見て柳瀬は自分の責任だと思いこんで、純粋な気持ちと責任感からか、それを、俺の疲れを癒そうと色々とやってくれたわけだ。

きつと柳瀬は今までもこんな風にしないでいい苦勞を背負い込んできたんだろう。

今日だってそうだ。

きつとこれだけ深く無防備に眠ってしまうのだって柳瀬自身も面倒見の良い剣道部主将として俺と同じかそれ以上に忙しい日々を送って疲れているのだろう。

でもそれだけ疲れていても背負わなくて良い俺への罪悪感と責任感か、或いは友情からか、俺に元気の出る飯を作ってくれた上に勉強にも付き合ってくれてマッサージまでしてくれた。

だけど、そんな柳瀬に対して俺が取った行動は……。

柳瀬の純粋な好意を邪推して、そして身勝手な欲情を抱いて、それを柳瀬に一方的にぶつけようとした事だけ。

こんな感情は、ただの劣情だ。

柳瀬の行動の真意と、それに比べて浅はかな俺の感情と行動に対して罪悪感で胸が潰されそうな気持ちになる。

最低だ……俺って。

でも、その反面……。

こんな俺のことをここまで思ってくれて、ここまでしてくれた柳瀬に対して、さっきまで柳瀬に感じていた生々しい感情とは違う、なにか暖かい感情が溢れてくる。

ああ、コイツはこんなに純粋で、俺のことを気に掛けてくれて、お人好しで……。

その暖かな気持ちに乘せられるように動いた心に、ハッキリとそれを自覚する事ができた。

俺は、柳瀬のことが好きだ。

女としてとか友人としてとか関係なく、コイツのことを純粋に好ましく思っている。

それも今までにないくらいに強く。愛しく思っていると言っても良いほどの感情で。

だから、そんな俺に出来る事は、信頼して仕事を任せてくれたコイツのためにも、今出来る自分の最善を尽くしていこうと。

俺の隣で無防備に寝顔を向けてくれる柳瀬を見ながら、深くそう

思
っ
た。
。

劣情と愛情（後書き）

今回は多少早く更新する事ができました。

とはいっても多分これで人並みなのでしょうか……。

でも考えてみればやっぱり様々な要因があつて更新速度と言つのは決まってくるんですよ。当たり前ですけど。

努力はしているのですが。文章を書くのは難しいです。

早く書けた要因や細かい事はお目汚しになるので気が向いたときにブログにでも書いておきます。

そう言えば一つだけ報告を。

依然ネット小説ランキングに登録していたのですがランキングの方をあまりチェックしていなかったその間にこの小説家になろうでアップされている小説はランキング登録が禁止と言つことになったらしく、この小説も削除されてしまいました。

かなり前の話なんですけどね。

気付いた時はやはり少しショックでした。

それでそれに代わる物としてどこかに登録しようとも考えたのですが。

更新速度が遅いくせに登録するというのがもやっぱり無責任かとも思い躊躇していました。

これからだと私自身の予定とか都合からして8月の終わりと9月の頭、場合によっては10月か来年の1月には全く更新できなくなる時期があるのは解かっていますし。

しかし、やはりどこかに登録する事によって空いた時間を小説に出るだけ割こうというモチベーションにも繋がるかもしれないそんなどこかに登録しようと思います。

その報告まで。

それから、御意見、御感想、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763e/>

男前な友人

2010年10月13日11時32分発行